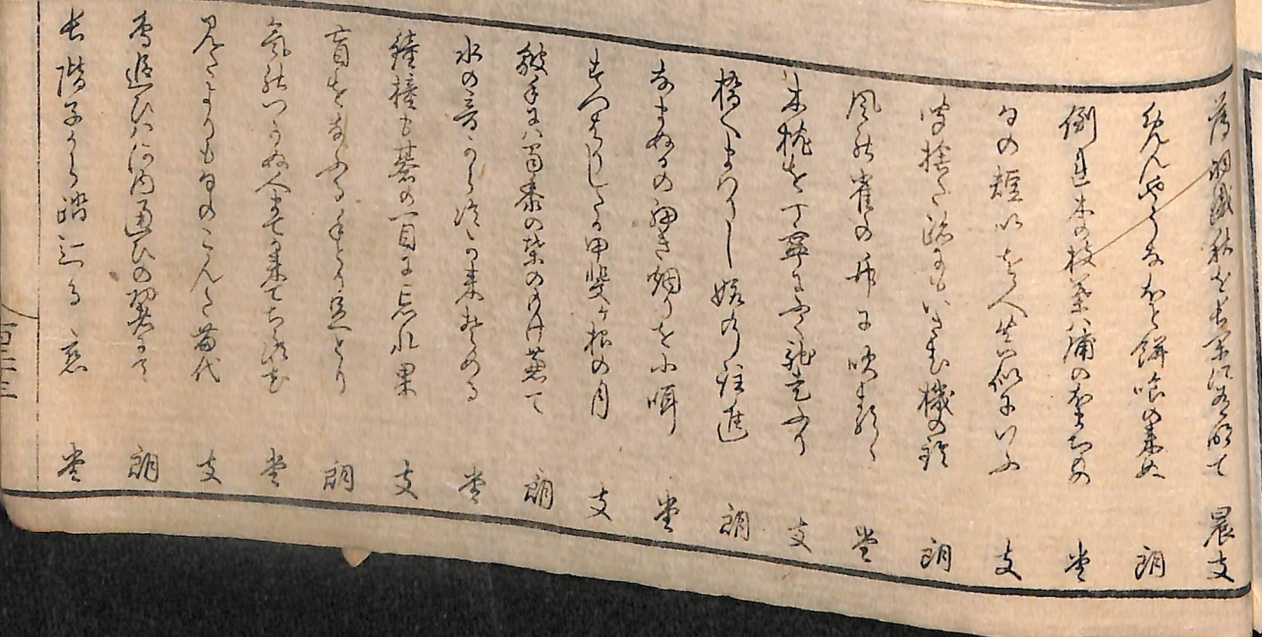

911.3
シ

県埜郡次閑村高次

本若之間

東都　禾木園校輯

茨城縣眞壁郡大國村高久

宮本芳之助

ちつのる丈起上りけり秋の萩　梅室
消行空に消残る月　宗人
鶉なる背戸から入せて居る人　室
酒に飢し顔の勢なき　人
散てくる庵も表積表積る　室
構る音の常なる山裾　人
朱塗りの臺より高き膳の杯　室
呑兼かしけに惜きぬくもる　人
茶を汲て落れ盆に柿の葉　室
捨てゝ日のめもさゝぬ地面なり　人
菜畑の彼方に雲生き残り　室
添てゝ綾しとねのまゝ妻なを　人
秋の月なや湖水の青寒く　室
風情しるらぬ霧結ぶ之七　人

木学雑も打門の石　室
迷ふけて息子あくさきむ　人
むかしまく船従の狼すか　室
寛哉く鐘の河やく　人
咏子名夏に詠らゝかな多　、
細雑して俗みある岡　室
のゝ咲く飾簾衣やうせあき　人
嘉あ打ちいふも雛流　室
又君の君もつるゝね扉下口　人
丁子湯総る初室の蚊　室
総衣せまきはのせとく枯て　人
ち役かゝはれハるに難杢　室
落つゝるやうて粗忽なる仕　人
踊諸の業ゝの二三年もある　室
山辺の脂岩木に月ひらふ　人
数寄屋茅屋に秋のくれかな　室
むかしと云ちる紅葉掃さく　人
見の塔にくに貝ともち向る　室

瑯琳をかくねえさらぬ島社豆　人
きりにち出ふらさい鶏か尻くれ　室
風ななくふ見補ふも茜　人
池の向ふをかけ出る雛子　室
ちらちと見てもあく嫁一筆く　清風
舩のち丸の子鳴とめる虫　貝桃
薄情其内の燐に助て　、
手紙の様くいひなしそ痘　風
船も形い花蔵ちつて極起　、
出宋あ固ぃ浉乞のも津　桃
浮萍の群集てよ候ぐ溌つ追　、
指業金りらさ火る豚渋　風
内ゝ陶役の事も済て居　桃
いやゝ形ゝ面つ子寄り惣数　風
あく槐重い痲疹なさぐ春　桃
稲刈よゝしあゝをゝ川　風
為ふ波く以ても内兄の上座ある　、

篁の佐のけを伐切まきく　桃
宗ゝ呂はやめるし稲おれ　風
合点のゆかぬ俄道心　桃
古の名曲実の煙のたつる立　風
妻は世着せくしたる猫　桃
笠縫の滑井の暖い日ゝけく　風
おちらちら方ハ佐藤の道芝　桃
古子素姓の寿取く増く数り　風
君の咄もたえる細声　桃
寐ころんて恋病一本酒合　風
かりくし夜ハ深き香店　桃
他国出の涼みもつひゆるこし　丶
子供等ゝの木彩るさぬ　風
鼻遠のたへ無さハ捨らぬハ　桃
罠の狐を鍛て映する　風
煮ハやつて粥こ鍋の運ハ月　桃
踊崩の中まのまゝ、　風
紙字なさく猫をあそくる笑ひ　丶
まきる宮もなかぬ番茶子　風
押込の付け場にひとく固り兎　桃
ゆつられ月の外は箱一幅　風
御山子むの顔面をとまあらし　桃
ちるともやまぬ香の囀　風
響の泉ハ瀬も見え流天の川　漢物
霞まで咲ちる葉との棲居　宜菜
荒の道ふ芝ハ折りくりて兎　物
旅人の世なゝ贈ゝ取る月　菫
御雑炊の減り連る茶漬
掃除次手に障子張せる
時雨まで行きぬ柿の落葉して
のらくら生をたく芙蓉
引提てそろく次室腐芭
客住のうちまでゐけるに大寺
柳並ハそこ見えても走き一里
一日十日を噂そてうれ蝶

月のさすまに粟穂を切仕舞　物
秋は角力幕を張る空　茉
見送まで添て旅人の延子あり　物
鏡を研ぐ跡を掃出し　茉
六とせにみても行ぬ女の雲　物
茸のけむく隣のくへ　茉
煙雲ぬ貌〻の畠を吹き遣　、
硯を出して手紙を送り遣　物
蔵緒に人柄こゆる朱衣あり　茉
いつのまにか鶴の寒遠ざかり　物
律義ゝ雲のぬさに憚まて　茉
先代目より大師講の粥　物
大風吹て暖かりける二幅　茉
こゝに二ちよ笠の赤くお習ひ擂　物
西にむき姪心よく咲つめり　茉
噂どもすみてにぎなく荒蒔　物
宵の雲月を見逃して旅違て　茉
深いと知りぬ汲めて来る柿　物

学ん吹売者らく船の竿　茉
銭宵菜のゝ汲の仕る橋　物
家の子はいく延ち居る屋敷町　。茉
菱餅つく釣竿の音　物
忘とくと家本の幸は吸殻ゝ　茉
垣の隙藤に轉がるゝ　物

出遊やそれと門や留守衣　天遊
寺と鵜とも志連ゝ一群　飲武
絹て赤る額をはて子節句て　遊
昔以覚の水はやぬきさ　武
分おきぬ印をつけて菊の苗　遊
雲霧ある夕は明しつまれ　武
雇はれ紫の傍烏帽子　遊
またすもはや流を洗子孫　武
井戸端手桂はあ帰る夜来　遊
閑しさうて博奕う雲ゝて　武
一筋子出して持せる女伎　遊

肩のさすきに栗鐘を切仕舞　物

秋の日は角力幕を染る宮　葉

見送まて漕て嫁入の迎なり　物

鏡を研き流を掃出し　葉

云と見てあてもつけぬ虫の雪　物

茸の汁むく湖のくへ　葉

焼雲に頼く鳥を吹送　、

秋を出して子供遊ひけり　物

蓋綴に人柄さゆる葉なり　葉

いつの日も形勝ての遠きり　物

陣ぬけさ雪のぬくさに嬉しれて　葉

炙くり寺る大師講の粥　物

人衆ひて膝かのりける二幅箸　葉

こ山に二十五菩の衣くる宵待　物

西にちる桜あれよく咲つかり　葉

峰とを形りに咲く菫哉　物

雲の雲月を見送に参詣て　葉

催いと払ふ約めて来る樽　物

掌へ吹先たて船の中　葉

鉢霜葉の河の行る禰　物

家の子はいく足き居り屋敷町　。葉

蓬餅つく暮過の音　物

忘とくと家本の中は暖坑き　葉

垣の紫藤に轉かゝる　物

出迎なて衣むし門や初月夜　大遊

寿くと鶴とも志近ぬ一群　欽武

絹の赤る纐をかけて節季て　遊

走り吹笠の水はなれまする　武

分あらけ印をつけて菊の苗　遊

拂へと強る化粧坊乃蓙　武
くゞり込宮の庵公の様ゞかゝ　遊
手前結音の鍔しめて来る　武
水除にまて浸さ京の門　遊
数代かゝち人雲もまだ晴る　武
ほやまの海まで遊ぶ月の影　遊
名残の席の声も恋しく　武
此代にはまた一度も誰も揃ひ　丶
上の廁をのぞくしてかまへ　遊
宮の針の先のまゝ為に物縫ひき　武
ようよう呼出てきくかや　遊
开帳の日もそろそろになりきあり　武
女隠居数年あけし舊師　遊
為ならうはやかに雀の一つ　武
世帯を持てもなくも残し　遊
ゆるり宗の娘にて露切　〃
爰のよきそよ菜陽ゐつ道　遊
月はあるなかにまぎらくあり雨　武
寒からぬ子猫の榾の椿植　遊
絹かけるひ來る秋の夜毎　武
旅てまかりかへ力さしてつか　遊
笑似せし出来ぬ小唄の流行出し　武
家ぐ納楊のきれし年の日　遊
鉢坊のむかふとを手に挟より　武
いろりをたきくあたゝまる　遊
交作や始一つは月さゝつ　伯遠
汁しめて寒き山際の秋　禾木
盃の底をはらひ柿椿掛て　遠
白ひのすゝき古傘を挟　木
親らしう手らし料子唯推　遠
去らしぬくちる狗脊結薦　木
踊らう院に出壬生の祭　遠
秋てはきあぬ焼酎の醉　木
女房をたゝめかける鑵袋　遠
うまき点料まゝねぬ雑器味　木

掛乞も独る化粧坊乃庵　武
くらきの九ツ空の庵に公の鐘ひゞく　遊
手斧始音の鮮しく来る　武
水陰にまた咲き寄る六ツかゝゐ川　遊
数作から出て雲もまた流る　武
またやまのなまる向ふ月の影　遊
名残の庵の数も去りゆく　武
出代は生ねら志がりる寺縁ひ　丶
よその厠を誓へしてかまへ　遊
寺社のまゝぞ庵くゞ狗縫き　武
よう学びけてききかみや　遊
開帳の日もそろひに盛あり　武
よ倍く数多ありし鶯飾　遊
鶏おちゝ汲やらに筒の所出す　武
世帯をも持やうるも有住て　遊
ゆるゝ寒の始付ては衣替　共
虫の音もきこゆる葉隠の一連　遊
月はある女のにもらうて遊りたる　武
寒さのくゞられ手摺の橋桟　遊
能ひけるひ来る秋の渡舟　武
旅寝をかりにかさしくらか　遊
生似せも心未来ぬ小唄の流行出し　武
家々の揚のきり作り年の日　遊
緋坊のむかしを子孫々より　武
いろりを寒く要衾つまし　遊
交りや酒一口に月うちて　伯遠
住めて寒き山居の秋　禾本
盃る陰の障子そこら法橋掛て　遠
白ひのつるつき古傘を挟　本

赤崎の灯の色にかゝる雲　遠
芋藪ゝのやゝくらまひある　本
十信に法出は宮の寄進札　遠
時竟の果に美しき月　本
宵新らゆきて餘程ゐ向ふ窓　遠
こん納播来に江戸庵を宴　本
松茸やら由ゆしほと降たきか　遠
畑やかても通る隅川　本
茅遠さ百茶屋人の抑紙　、
丁児の侘をを愆念に暮る　遠
さらゝと浸つけかさの言葉も　本
産所に一木を伽ぬ読本　遠
天鵞絨の華やかにて表を補　本
氷柱のやゝなさかゝる宮札　遠
そこいらへ捨て逃さきちんまる　本
きゝゆり結ひるれおくれ扨子本　遠
路先を雪地の見ゆる間の宿　本
こともれ程を来い修行　遠
小一時まくらのゝる秋の月　本
扇追従ふ繰出しさし弁　遠
山科へかよふ大工の打つれて　本
羽槙の日和に無事を祝ふ　遠
汁の実に揃へける豆腐　本
蕪は葉に横ゆしきたる　遠
座町の寄を呼ひ遊ひ事　本
一ゝゝまりに然くむ蕗の芽　遠
やゝのゝる時雨にさらし寄の新　雨摯
収このしまきうあれ好手兎　東枝
月重るに縁の木度もちの一つ　乃菩
流るゝ水手の伴る薩す社　摯
かや着にみのまりし月の秋　枝
風秋くのくんく雲をさへ時　菩
漕出て乗初とに大輪や出れ好船　摯
やりまる遠ゐる旅の鼓は法　枝
まゝ洗の寄屋へ沼なきまと刻国　菩

青崎の灯の色ふかき雲　遠

竿藪ゝのやゝうすれたる　本

十倍に法出したる寄進札　遠

陰気の果に笑しき月　本

富新らしくて年経る向の露　遠

こんぴら埼まて江戸海を乗　本

松葉やら甘せしと降るけり　遠

畑や以てゝも通る深川　本

茗荷遣き百姓屋人の初鉦　、

丁児の疣を熟念にとる　遠

さらゝと湯つけかき込音もせ　本

産所に一昼夜御経読み　遠

天鵞絨の華やかにて表を積　本

氷柱のやゝなきかゝる電これ　遠

それ以て捨て逃さきちる金言　本

きゝの請見ゆれおくれ格子木　遠

旅先に以地の見ゆる関乃宿　本

こなれ種を赤以染り派　遠

小一時まつほとのある秋の月　本

扇追縁に縁結きし杯　遠

山科へかゝふ大工の打つれて　本

羽槙の内めに無やかふ　遠

汁の実に種を出ての豆腐　本

兼法菜に横以てき去　遠

湊町の市ま見以遊以る　本

一つまうに絵本見せ籠の芽　遠

やこのゝる時雨にさ出すや弥の新　内楚

收とこのゝ素くさ夫人幽泉兎　東枝

月室寄にて飯のまま度まてもの一つ　乃甚

深きに水まの付る夜寺社　撃

破れ扇と箱を懐より　埜
笠のはる室をおろぬく妙々の処　抜
きらんのよりきる小塚ましまる　葚
手ぬハてにちらし庭の萩　埜
水を汲て雁さへ夜ノ月　抜
姥山ハ江戸ちかき茶の跡　葚
まろくおろられ袖の焼飯　埜
数々もに練の印きもつとうと　抜
折々のくる鶯法経　葚
かつけの喜んにおいぬを遊び　抜
丈いの低さた柱くみてゐる　埜
雑持とかうて寿の暮れ　葚
四五冊讀で本を返帰　抜
餅配るくさきを餅西ならぬ　埜
御のハ出て出る江戸役　葚
堅川ハやとさすハ海の也　抜
まる露のもゆけり村雨　埜
生て居る石碑古堂を造　葚
縫目のかかゐもらひさき　抜
十六夜も同しの座に客なり　埜
手をかきあてゝ洗蕎麦のかん挟　葚
厳寒も年頃に事しるの　抜
不断に着ても目立つ縞のもの　埜
酒喜のつい夜つてハ文きかるゝ　葚
揚そこなひしも雁をれ　抜
明るなる堂の出静りて　埜
雨ハ晴た後写る女の秋　葚

麦藁やちい家つゝく原通ひ　黒雅
参行くこのかり山の頂　碼山
弁慶をよりもおもかりん　雅
吹ぬ合羽を纏て行人のる　山
月の旅をあれしと萩さつき　雅
清き世こハ鶯鳴やく　山
椅精の路を古む寂石　雅
出水の川で腥き魚　山

破れ扇も箱に帳よけ　楚
笠のいる空をおろぬく姫の恋　抜
きらんのよりきぬ撥ますも出る　芸
手嗅いてもち引し庭の萩　楚
水を揃りて雁さき軒の月　抜
比山ハ江戸うちある荻の跡　芸
まくらいくうれ袖の焼飯　楚
数多きた績の花きもつまりと　抜
折々のくる鶯柱経　芸
なつけの喜屋にまれねも近し　抜
丈いの低さに種を見てるう　楚
雑緒も急ろで妻をのまれ　芸
四五冊読て本を綴帰　抜
餅配る事さも餅西ろ花　楚
銀の日ハ出くて村の役　芸
堅川ハやさき中ハ海の也　抜
すくく雲踏りも舟けり村雨　楚
生て居る田の石碑古き庭　芸
絹のわのかなたもひさき　抜
十六歳の日同しの光に書きより　楚
手もきあそびつ蕎麦のかし採　芸
蔵冠る年頃を重る乃所　抜
不断に若くハ因ての繕のう　楚
酒毒のし床つても又さそろき　芸
揚そこなひハ宅雇をれけり　抜
風のそる楚の花静りて　楚
雨ハ水をんと思ふる麦の秋　芸
麦蒔やまい家ろく佐通ひ
年行くこの家り山の頂
舟筏茶のよふに寄らもなん

追付てかんしやくするハ思ひ癖　椎
走きる魚滝さへのほる姉の許　山
三柱おとら伴ても帰る日の酒するく　椎
銭の渡し越るゝぬのゝ様　山
おのつから寿識備る緋の衣　椎
焉欲しけハ悟をともすむ　山
其の庭月の峠ぬハうかゝ高き　椎
昼三衛きく秋ハ短きく　山
うかうかと呼ひくらぬ車風　椎
鎌けんつく天ゝ無きひく　山
医者せうと衣てる若葉せ地黄　丶
ゆり起す家樹の若枝　椎
吹青て巨蜂きんと焦尾　山
松葉のふて竜動きむ　椎
餅も露書甘くれ肩ま濡橋　山
夫伴をつるも狩衣の袖　椎
丸山へ嫁咲出き持出て　山
人あきた庭ませもくさやく　椎
奴様のいる夜とあくるそのかり　山
汐ぬ出付きて夜の秋の月　椎
引捨し登車に高新　山
此神ハ若書も出所　椎
三条てもこ十八いそうき　山
行市村る看板をとうむ　椎
雛かさる格子叫れ叫せて　山
蓬の絣をとく風呂ね　椎
意地悪の橋もむ手前をひそめ　山
かゝもへ消ても毒きく加の梅　椎

風の井に濯ぐ十日月　禾木
手紙ぬふ脊戸ゐ格子　祖川
心傷ゑく側ゝ積上ては　杜夕
干物のかさゝ家ゝあり　濱丶
一面に妓も子ゝ押流し　川
まく橋子の森ハ井戸端　木
桐先なれ持ハ於猿の本　濱

遠くとも見えし淡きの如きなる　乃
松る赤井村ゆりのを川のみて　木
此辰宮にみつの夕か麻衣術　口
十九か月のゆて茶臼の俵らけ　乃
古の畑をかける角力場　浮
臆なくき人に度出て宿月　口
馬てくるあはけり持込　木
花いやつとも夢を庭石に見せて　浮
菖蒲のしら金出して出る　乃
一本のおもて小楢に花ひ茶屋　木
初雷も節はかなけりぬ　口
よし風ともて楊は遠磨風　乃
栗の實鳴浅ね小寸兜　浮
烟なのせて鋸に灯の揺り　口
儀分住とらしのら家出　木
いても蓬をかえて出ずにあれ　浮
みな東山子のもちもあまたれり　乃
掃の千程ひて参る千葉ろ　木
腸袋ねたくんて林の無花　口
誰やくその念粉棕に二階に　乃
さとやく聲のや宮しある　浮
月影に突き出る胯帰で　口
お庭によれ芽は化椛　木
叢紅のかなはいそく垂降　浮
漢路つけて捨ふ柳香　乃
二度に度去に出をさ出れ　木
春の白ひに無のなとある　口
折くむつれ閑屋坊へ出来れ　乃
祝年はやしかり晩始　浮

暑るなもかている宝の添出　英丸
ゆくりの素ねき賑ふ　寒松
蝶の舞ふ船に織ときた　丸
つくろひもかきさ筆の宗尋　松
夕秋の霜にはれる林の月　丸
縁の初くはて縁の風らつ　松

逢ふともなく浮寝の鴨有る　冬
都から相撲取りの見て門の外　木
此頃京にみかのすがた御術　川
十夜から盛て茶漬の俵から　冬
古の畑をかへる角力場　濤
極寒き人に席進て冬の月　川
馬で行く爲頼はしり持込　木
若いやつと老の庭石据させ　濤
蓑衣のうへ金出して出る　冬
一本の木を小楯にて花の茶屋　木
初雷に節はかはらぬ　川
よい風とふくや楊の遊座風　冬
叟の作り話やはね小寸児　濤
俎の上もさらに鮒の掃り　川
俄分限とらるるの家出　木
いつも置をかへて生肴立る　濤
春の裏山手の物も有る取り　冬
掃のけし程の落る千葉屋　木
鶯啼く山家たえん花の葉無九　川
誰いふの恋猫の二階には　冬
さても静の戸を寒くする　濤
月影に突きとめ鴨帰りて　川
松庭によりは芽を萌　木
裏紙の書かへ悔て垂簾　濤
薬湯つけて捨る刈骨　冬
二度三度出ては是をきく出る　木
春の日ひまに無の泊と取る　川
折こむ門屋場へ渡しき　冬
祝ふは花を嫁の咲始　濤

弓返りて返すかたの秋寒き　丸
旅の土産に松茸画もらふ　松
袖留て母の名を呼小中将　丸
家の風とて家業につきぬ　松
か陰寒く尾花波の寄せも晴て　丸
まくらもすゝきの便りよき　松
十老のかたちもきぬの折合せて　丸
粉の実も菓をえらむ花の口　松
国歌は白花の浪を綴りて　丸
霞よ静りて使しき来りけり　松
庭までも植かへくさる菊の色　丸
勅宣の筋は花志るとき変　松
降出の雨も雪くもりて空暮　、
霜ゝのやんて咲のこる梅　丸
種俵軋よ松のゝ出寄る　松
利装にふゆる手重ねの嫁　丸
身をとかれ灘目風の船出く　松
八橋の明ても降りもなく　丸
田舎の神の剣も古気なく　松
極楽所しく力打鍛治　丸
流井の浮きをひとつ取る　松
草の穂てゝ淋しき方の月　丸
法の戸のかもえなく秋なる也　松
鶉は奈良のへつのきくやむ　丸
事毎子経ける老名もなし　松
紺の喜春を施しゐる　丸
積出しの木口揃へて細織　松
ちるかゝるの空もうらくの　丸
篝遠き花る宮七宝の色　松
春の田つくる鋤は落つく　丸

出かゝる雛子に見えて面淋し　紫山
料紙にも物花の橋は　宜朋
深緑青春の紅に匠せ言の暮　山
日毎のやくその舞ゐ人方達　朋
花の成に出俳の軒のかけかな　山

弓追ひて追かけこの秋ながき　丸
旅の土産に松杉画とこしみ　松
袖留て母の名を呼ぶ中姫　丸
家の風とて出茶にのせる　松
かゝ殿寄る尾張殿の座に預けて　丸
もろくろすゝ一まつ役りよろしさ　松
十丈のかたまかきすの松合せそ　丸
松のまる葉をそよぐ芥の口　松
月影に白花の浅ぢを照らして　丸
霞に鶏りて寒きに東の頃　松
庭も未だ植ゑくゝる菊の花　丸
紙衣の紅筋へ花見る春の夜　松
降出の月も雲をとぞ雲間　、
常この宿んて咲のこる梅　丸
積俵戎と〳〵のる出会る　松
利発なる事重ねの嫁　丸
身をかくし雑目似の乳母つく　松
八橋の咲ても降りちるか　丸
田楽の神より酒の合も古なるらん　松
梅咲ひしく力打鍛治　丸
流れ井に浄めを〳〵するを取る　松
草の種てらら流される月　丸
法の外の歩をも荒ぞく秋さめや　松
鶉ふ奈ゑの〳〵のきく〳〵すむ　丸
亭毎に経ゆる花を見も出す　松
鐘の音をたそ施しぬる卷る　丸
積出しの本日掛つて組織　松
こぼれたるのこ家もうつろひの　丸
篝遣きも見るるて寒き宅　松
春の田つくる錦は薄つく　丸

出かゝる雛子を見て南無にて　紫山
籾擦りもあつる梅花の橋して　宜朗
深組を春の紅白花世の旅　山
日毎の宿〳〵の床節を〳〵まま　朗
みなりに生膳の郵の花ななって　山

咲ちる雨にも萩の上風　朔
将稲子枝の風呂場を温まて　山
危らさに遊子投節をうとうる　朔
掛声は汗のしたゝる難題まで　山
家なども売払て中村に住る　朔
萩絵にまける男に厨くさとく　山
質屋も秘密の状あつめの　朔
同新は皆る露とある文化　山
萩の障さる明神の池　朔
絵川草の色抜けさせる　山
小肴売のりも所以新布　朔
神むの修て志して淡路す　山
所まゝうた々露も霞畑　朔
蔭野をとこそ守る蔵藤小屋　、
江戸よりの今まで宗旨の序会　山
懐さへみ世の春として縫枝す　朔
帽子て行の茶井沢店の口　山
他宗かとく十夜の内は精進して　朔
住き世亦子も請りしくして　山
仙寿の出水にかり出のつゝく　朔
際のてのきる川さしくく　山
菊次の井へ千鳥をつまみ込　朔
かきつけし数ハ細かりの矢子　山
出精に月の下番人遣りて　朔
ころそりけやくの罪なかるる　山
桐樽も下高足を麻つく　朔
風邪ハよう水はたる流泉舟　山
行僕本役になる付下屋敷　朔
牲かの菊を清らせるなき　山
色の手結ひて気変も落気　朔
お流遣志るも雛の土器　山

暮ぬる春さきゝ霞や春の風　禾木
辛夷咲る川赤松の中　如宜
晩子蒸桶の両椀の縄出来　木
ちよろく精をつけてる冬紙　宜

明ちかき雨にも萩の上風
鶉鳴く枝の風見鳥を組立て
色香に迷ひ枝節をとゝのふる
掛ものに浮世の流行る雛画し
宮びと参会中村の人立
菜種もおる風に靡く芒えし
笹屋も錦さへ峠あるよの
月影は路面露とある夜ん
萩の陰よる明神の池
絵所器の色紙付を選せる
小宵まつり方以歳市
神主の條で売り済す
所まつゝに霧ある畑
蔵守をとゝて古木の薄小屋
江戸見るる合ま来て出替の府参
懐さかりせ帯の茶して縁り嫁す
情客は内は井筒屋の口
此やかな十夜の内は精進して　調
仕立世布子も清らかく　山
伊勢の出来ま打出のつゞく　調
隣の手のさる川さしくに　山
若衆の下へ十貫をつまみ込　調
おとなしく朝は細めりての男子　山
出鶴は肩の下学見送りて　調
こまかにやくは器なりける　山
桐揺る下葉を庭かく　調
風情よりかれた流氣る　山
行燈の役をまた付下屋敷　調
枕分の菊を清らせたまき　山
古の来に結んで愛も寿気　調
お流来はしも雛の土器　山

月の夜や安中かけてくる謡本　木
紙のさいにく湿氣降ぬ法　室
落る氣流に行尽か下り簗　木
厩くるゆふに長靴の菁青船　室
不届な身の江戸にて宗亭　木
病を好めぬるまる数の毛　室
東方につゝちて初霜柿の枝　木
かゝりと雪のやんで月の出　室
船ぐらは雑兵猫り中う枕　木
精の蕪の粉くおくりと　室
生薪のいぶる湯立の釜の下　木
うれしう車に入月る閉椿　室
素把のむしの一本笑かり　木
掠らる荻葉の藥立　室
はらまれぬあの女人上品　木
出代の僕に見参り在所　、
居変て化粧盥の底な月　室
五つの立りのくるかん　木
その外は夕立雲坊押へせ　室
生酒持よく坂の下り口　木
成就して後の継母に酒に媚　室
細腕摘ハ律儀うかい　木
ちくはの雪のまだ刺交会　室
逸所々藤やまつあり合　木
数々の月にちらりと烝雲に　室
りく蕎麦の下夜明てくる　木
枇籠や室看にまち庭道　室
人が帳の又立し居もる　木
湯床に洗濯所望を殺ん　室
七ツの鐘を入れまでつて　木
一面の虫に中る塔の鳥　室
生ぬるうくにゝゆる涼川　木

花菫浦の鹿が摘過る　得芸
松の江の諸風のかるか　芸画
篤進き大名札の汁の葉て　芸

月の夕出かゝりける旅衣

継つきて渡し鷹部屋の流

落て行も何やら下り藻

厩なる留守の雛の蕾 契

不届な身への江戸にて事

痛そやうれて能々の数の氣

南方につれなき柳の枝

かたりと雲の行て月の出

船にくる雑兵の箱ゆかた統

精の書々の姉くゆるゆると

生薪のはな開一の釜の下

うれしや寒さの行る開 橋

袁相のむくの一本ばさら

植られる薩摩の薬立

出代の徐は又来り花花内

いらぬとかいのたへ上臈

居変て化粧盥の底ヶ丹

五ッの五ッはこうちらん

一本なくて傘をかしくく　董
峰よりの月も色行舟出の　蕪
鮎めく中のみな結文なく秋　董
隠居家の棚はそめるひくれ　蕪
ちよわくの旅もむかし物語く　董
こゝろえを益へ立る玉苔　蕪
田舎桃り咲くてまだ出しぬ　董
年頃は合て八眉も物かた成　蕪
夏かきありし　あさき掃除する　董
霧に虫取のくゝふ茶摘場　蕪
諏訪へ立ちて由は皆留主　董
庭主のし羽逃けする月の秋　蕪
生りそめのえ遊すまのさゝ　董
むら袋は家の声けし稀聲ふ　蕪
四ツも半めぐ野路の梢　董
紙衣を虫子涼出しうか升陣屋　、
娘もつれて来る法談　蕪
有て合傘の雨の時上り　董

有まゝ断くる場のいさうひ　蕪
妻ももつ薄紙の書をも新様　董
猫の仕ひを茶すさゝ峯　蕪
秋雛子の衣ゝは冬も雷ひかく　董
剃さ彼は吾露臭もる　蕪
網綱の思りをやめし漁あり　董
古る色し池の魚も年々つく　蕪
浮ゐる短檠の月影夜遠く　董
思ひ通りて夢路のしくれる　蕪
ゆくん去る肉に袖らその佳人くさく　董
はつる小猫の落を拾出　蕪
菁花も蒔きた死出子手毛屏下　董
成けれ虫る妻の秋風　蕪
積しをまを筆ひ旅しらく　董
香の里はゝゝも西ところの　蕪
花を付て陳賣あの妻の句　雁觀
何かし梅咲散し　山里　以兄

一本ならて傘をかしく〳〵　亜

蝶よりの肩も色け舟出ス　蕪

鮎めくゆみの律文成秋　亜

隠居家の棚はそめるひくれ　蕪

ちよわるの旅もちは猶ゆく　亜

こゝろえを笠へそゝる玉菩　蕪

田舎祇り社くまもちぬ　亜

年頃にはなくて眉も剃て子成　蕪

夏かきもしまき帰棒ける　亜

霧に虫限のとくふ無極嬉　蕪

御詰へ立出て内は精留主　亜

庭先のこる利過けり肩の秋　蕪

生りてきのこと浜すみのきこ　亜

むさ花袋は家の出ほし稲刈ふ　蕪

四ッも出めぬ戦社寺　亜

桃を其家浴出けり升伊丹　丶

娘もつなきる法話　蕪

為に合羽の傘の面の清上り　亜

只牙ゝの斜網おろしは夏待て　嵐
船のうれしく旅の言傳　兄
いつよりも霜うて出し音の月　嵐
芒まだかり風もよく吹　兄
杼轆もの揺ねておとさそ　嵐
曲輪出しの常き井のりて　兄
西あらし思ひぬるまに繕出て　嵐
妙しか訳てまちぬ物いひ　兄
秋も暮て寄も又帰時雨　嵐
清水の心迷ひつゝは菱笠　兄
卅の月おさへて秋の立時分　嵐
稲のほかれてね庭さくらさき　兄
さくらは早神田の祭る面倒て　嵐
時々はそのゝ法恵みに揺る立　兄
七ツ半過は鐘鳴むかしのぞく　嵐
何事も椋のなるに付けり　兄
日和よく安旅造る森の末　、
値もかりハ状金にも貫ふ　嵐
おい長袋つひ錦屋しかく苦　兄
恵子原ゝ行くは七夕遥面　嵐
送花ふ頬て古郷ふ風の鼓　兄
繕て猿寄る絶境の名乗　嵐
能よき帰掃嫁を第五　兄
意も寄も里の霜枯　嵐
物いはせ殺の座乃通ひ帳　兄
人ま幸かく霧の株上ヶ　嵐
志りくハ嘗ち〳〵申ぬ身の之　兄
手習の秘ふ話早かしく寄る　嵐
茶むも材も持る人もあまき　兄
子をひきとりてよい料理ふ　嵐
紅起を教んて露るは短ま　兄
春寄扇して排ふ宿便　嵐
頭も世の六田のむ結てて　兄
まく如月鶯の帰　嵐
春雨や門の瓶子の音　茶鄰

兄弟の掛綱おろせば夏終て　嵐
舩のうちゆく旅の云傳　只
いつよりも雨らしき出し音の月　嵐
芭蕉たかり風強く吹　只
椋鳥の猿語ておもしろきて　嵐
曲輪出しの雲や井の内を　只
面白う思ひぬるの手練出て　嵐
如月の衣て支はぬ物いひ　只
秋も暮て露の文帰時雨　嵐
清水の玉連ねては茨螢　只
草の月おそ秋て秋の立時分　嵐
雛のうち秋ては席きくあらき　只
さくれ作神田の秋ふ回陣て　嵐
時ならぬ東山に猿立　只
七ツ東八里に鐘鳴むのこゑ　嵐
何處又を様の名ニ付けり　只
思はしく宿ぬ進よる夜の末　、
仙たかりハ秋金くに男ハに　嵐

ねぬけもかくの咲揃ふ梅　山水
来るとてもまる甚の業に任て　露
小桶へ受けるみその口に汁　水
掃き除へ焼火庭に秋の月　露
雨たしてぬる多い秋寒き　水
一きかり笑出は為す手はお子　露
旅さ延されぬ縁のとくはひ　水
ちよくと気を侍宰氣に分らで　露
帰しこの後の自らあろうつく　水
たひろて携へ行き宴の先　露
小倍ね手まみのく燭立　水
咲くる花の帰とて御迎　露
宮し丸へいとも明ぬ月ぞ井　水
春科の契て遊る酒の盛　露
若く満ゆる細は足松　水
嘆きむ旅の生涯のたま格ひ　露
春し情ねの不青の暖　水
不魚さ法吉のとれも同樹　、

人をおくりて傍む安雅なる　露
おもわきし向の角の忘手札　水
ちよおいの丹る地萬は熟　露
蓑の衣なやを給禁をえす晩　水
宴まよるのは出るの蛸　露
業原に保出おてる也より　水
後国やてゆ家の葉の　露
方角好きて見る盈の目受　水
若せて、あれれど蔵ね八つ栗　露
雉おは粮ら取る月の秋　水
昼洗濯すれ御ゝのくともく　露
約花見えのなし安き横福子　水
左樋の蕾待つ車通さぬ　露
別く人行ある往豆の立て庶　水
ちよと露をめる虹の井本と　露
衣おまつ次本ての咲のまん　水
霍の八代ゆる葡代乃つゆ　露

なをけちかつくの咲揃ふ梅　山水
春ことにおこる藍の葉に付て　露
小桶へあけるみそのはかり　舟
掃除へ埃吹夜に秋の月　露
用たしてつく多く秋寒き　舟
一さかり笑出汲荷すまはせ公寺　露
なまは延さくれぬ縁のとゝ結ひ　舟
ちよろ〱と煎茶を侍楽氣よ嫌らさ　露
帰りの後の白うおもろつく　舟
まひろくも擲だるき夢の先　露
小借れ手よみのく爛立　舟
咲ところ花の帰とてゆく記　露
宮しおへいとはぬ月まけ　舟
呑料に被て出造る酒か盛　露
昔しこゆる細注足軽　舟
咲ちふ旅の丈夜の手探ひ　露
寿し咲むおくれ香の暖　舟
不急も漁者のとれるも何閑　、

初音きてんやうはし　云雲　逐澗
叅停しの雲に入る声　逐流
古今中でも力車割る程ゟ付て　澗
枝て窮屈る新の仰く　流
石葉茂業らい世間のよう也う　澗
大嶋の隠る山能き霞哉　流
四五字よ本壱併ぬ秋の暮る　澗
縫ハ被れても時ハたちゑ丞　流
七生の恥を恥とも世ぬ男　澗
意まくる酒と床惣　流
雪の松ひん生ふつまし世て　澗
備咲みの花か己てのしぬ　流
初寄き盲書居の盃の月　澗
つい付飛る鶏の葉蓮の実　流
蜻蛉の尻の種いも生れ付　澗
側いの乾く床宿の色哉　流
閑みけ様義ふ逢い初桜　澗
内海近く来る雀子　流
盃の流れとも其のへ面影持、
味噌させうり腰やつれぬ　澗
若衆同志ふの底も打明て　流
急度清ハいか和漱の氏系　澗
君傍の業を去てこと元飛毛　流
粽の売もとへうらく咲楚　澗
五六代孫も耕いぬ楽も　流
今度のなりけ十分の勝　澗
船場之翔の来る蛇を出　流
霧らまも世てハ藩やの人拶　澗
築山にふ楯ふ有の於ゆ作　流
絶さまき常楽し踊帷子　澗
六人一度ふ狗る森秋の風　流
清の匂ひ弦い来る所水　澗
世代の子つく宿る大黒団　流
狗背菜々茶のり取る　澗
さうくと去咲おろ流れ行　流
一つとまつ粒散りし翔ぬ　澗

静かさへんのはし雲 遊閏
誉傳しの電くに入る音 遅流
土の中から力半割る我ゝ無付て　閏
杖て窺ふる影の似く　流
芭蕉葉に落る雨の夕かな　閏
木綿の澤る山路霞露　流
四郎と巾壱匁半秋の暮　閏
鐘ハ彼ゟても時ハたゝへ無　流
去年の秋も秋とも出ぬ男　閏
意まくのみくる酒と米糀　流
雪の朝ほとんと西へつまふ世を　閏
論はさみの気ゟ心すのしぬ　流
新男子盲ゟ座の盃の月　閏
つゐ丹ぬまる我の葉の実　流
謀師の気の種いを生ル付　閏
側のゝ乾く米俵の花　流
閏ゟ升標義ゟ遅い初桜　閏
古傳近く来ある雀子　流
海の流さへ去りハ面黒鶏、　閏
味時まつり痩出つしぬ　流
異形同志心の底出打明て　閏
急度清ゟ和泉の民家　流
番傳の業を出てと忘れ見　閏
粽の売出をへらゝ吹楼　流
五六代孫も神かね樂当　閏
今度の万ゟ十ゟの銭　流
船場之納の米前を出込　閏
露ゟ出世てハ鶉の人数　流

淺川も濁めきてし春の月　大梅
蛙の中に交る蝶の音　秋丈
鍛冶の火のくゝえ撰付て　惟州
手燭のもり江畑よりくる　梅
帷子ハ我装つて面の後　丈
雇くみの帰るも来そふなる　学
此所の首領者より辭して　梅
明抱やめて逆座ともする　丈
出語迄てもくたし杉の里　学
ゆきく痩せ劣し子気ゝのよふの　梅
外も草の内のつ麦站露て花　丈
名もなしさ水に稿せるひのまで　学
月の秋ハ旬も離せつゝおゆら　梅
買く零餘子は粒の指り無　丈
霞露ましくも人の首に嵌す　学
杉郡しく降とんなまで　梅
三里ほど進し四里ほど近いかし　丈
家々の軒に下夜咄なる　梅
主堅ちふかく手鶴ふ子生涌　学
男の癖に髪結ふ也　梅
口先の心のまゝ惡のみとく来　丈
貝和ゑて思ひのけられ給ふ秋　学
諸猿な俵に注しも名を付て　梅
延して壺な籠か株上　丈
言恋さへあしは飛鳥の手に遣　学
赤城法し國本諸伏　梅
声は婦しい田舎の唄　丈
囃ひ笛も条件者の事　学
咲くものを帷ことく冰　梅
暮ぬくも十分な月　丈
奥向の貝物売に投付る　学
羽織の鍾の新しくなる　梅
何れもに生咄花ちらし　丈
焦る旬ひの〔き〕焼みそ　学
金山の出物の番も山の出　梅

湊川は浪めきかへる春の月　大梅
蛙の中に交る蟖の声　秋之
綾ほのかのかくへ襟付て　惟州
手燭のあかりに畑よろめく　梅
帷子は紛つて白の後　之
雇ふ舟の照るも来てゐる　学
此町の首沽者より撫こして　梅
咄想かめて盃座をまはる　之
出語る迄ても長居しれ舞の皇　学
雪の夜を寝て乳への乳のよのい　梅
外は廿五日のうち支法婆もはや　之
冬ごもりにて水に携へてひのゐる　学
月の秋はやてに鐘をつかぬ也　梅
賀て客餅子粒が搗かぬ　之
霞むる枝を見て人の目に入る　学
秋趣して降と入る　梅
三四五六七八四五六近[illegible]　之

宮へ客舩も下夜喰ひろ　梅
立寄さへてき所の子生涌　学
男の奔に妓凌くはなり　梅
口先のよのよく戀のしろく走る　之
[illegible]わるなでも付ちて別れ秋　学
法構有信に浄もを名を付て　梅
延して盃が花の株上　之
言たきへ寿もい花病に手を遣　学
赤城法し國本始秋　梅
売れる者婦へい一存田舎そは　之
雛ひ菩の土康件為のみ　学

ひらしく種まき須な

入口のみやいつ〻の中屋敷　英
筆らへえちか〻坊の子　邦
黒ねぬ仕立る籍に溜る〻　英
さゐくぬかう曜に鼻紙　邦
閏のけふもてしはぬくい月　英
秋仕入まで暮らしぬみせ　邦
乗網に男ゑとりをそ抱　、
水のころゆゑこする新潟　英
ゆらゐぬ名築るおそ荒　、
堂にあうやしいらむ爪掛　邦
注文の筏せまく作るめ　、
上つらくらき鉢の掛底　英
菜勤の大豆ひらふ肉のふ　、
平別の出て小雀山雀　邦
落栗ハ老の住るに拾て　、
咲けろ姫見の奉るむさうり　、
楊羽の蝶をきの流かん候し　邦
仁ゐ仕業も成しに来落し　、
打首の挑まさし錺りかけ　英
猫きゆくゆまそ風呂敷を乾　、
三分ほど首すしは棒断　邦
舩倉に琉球屋園の森閑　、
為さくて身さき李公の口　英
なりとも十九出羽に陣取く　、
生業といつちお子り捌る　邦
樹邪花雜事しめ二才る　、
屋後一字あやし茶筐　英
我能に難ゆ客の月尺り　、
鉢の新海てあるによい世界　邦
菊作り医者の〻まてするあれ　、
践て為りして擬いはくそれぬ　英
新印も律従乙来いくし待　、
京の雨鄙ふの宵くしきあき　邦

ひくしく種まき頃な　多

入口の名やいつ取の市屋敷　英泉

箒らんへえちける埃の子　邦泉

思ねり次仕立る鞘を淡ら候　英

さかく敷から曜ゟ鼻紙　邦

閏さ月なさてさてくいぬさへ月　英

秋仕入まうで妻さしぬみを　邦

兎飼て男ぞりのもを抱　、

水のまる悦のこするゝ粉渭　英

咲さ取ぬ五菜を出すさへ花　、

室て寄る也しくいさむ爪胼　邦

注文の荷丸も香てさ候るめ　、

上へつくさく鉄の掛底　英

参勤の大名らふ月のころ　、

出別のまゝ小雀山雀　邦

蔵栗ハ老の住居に移る　、

そなてはちりのかくれよおもへ　、
丁度水口発る甲　子　英
時雨しては椿のつや来月白　槙翁
子ら跡つゝく霜跡濡川　空酔
木綿荷をわくらん森のそて　車立
呼びに来つるゝ小出川を結　岳路
雲間の竹に面白く月の院　酔
荻の花音は凄き村雨　翁
袖垣を見越す萩の咲超　路
髪ゆふうちも来たるさぬ　立
響口のみて白磁に深き　翁
深井ふ回る死女の神寺　酔
番傘を干並へる庄羽町　立
かわりくる老梅院に月　路
瓦葺無けは上坐て在す　酔
山羽ありのを交易に出を　翁
新宗を乗り人ふ移し付　路
東海道へまひるあけ茶　立
時候よりむかしめてて手早り　翁
ちよろく水に狩ふ嫌る　酔
出代は猫の五器を掃除して　路
春葉離葬の多く秋飾　立
お櫃に焼の子が減ぞかれ　酔
扇子箱も壱寸四五寸　翁
蕣さらほ送て日も務在牡丹　立
送の糠を捨てあれ路痛　路
枝依の洗濯ゆのさえさうが花ひ　翁
ゆきしふる降りて古川口上　酔
菩薩釈迦寺府形式よりお都合　路
本職も夢も痛くつけて　立
出銭をきけて参りて月のへ　酔
僕はまのちてきも摩南　翁
吖嘆に花を差して萬両似　立
学難棚のかくる姥のもみ　路
借用座く在るは酒をのて通　翁

そむてはちるのわかれとおもひきく

丁夜水口発る甲子　英

時鳥しくて梅のつや乗月雨　梅翁

子子結ひく素結濱川　峯磯

木樫若葉かくろへ森の花　素立

呼ひそめつるか出泪も鶴　岳游

宵闇の灯は西あきう月の陰　萍

萩の花を青く清き村雨　翁

袖垣を見越る萩の盛哉　游

婆ゆやうちも春をなまさぬ　立

衣裳の包ハむかしめかす　酔
卯月に入りて流るゝ空　游
春なれや起ても面白き哉　主

泥足て深うぬかる田植かれ　梅室
猫の出ちるつらに所に細　蒿人
汐荒めの月くまに舟を繋浜　、
あまひ羽織を脱て之涼風　室
ゆふの月二階ハいまた常連へ　、
旅つゞき世を越る山鴫　人
焼積もあひ減しくる積て場　、
きたなく衣を忘るる勾当　室
参物のくのりと下りる餓鬼　人
小ハむかれぬけまの空風　室
紫髪を落しゝ跡の淋しきに　人
庭の秋ひの多き絵る堂　室
仕合よく夜を明れぬ旅の月　人
烟うつりて梨ちぶりつく　室
原のつゝよそもつゝむ角力哉　人
毎日椀を百も勤めれ　室
仮粧も色咲くてよくかゝり　人
土用はけぬる藤棚の下　室
お家方に呼れて小袖売ハ若て　、
掛物も出る寺の古絵　人
一文の茶菓も紅粉き継母の手や　室
貸傘はなかきの難面　人
魚洗ふおむぎも菜にけり取ぬ　室
折しるも牛の逢ひきかゝり　人
稲刈も十八日ハ佛に呼る　室
坂への字をまたゆる杉間　人
麦藁で屋く壮健く未だ竈　室
出まるゝ程る余りの宵月　人
石も堅し黄葉紅も暗の遠　室
隣てもあかり寝る猫　人
うち見てゐる中を伺ゆ母の名け茶　、
瘡かいて岩屋仕上る　室

無理やりつぐ酒のやうなさき　人
明くれちるお物見のもも　室
香雲に入るゝ家鴨の晩かすて　人
錢を洗へば精かるまじ　　室

山やま花秋ふかくも木葉立　来木
木の間に絵る雨の夜ゆく　素伯
ゆくてゆく京市の貝やて　木
雲雑にしかく猶茶咲くく　伯
行てくゆく月のある新葉　木
言さして秋く芭蕉やなく　伯
歯磨にかきしなるの高畦て　木
豆鉄炮をそおなきされ　伯
生みの疵は宮きる足袋　木
出しのくわに酔ふ辻　伯
手さ出さ十分な押すり　木
むかし赤さ雲されの月　伯
行列はかられていゝ合羽　木

琉球人を一度に存するに　伯
慌へいれく陣所のうらやう　木
涅槃をこいはてに唐土の遠立　伯
苗子に寄て桜出ぬも花　木
下女の上着を雪の落葉に　伯
好鼻の出に役を悪くいふ　、
上下廿日ておくれ差合　木
一ふちはいつて分けの数に入　伯
家来めのその世ゝるに寛　木
詩の縁かよふ梅見部ぬ杜若　伯
御ゆくる杉の木雪　木
筆とる力さへあさき病床　伯
名残をおしむこの床　木
大切な園の藤続の枯るり　伯
鳴をとめやしる落の霜　木
網さげて桜川を下る舟の無　伯
足踏ちゝに嵐ふく家　木
盗人をまことへしして途　ろ

帯一本にそよく秋風　木

私に埋れしもせむ前世井戸　伯

日ハ入りかねて逢ひ以等深　木

名所ではなきと行まし川の家　伯

捨つゝと成る萩の葉角　木

待てぬる夢のゝ初音の子狀　嵐月

捨子落き秋の袖の末　嵐水

晴る面又一夢もうらのむて　嵐丸

岩の井ゆく水の流さよ　嵐光

ゆふやらやと結花椿る秋の月　月

秋よりつくる葉は見かるる　水

露をは其花菊菊をとまる逝　九

座の器のこれ时代をの　光

又しても茶そせのから猫の尻　月

風ハよ友くと空傳つて　水

枝葉の人の廣ハ童すき福田蛙　九

玄柴や茶風にきてゝなく　光

ゆくも取り業務をかわ新清水　月

丁子浅き町の雲く動く　水

盃に天分天光の蛇の鳴る　九

約束のみて花はに愛く条　光

詠めて一筆は歌を月あり　月

封をは秋の妻は夕暮　水

香桐菊をハまくさ下る之　九

縄ゆやふ番筋の細　光

刀さへ花の物を腰ぞ人の中　月

笑ひも多く過雨のいさくひ　水

吉さ秋の雪のすきまかくなりき　九

落ちて愛は花に金渡　光

村井の菊香くるき岩の绳　月

鍋子一盃行乃し古城　水

そ川の雪は浅き程にそて　九

岩は物の我まるつく　光

私の追放に乗り秋の毛猿　月

寿し拝難に鏡亡の都　水

帶一本まそよく神風　木
松を埋みし雲が崩出井戸　伯
日ハのこれて遅以暮際　木
忘所はなきにはまりし客　伯
捨かてゝ取る蔵の蓙角　木
搗てぬる葉ゝの初茸の子状　嵐月
給は篤き秋の袖の末　嵐水
晴るゝ雨又一さきゝもあらで　嵐丸
宿の井ゆく水の涼さよ　嵐光
ひとえぐやと諸莅梼る秋の月　月
稲よろつゞく葉は早かゝる　水
蜀よ秋き花葡萄をもさえ遂　丸
庵の窓のこぼれ時代よよの　光
又しては寄せのらる犯猫の尻　月
風ハとたえて空借つゝ　水
枝枯て人の庵ハ寒き渋田蟷　丸
云はやすさ風に悲しつらき　光
ゆくゆく紫蘭を女の新道て　月
丁子洗ふ竹の露もゆる　水
盃よる所天宮の蝶の絵る　丸
鈎船のつくて頭領ハ蒙く条　光
詠めけむ一首は歌を月にせむ　月
村もよ梳の妻は夕暮　水
香炯蒲をハまくさまるる之　丸
縄ゆるやかに扇子筋の畑　光
刀さし花かそ目ふら人の中　月
笑ひまる道麻のハいさこひ　水
去くむ秋のするむるかく尋え　丸
荻さえ変は花は始金魂　光
村井の窓霧くるき岩の鴨　月
語す一首にはなし　古城　水

夕汐に江鮒の光る橋のうへ　丸
人を塞所に笠舎りして　光
問もせぬに猫出る藪からし　月
手鞠あへすも出る嵐送せく　水
御迎の方よりさき方に咲たるさ　丸
秋のよの霧くのぼる汐あらし　光
松風の姿にゆれる牡丹かれ　杵壷
打水にのこる巻庭の井　杜鷲
泥優先て理にかり遁逃もせ　壷
菖まくら咲あ松にぬけ出る　鷲
初秋とこへのうぬの日麻の月の雲　壷
むかしも河亀のうち牧川原　鷲
飲上に示雪せられ満り海　壷
方にも達者にある出ぬ　鷲
安撥て流れの家里の五春八　壷
義理にせまりてゆく旅ぬ物哭　鷲
塗れの携つひ提灯の百も誠　壷
ゆらめける雲に鯨やうかぶらく　鷲
金になる惜退尾計肩抜て　壷
夫婦表に泣き来る番四屋　鷲
むらちらりと咲てや西東　壷
夜も蜂の蜜盗汲月　鷲
背迎の雲満つる浜も素人　壷
隠居にて吾て枝持もゆらくく　鷲
夜結て不断筆読麦　、
彦朝は江戸へ参る背店　壷
帆柱にありし木かげを代手て　鷲
兎の法血のりかたく　壷
どうかする恋をするのも旅ながれや　鷲
閨まてつく蒲湯深　壷
節婦は扇を作のたくらされ　鷲
送るは君留の足にまけ　壷
今響く園の白つる緑島　鷲
取りゆる気黒いすの咄　壷
出てはれ居れからある空の月　鷲

夕汐に江鮒の光る橋のうへ　丸

人を余所に笠宿りして　光

問ふせなき手摺出して藪ちらし　月

手強めのしや出森咲せせて　水

初花の向ふききさ方に咲たまゝ　丸

秋のうら霧ゝのうるはあひ　光

松風の跡に夕は何ふ牡丹かれ　柝壺

打水にのこゝ巻ふ庭の井　杜鷲

泥優先て理にゆり巡誘ふを　壺

菖さくらひめ桜手ぬけきる　鷲

初秋といふかねの麻の月の雲　壺

加ヽ山と河亀のうら松川風　鷲

欲上手ぶ雲せうる濁り海　壺

乃ふち達ちに座る如ゝ西　鷲

若殿ていれは気車の手奇へ　壺

義理にせまつてしゆく物買　鷲

涼秋の橋つひ提灯の百ゟ哉　壺

町にハ稀な琵琶の撥音　壹
あつくと露宿る蜘の内　貳
見かけ見おろし丈なる欄　壹
近よれバ寒げに凄き石仏　貳
猿も及ハぬ蔀への酔つら　壹
九分九厘なさけくの悪縁　貳
植てみるも延る菊苗　壹
家も岩も籔こし出る月影　貳七
かえくきる物房社一つる　拾三
座り帰ても秋の面咲て　七
ちんのり能く状の封しめ　三
冬の入りし笑ひ唄ハ夢汁　七
蓉て汲のとかる仙　三
寒さうに居ろの家當結り　七
待ちうて拾うハッさそうつ　三
上の庭を蝶ふ花のかしまく　七
あらられのしまうて十し　三
海岸揚ることし出る弓矢て　七
気にひ太の石み暖つく　三
月に秋霊の面尾ることく　七
河まハて散れる萩　三
嫁子く陸屋春方結打つくし　七
ちとるとまにめて持出し傘　三
あを歌ふ身附の怨の子らん新　七
ふりくる落る切帯　三
五加木茶飲に流ても蔵若く　、
帰かららし八重のさみそく　七
本町を流しても見ぬ境場　三
邪まて映てお井戸洞　七
椙の陰やり爆さ架て居る　三
一ツ宛そ替女結のみけふ　七
小声て八声と売物に障く声　三
見極へ戻る仏に舟結句　七
流群を恵て一緒まなる鶏　三
おつる村の出て役所　七

のけて垂月見の芋を掘起し　之
香ハ只さるゝ衣ハいまそのれる　古
芝居見た穴蛾ハあまらぬ秋の雨　之
まつさ昔に手紙まいりまする　古
生物ハ肉にも隠元雁はなり　之
大工もいてあそひぬむかふ　古
青柳に押されて中の丸い草庵　之
ふくさん錆る橋の江戸在　古

鴉の飛し新らしき根字と蛛のの　味舎
苫につたまる月影ひらく霧　得蕪
細物も露十分に潤ふて　舎
若もあくそろふ子供澤山　蕪
ふつつと千さそゝんの居らん　舎
壊くも生る蓮は也　蕪
竹割のさゆ香餅をとらぬ　舎
みどり菊やりく風呂を焚き　蕪
古くも思て纏まて引哉　舎

銚子の般若てんにはく　蕪
ひらひらと蝶の出て来る志ら梅　舎
越し石外に入小ちや子搖ひ　蕪
雀追ふ鵜の群も見る月　舎
出て見て自我独りよむ秋　蕪
ぬるてハ此世と茶碗の口はき青　舎
ちやつと濡して開く蝶　蕪
擲えてハ麹も面の也　舎
鉢かゝき畔乃寒菊　蕪
蜂火の道の老も垢離ふくて　、
屏風のさゝる奥の八盆　舎
襟先の襟にまきちらし衣移行　蕪
今も加る夕立の雲　舎
藤沼の汀ハ水の過ける鴨　蕪
富の代をたつ給子本　舎
変て出入る重古武鐙　蕪
面のーくろくしろ行燈　舎
鋤鍬ハさらぬ候てけ並へ　蕪

のけて置月見の芋を掘起し　之
香ハもてくる不断ハ忘れる　雪
花乾々穴蛾ねハ来る秋の雨　之
出さき皆音まくゝ旅立まする　雪
生物ハ酒にも隠れ殿むさく　之
大工衆はてまてかぬ長むす　雪
来て折に押ぬて中のたり翠庵　之
ふくさんぬ殊る橋をは殿　雪

精の神し新よ教寄と来は寄　味舎
若手つゝまる月祝ひゝ気　得善
烟物よ露十分に消ふれ　舎
若よ祈く是る品を修禅ゆ　善
ふるさと千ごくさんの殿ゝん　舎
塌くも雙る業祝む　善
薪割のさゝ小麦錦をと承水　舎
不器用しく風宮をも捧くる　善
女ゝもおもて縁ゝまくとゝたか　舎

若めの稲の様子見てさる　舎
むつくりと起る川は照る月　蕪
やうらくにくゝく鉦の済つゝ　舎
女房も薪見てそしたの食させ　蕪
のうぶやしきちに出かる婦　舎
おつちりと相伽にかゝる寄法究　蕪
株一本以て雨なさしかり　舎
みち径も在の孫生はれ来　蕪
大ゝの船も出揃ひし春　舎
手情ま打ちの花の紫し　柴人
人皇ちのきぞはの芥流　桃五
月の出も忘れさる上手成て　古蕭
醒ても一重ちし浮き水鶏　人
平安に何事なしぬ清凉寺　五
そよりく収よせる東風　蕭
硯水（ケンスイ）の毎日得ぬる世付て　人
宿ちよりまでよき月今川　五
秋ハ国生れで鄙ぞ江戸の人　蕭
舞うてゝ日の入るとゝ樗の果　人
光ると露から船の乞食也　五
舞錣儀で向ふの文庫　蕭
実例のやらに来て肩の着　人
何ぞたゝ人慕の引声　五
小鍋の酒張る手を鶴　蕭
與さぬ新春豊法伽ホ　人
うかうかと有まうかうきせん　五
風ゆるこの不吹この竹も宜　蕭
蘇山にうつす常葉ハ雲雀　人
堤中寒く出絶かくる緋　五
学雜子喰ひて汲むも埖　蕭
東旅を奪ふ伊達の弟子　人
岩ふ戦越後を忘るる藏　五
見逢ちはく結来の了完　蕭
無の子眉掃出で絡舞　人
形子載せき加茂川の水　五

花めく稲の穂さけてきる　舎
むつくと起る門は照る月　萋
やさしくにうく舩の泊つく　舎
女房も萩見んそゝろの人まかせ　萋
のうふやくくまに出る駕舁　舎
あつちうと相伽にかゝる鶯の恋　萋
株一ツあゆに霧さしくる　舎
みそ海も坊の跡生へる棗　萋
大かた舩も出拂ひし夷　舎
宵情に物書のまとめ紫　人
人皆あちきなはの芥浜　枇五
月の出もまぶきる上に居眠て　古萬
壁を一重をしけき水鶏　人
平常に何まなく浜涼庵　五
名よりく所よせる素麺風　萬
建水（ケンスイ）の毎日洗きなせ付て　人
雷もよきもまてよき人今川　五

秋は國中何も節句の人　萬
舞ひて日の入るなとく棚の巣　人
走るゝは寺から舩の交ながら　五
舞額係て向ふ文臺　萬
宮例のやうに詣て月の霜　人
何事も人落の羽聲　五
小鍋の湯漲る手ぬ鍋　萬
興さめ顔古意話伽ならぬ　人
[illegible]　五

鈴虫の庭掃こして垂る塔の影　蕪
夜に眠さめて出ハし月見る　人
渡る雁宮に居る者ハ旅の内　五
露おかぬ汁に寄る花 [illegible]立　蕪
内職をなして子に書きせる下座敷　人
神信心を志しても薄ら命　五
橋詰を老いも若いも[illegible]集る　蕪
我おもしろく夜[illegible]汁は[illegible]　人
居合まて志[illegible]の友　五
春の堤に飼[illegible]牛　蕪
京の人に[illegible]る若くの[illegible]　茶山
葉をうら哉る菲乃葉　菅三
溪に照付る宵の月[illegible]　山
巣を隠[illegible]立て粉[illegible]　三
糞[illegible]持て　山
柱暦を[illegible]に付し[illegible]　三
十三の[illegible]の萬　山
便[illegible]款　三
桜[illegible]の葉て細[illegible]帆柱　山
[illegible]粉の声　三
生活[illegible]　山
宮[illegible]の[illegible]　三
田も畑も[illegible]の影　山
青[illegible]鴫　三
宗[illegible]の[illegible]芋　山
織[illegible]道　三
古の[illegible]　山
物[illegible]　三
姫の[illegible]　、
刀[illegible]　山
休[illegible]　三
橋[illegible]の[illegible]人[illegible]　山
喰[illegible]汁　三
吹[illegible]の花　山
法[illegible]旅[illegible]　三

鉄灸の座据ゑして垂る塔の軒　芙

侯ニ眠さめて忘れし月見る　人

渡る鴈空に渡る人ハ旅の内　五

露おかし汁に宗花挿立　芙

内職を許して寄る聞る小座敷　人

祢宜仏を志てゝも落る命　五

橋詰を夜ハ寂しか行來る　芙

我おもしろく衣る法ね巾　人

居合まて志らぬ志るも花の友　五

春の塔に飼ふ竹川牛　芙

京の人に浮る若くの郷　茶山

葉もうり茂る蒜乃叢　菊三

播に客付る宵の月も淋　山

箕を風除に立て籾を扱　三

糞ふるこに顔るるも春積て　山

柱暦を突ふ付し所　三

十三の年の暮ふ嫁たる萬　山

便り侍ハ鉄もなき軒　三

楼閣の案で細やて手ぬ帳揃　山

勇みよくよきて曽粉の名　三

支倍に多る東金寶職まて　山

宝塔の狀きゝぞ抜む　三

田も畑も種子を浮る月の影　山

去年が好しもし白髪好ても田鴫　三

つまさき逢ふる袖の濡ひ　山
禁物と僕の呼ぶ聲の闇　之
水くみ前る浴の先くさき　山
落くと月の薄け立ち盥　之
紫ふ南方の空鏡の一声　山
一夜の海未満ち干稲刈て　之
東近江の緑のきくゆる　山
隣の寺に咄備る給仕哉　之
麻の葉を落つくて嘘ふ　山
むかし本に信て借切る茶筅哉　之
翌日は旅の蚊をしたる集　山
行ぬれのして嵐吹く桜の雲　伯遠
夢さめひより霞く吹ちまく　禾木
岡村の晋が花の四角来て　遠
新南勝く不窮のくそる　木
主の名し雛まで肉の居かり　遠
当くよこの寺やつりし空　木
松原に晴がしに□の鳴　遠
水に遠きはつかり辰ノへ　木
数聲とそれ小窓長く四千哉　遠
西ちらむ恋しぬ恋桔梗　木
思ひんてうききて雨の水東　遠
櫻の枝に楓が手るる峰　木
聲のなくらいうき次く後先　遠
うなへてそまで緑の曉集　木
様口の捷羽の挑ミ徳の門前　遠
上枝の木をかり立いて待　木
ちのくれい空さへ中ま月は出る　遠
無角烟ひきそらぬ落川　木
花耕をして法花の大帰除　、
裸自慢てまちの風呂ひく　遠
いさこさの話る若衆の二番め　木
さくらきくの暗る衛立の隠　遠
教祥未の行ろ今の更衣　木
かりそさ色く情うなく散　遠

つまこし縫たる袖の綻ひ　山
禁物を懐に叱る碁の淵　之
氷川渡る路の泥くさき　山
蒔くと月の落汀見ゆ盥　之
盛ふ南方の空艶の一瓶　山
一向ハ海末満乎黒稲刈て　之
東近江の錦のさくゆる　山
隙の寿々幽備ふる貉待る　之
蘇の葉をおつしと嘘ム　山
むかし木を渡て借切る家津家　之
翌は浮る蜆をしまて座　山
行暮れのして崩れ桜の雲　倫遠
篝さうひより猪て借すれ　来本
岡樹の脊杉花売四面来て　遠
新菊椀を焼見てのする　本
言のさし鶴をか内の晁るり　遠
思ひよこの一緒せのりし宗に　本

大雨古の際書て一相應の中　木
わらふへのそらゆすり扇に入　遠
鼻歌も大字をとらぬ宮もりと　木
挿絵にふり添へる形あり　遠
苺赤暁白し夜月のかさ暈　木
印の中ものうきわくま峰　遠
いくつ振徳利納る菊蘭欄　木
入院の松子さよ斗す緋衣　遠
状箱の餘花れの文字く　木
折くちるりの辞の常の庵　遠
手を遅く甘るハむかし話　木
妙あちねきへる轄の小さき　遠

宮寿して施るさりし初時雨　富
積りくさのすんあみの粗き　月芳
望の夜来る網舟潮出下　富
拜てまきまる新田のさくさ　芳
通用す錢のこうき秋の月　富
無事に吹きる霧の晴れ隙　芳
是へやると脇打出の拂ふさ　富
剣術の銭能隙る梅軒　芳
赤めさん白ふくあ蒙と綴れみ　富
さくやくのは雉の奥向　芳
つふ毎に水玉つける池の面　富
跳上るの泥の粗き無くり　芳
本揮のちんぐと董る宮の月　富
宮く篠を宗ハ高霧なる重　芳
みち宮の下楼あくちろ新　富
状将出てちり宮く本御座　芳
むま雑くありは恩ま文一つ　富
つとくと帆の持ちる表風　芳
ちききこ手を耗の先は燻籍て　、
のうのき若の森拾よるねる　富
ちこうの松も塚あ將接ふる　芳
送り荷そいれ塩看取り　富
松山もうかへてるきき雪の峰　芳

六角堂の縁まで一祠庵の中　木

力くらべのせんかも秋入　遠

鼻紙も盆の日に茶なく　木

株乳はかけ続きれる形なり　遠

萩花殘りて月のかさ星　木

印の中のうきかくまき峰　遠

ゆくゑに種刈納る菊菌櫚　木

入院の物子よ干る緋衣　遠

状箱に結び来れしの文ござく　木

折くよき解の帰の庵　遠

李見興く生るは桃白　木

寂りなくねきへる鮎のかきさき　遠

空が下ば滝のうち之初時雨　富

積つもの下んみなみの短き　月芳

聖の使來る網舟漕出す　富

拝てまきまる新田のさかさ　芳

通用を猪の当てまき秋の月　富

急を嗅ぎも霧の晴際　芳

恵いやうと檜山の湯ならさ　富

剣術の鍛錬修る梅許　芳

赤めき自ふかく紫を絞りけ　富

さくやくも帯絞め奥向　芳

つぶ毎に水玉浮ける池の面　富

跳上る泥の轍さ並ぶり　芳

木挽の声にと葉る露の月　富

家ら條ふ京は霧から重　芳

みさだか下楼あくも急ぐ新　富

状披が出てくる所と御座　芳

世は鏡くもの結び文つり　富

つくらぬ帆の付る来風　芳

まきうまも耗の先生嬉箱て　、

[illegible]　富

庭こゝろに水のまはりも瑞籬　富
わく筆のしきりに落る出家人　芳
落葉の下なく瀬海もかはらず　富
汐風に染るもまさき猶楓　芳
細き枝の篝火へ入月　富
行舟のとまりし火急く機知　芳
蕨まゐりたる食時の嫁　富
酩酊の瘡みしのくらまぎれ　芳
まてまて帰進し仏光も前　富
垣越に角打ちる姥嘆く無沙　芳
近くに飛る雁の行きさく　富
水青の艫出後岸の出生　芳
かれなりつゝ錦のこまり　富

風や今恋しく掃ぬ落葉かな　茶須
ちるを押さるのこゝろ霧解　得蕪
蕪蒲摘んで水口にかゝる所　須
まつ遠吠しのかしこ宿よる　蕪
一声くゝ暑さを暮るゝ宵の月　須
すゞかける挿す芋の波まくる　蕪
秋の風来ぬ人の床ず来り　須
そよぎの迎ふ古寺手そ行　蕪
絹衣の法師来やら修行者の　須
きよらかな寝子清うまるゝ一夜の　蕪
すゞしくと経面雛せよ雨雪　須
まぐさ小十日かゝる造化　蕪
飲めのて夜来のこる酒用　須
古戦の春に浮める夜明　蕪
あらかしぬ御息猶も鴎し　須
浦千鳥でゝ迎へ舞はふ古骨　蕪
出陣て二言めにゝ人恋ふる　須
笞もちては暮るゝ初の菜　蕪
条宮の連ね殖へる経生室　、
港つゞみ蘇てしかく存葉　須
此町でよろしく仏まりし遠の茶　蕪
垣のまつれぬ泳ぐる軍へ遠　須

門松さへ寄てみて替りけり　芦
売揚しこいとりも下宿　涼
物いふも多くハ女房は未き半日　芦
かり垂氣も甘く候一斤二百　涼
足つのくく庭になれても去寄達　芦
近所おりもつける挑灯　涼
来るも来る月の素袷傍の下　芦
秋の出水ハ遅い了りやう　涼
通逃てもの菊の隠居のちからなく　芦
東風の吹れ只小鮎しきれ鰹　涼
法労のうかりて居の夜値まし　芦
かけ合の舟の出来る熱菜　涼
商いも出せうみてその料理み　芦
見けなくろふえてそろの嫁子　涼
若うくとくれの卯や梅の花　雨之
身は鶯然子囀は高峰　亀鮮
植ふさけみ和布をとやつく仕送て　岑水
一つきのうすしくる梳海　渭風
椿鉢のよわとりて何度の秋　鮮
すゝきにも世ゐ子涼の吹かの　水
家蔵て来方の旅の下駄まし　風
鞠子へゆくく状も寄書　鮮
小米手探の煉物店さらし　水
にむのましく井於水を鶴る　風
熱紙の出先多く志てあまり　鮮
三夜め於旅を付さ慈べせ　水
俄俸肴の茶に寇られけて　風
行かある岩を花のこれ越　鮮
秋ふ茶蕈の年貢も富しさ　水
つまみ食して只去牡丹餅　風
顔色あまき遊ひまさむの手　鮮
間もとさ似る娃縁しさら　水
八太夫泣ぬめつまりも去家く　禾木
えされ盈を花散くへなれ　伯遠
讃みめも大議論きて坊の所　雨之

門掃させる音そゝぐ夢うつり　蕪

棗詩しらへは宅下著　渓

物心ある女房は来さ出陰　蕪

かり重ねも甘係一斗立　渓

足つゝみし庭は荒れても長遠　蕪

近所出行につける挑灯　渓

来るまで来る月の青梅のうま　蕪

秋の出水は遅いて引やう　渓

近づいて蜀の隠居の名は高く　蕪

東のあなた見ゆ佛しきいらへ　渓

法力のうかりて石の兵婚乞　蕪

かけ合の角の出来る熊菜　渓

商ひも心せうみての料理み　蕪

里けなくなふえてやゝる嫁子　渓

若くゝと年礼の衆や梅のもむ　由之

白衣花茶婆楼の高峰　鯉

植ふさみ茶和布とやうと仕送て　芳水

一つきのくるゝしてる椀侶　衛風

椀鉢の底も残れる月の秋　鮮

それよりは世あ子涼の吹ふ　水

家並みて来行の傍の芥桃乞　風

鍋子へ呼くゝ状は寄遣　鮮

小中手桂の湯は居さゝし　水

ぐるのまゝく井は水と汲る　風

熊紙の出先ゑを志てゐず　鮮

引きり起を惚めちらさく森　本
筆法ふとりかんえき数績　遠
火串の流へくさ所　踏也　之
傘もさし旅ねむとの通り面　本
諸納ものを写しに　鉤書　遠
かうられ帰る子ちる銭入る守口　之
ろて鑄のみさ諸の文める　本
木兎の子らかる筆店の角　遠
石碑の屋根へ京瓜をひろる　之
算盤ならみてハ合ぬ下り染　本
財布さびしう世て痛る　遠
つひまると志やへ嫁る夢の声　之
土間ちまえくむ狗脊のけく　本
小松つ子一本むの忘さり　遠
人の出入は志々ぬこうせくの　之
若菜摘みも兄て了墨田川　護物
ゝのすかれぬる黒月鶯　一陽
見渡しの三社ぞ霞出て　物
あつまりおつ子人の入来る　陽
明月も近く蒋積をかさね置　物
虫も鳴あき庵の露の末　陽
池清く外程ハ淀の足く秋の風　物
ちよつとハのまぬ挨拶をする　陽
松菊の老人をき伸る土地のよき　物
荻ちる枯と云あく高峯　陽
又来さやくは渡る獅子の笛　物
かゝりと面は白ちしくきたる　陽
亀甲ちるさわに植田の月ら院　物
井ハ日近くす萩の花為が学　陽
冬籠不世話のやける餅搗抹　物
海の洋尖ならを着つきかり人　陽
霰つきゆるゝ結付も色の内　物
志水く東風ちさくく竿鼓　陽
雛鳥ハ柔雪の花をう洗ぶて　ゝ
蛇の吉珠嘴阿みる子ちり　物

引もり起も[illegible]めぐらせて森　木

箏杖ふらりかゝへもて藪續　遠

火串の添へくさし踏込　之

傘もさゝぬ[illegible]の通り口　木

紙納めのを運ふ鉢寿　遠

かゝらし[illegible]子ども紙へ寄す口　之

着て錆の付し鐔の文める　木

本尾の[illegible]かく峰店の肉　遠

石杵の屋根へ京瓜ならぶる　之

算盤のみそへ合ぬ下り染　木

財布さがして[illegible]せて落る　遠

つひ寄ると妻へ嫁る[illegible]声　之

土間に[illegible]さむ狗猪の行く　木

小流つた一本むの[illegible]さかり　遠

人の出入節志らまさしての　之

若菜摘ふも尺て墨田川　護物

ゝのすがた[illegible]春の鶯　一陽

見あけの[illegible]紙に霧出て　物

むつまりあるに人の入来る　陽

明月も近く[illegible]を寄せる　物

出し物ある庭の[illegible]　陽

汐漬る程に[illegible]のよく秋の風　物

ちよつといはれぬ挨拶をする　陽

杉菊の[illegible]を伸る土地のよき　物

花ちる都とこそ高泉　陽

[illegible]来にやく[illegible]獅子の舞　物

かゝりと商法るましくと案む　陽

兎角まるでかに植田の月と流　物

井は目近くに[illegible]師学　陽

隣から隣へ風呂を呼ふ子来　陽
雪知る鳴のふえて静まる　物
まつく鍼に根の高しるぬ病上り　陽
人目ての見えて舟の出も出ぬ　物
涼もしくぬ老漢の神の出合　陽
舟かり掛て一漕へする　物
そゑしと月に純てる舞の上　陽
前ぬ子垣をも残る新点　物
情ある庭つゞきて稀く高ひ風　陽
主も定めぬ山の椿畑　物
奉公の内ハ住か旅をして　陽
つれなき嶋の隣に似る秋　物
我の家をも嫁に見舞は嘆く　陽
何者の羽ぬたりる細門　物
諸先生見ては見舞は訪好る　陽
隔る分きも老ぬ番鴨　物

猶やまぬ二階さしてや入めき　永光
ゆくゝゝの知る満春の帰哉　仙遊
旅衣着く宵一把翻りて　光
又逃かるに衣をも取て来　筹
就寝ハ皆さよひけの月を待　光
忍さけり持寄さ秋風　筹
生垣の庭ハ瓶まき落水　光
むしり梅干を受くるに包まる　筹
実のなき木に志くゝ接立　光
渡霊もひきれ新田を汐　筹
まだ新もぬハ老辛き撰る　光
うるさくも解る孺子の細帯　筹
古池の底ハ清に月涼し　光
只乃舟ありしにもよ乱蛻　筹
方丈の縁へ屏風を立廻し　光
丁児として将棋差いる　筹
亡者の留守ちん接ゝ桜やるゝ　光
薬の咲の袖る事像吉　筹
川若子流屋志くる保生て　、

うつくしう見ゆる所は鶴かな　光

寒一日ゆてもたきやき田楽は　蕣

横綴の帳の押しやくる　光

出店から金をもらうて帰して　蕣

みなのよしをもまて針和の上　光

さらさらと雨中をかまはずれ　蕣

ねぎよりて大豆三銭の汁鍋　光

そこいらへ見て法則をあちこち　蕣

百の篋ほどを六高山で見る　光

様子のよかくに付る月の影　蕣

竹めで屋の下りる渡場　光

本堂は雲猪の大きな林の果　蕣

楊枝のけさを傍で寝てある　光

お通りのきたなき事を掃きあり　蕣

ねそうも朝は素直を出る　光

此前ハ去一本て眼やりそ　蕣

来の内このうけ傘かもあれ　光

客の中に付出る長刀持　雁高

籠しきは妻は月代　杜巴

蛤も蜆も少梅にふしつぐ　赤木

手桶しくる寺の挽割　高

二階から涼む風の吹き出し　巴

猿の騒がる大釜は下　木

柿を地主本谷は本自摺　高

中の丈をもまず紙に　巴

吉田屋の傘さしてちらちらと　木

花が咲いて喜ぶ人ありと云　高

寄る大緋にて錠の来てあり　巴

屏風内にて三月さへ　木

お通りは鉄の座る間の内　高

小袖など形の夕に来る　巴

聲と共に菊見に済ん合　木

なにより吉原で季をと庭下駄　高

左隣の帯より雪本に結ふけ　巴

羽水にしつかり端のは　木

うかくさゆる水に浮ぶ鶴哉　光

寒一日晴てまたやさし四五日は　篤

横綱の声の押しに溜る　光

出居をるの人よりうちとけて　篤

身袋はさみて針箱の上　光

さかりかと雨ゆる宮の春はれ　篤

ねとらぬ葵三枚の汁鶴　光

そゝけ立ち法制もとなえ出し　篤

百の施行を六齋に出る　光

横雲のとりかくれは月の影　篤

汁めくる所の下る渡場　光

木曽の落葉積のおむしろ林の果　篤

猪の二疋を繕つかね　光

世遁れの寝たる太夫捕もきかり　篤

ねてもかめ出家と思ふ　光

此度は一本ずつ脈やわる　篤

妻の内へのうは傘持るあはれ　光

女の中付出る小刀持　所高

籠しさは妻は月代　杜丘

蛤も蠣も海梅に吸きて　赤木

手綱しくる當の撥刻　高

二杖より涼しき風の吹渡し　丘

縁日に詣る大雲は下　本

椋を子地を本綜は本国播　高

御の丈を高くも手に経本　丘

吉田屋の傘さしてわらはと　本

名をうちて素似る人あり屋台　高

賞ある大株に撰の弟子あり　丘

屏風をたてゝ此のすきさへへ　本

打通り子供の落る町の内　高

小網売り解夕々来る　丘

堀けは首見は寄合　本

鷺野え薄りもちとふて榎の下　富
紀尾井坂のゝ縁の明出ん　冬
大風に相眩暈ゐ小挑灯　木
椿ぬくふるゝ寺の物入　富
旧鵯の咄岩さりに塗なり　冬
兄ともつ屋敷き境極に酔　木
濱様のよく疵を流を雨を結　富
ものゝ坊主まゐつあつて来　冬
吹くさやう意待話の急之　木
一息やゝれ稲ゐ〆立枯　富
月の宿柱に光りうつろし　冬
常盤出を机のうるて　木
樽を志さて形見なり　富
泥き流まて慥ふ泥足　冬
咲かくと京田伊丹の菜出ん　木
のまん結蕗の白小傘さて　京
行列を早く見くる虫暑　冬
未のあゐへる酒生す大根　木

大池や鶴の下居て饒有　五株
舟さゝく冰く渉ゝのゝとる音　些室
薮入ハ咄て庫るより海の遠　株
庭屋の風を子又と出かり　室
ぬけぬる行ハ本迄吉往　株
寒月一きゐしめ衣の髏　室
瘡癒るをやゝと雲る蕭條　株
萩浪寺門をかく乳曜ひ　室
鬢の毛も乱るゝ程の両鳳風　株
行きつゝしのゝ迄枯野ハ　室
八瀬の牛大悪たけも飛進て　株
抄子ぬ芽をくみける壹　室
月夕んなと男も庭ゑ煮抜て来　株
不用意のゝ風やうさき　室
杭杭朱の咄宮をゝ明俵　株
瀬ひそりさひゐ擦さゝ　室
散ちハ菊て静なる胡　株

鴬鳴ゝ蘇りたふく蕨の下
紀尾井坂のら縁の明出ル
大風に相脇暈ある小挑灯
椿にしふて寺の柚入
几帳の出来さりに作り
見ても乃紫き捩海に醉
濱松のよろ寝を流を笛を結
まつもり坊主達つまぶりて来
此ころ至や色結ふ結の思之
一谷にふれ稲穴ノ立枯
月の宿桂を光りうら返し
常留寄に机のうつる
精を去志かる躰えけり
浅き流達て渡ル泥足
此ころと宗因伊丹の名ある人
の連ん結薙の白小幡て
行列も界ゝ高る去墨
為ゆえゝへる活生きた、根

大池や鶴の一つ居て纔有　五株
冊きらく此浦のくる言　與宣
薮入ハ暗て疼るよう使ひも遠　株
庄屋の風呂子又も出ぬり　宣
嫁付ぬねる針ハ折込古柱　株
年月一むかしたる夜の髏　宣
庵のたゆると書る蕭條　株
秋深み門を抑く乱れ心　宣
鶯の毛も飛る程の疾風　株
行ッやしのら道枯野ん　宣
八瀬の牛大津牛も眼進て　株
杓子の芽をとりける春　宣

うつりおくれの鳥かちらちら　宝
尻つけて箒相合の浪花の事負　、
油うりもやりて仕舞ふ針祭　株
ちらちらと厨子も出て拝みに立　宝
丸五六日何の無尽誂　株
寄合たて遊んで菜治田植也　宝
納屋に仕込一俵ばかり置　株
麻布の左右吉ちらし路次に　宝
打ち合せして咲く成さき　株
やのまゝは話ぬすむか鳥に　宝
菊作り売ぬ猫の稽古　株
何ぞ破子に在る帰る月の下　宝
二人の世帯に秋なくて　囫　株
物やはく家かしく秋雨状　宝
痛む気寒さに薩摩を深る　株
株へ口付て何になるか隣稽　宝
打水すきさも秋新茶　株
ゆかりなき物置の薄ささき　宝

こしかけ茶屋の本見寂し　株
薬掘をも合てとまり深くかゝれ　永狐
簸に水溜秋ゆける算をのひ　由楚
宿さるゝ叢を往に掛ぢらく　狐
つまづく石をも忽出しなり　楚
緑山の月見なとのむねこそ汁　狐
たれ何の羞すゝ袖の下行　楚
無稲のよ略もなるは無ねる悪　狐
其の当手ける組の足桂　楚
雨を乗る揚屋自然の四季猶　狐
いまはゝもよらぬ咲すはらせ　楚
室町の静か応寒に宝降　狐
虎へまうるいせうる秋さ先　楚
川ふちの桜印をかり中の秋　狐
おくゝめせらさす稲の妻　楚
沈筋に穂え鳴子秋葉かり　狐
納豪の稀は四ツ門に庭　楚

うつりおちる月の扇かちるわら　室
尻引けは算用合ぬ汲手貢　、
油もいりて仕舞ふ針箱　株
ちよくくと厨子を出て挨拶立　室
九五六日行の無天読　株
奉合かて逃ん菜汲畑柚也　室
納戸に仕廻一俵なり豆　株
森雨の左右をふらく明渡し　室
持ち合せして笑ん成さき　株
やの字ゝ見請ぬ毎ちかう通に　室
筆結む売ぬ借る桜持　株
行ろ暖に為婦おく月のそ　室
二尺の雪に耕うてて 圓　株
切もやく宮もなく結局状　室
痛む楽窟に蔵箱を揺る　株
横へ口付て行く着の狩猟揺　室
打水寒さきを結新色　株
やうくに初雷の鳴さきぬ　室
こしらけ茶屋の小売窟し　株
茶樋を並て見世まで追結ひれ　水狐
蔵に水揚結行ける算用の次　由埜
帯とる菊を柱の掛物く　狐
つまつく石もとに息をつく　埜
深山の月見なこのむねこと汁　狐
きれ行く草をすら袖乃下泣　埜
並稲のこゝ壁も干うは喜ね無　狐
其の番まゐる組の足輕　埜
雨をきぬ揚屋留居の四まどう　狐
いまはうとものはらせ　埜
宮中の記の毎ハ声つゝむ室の瀬　狐
恵へまかりいせうる結さ天　埜

もめこゝ人の嫁ほと笑ひけり　狐

桐鉢の二つ蕣をまつ門　蕉

宇なからぬ密晴雛を売耕　〃

賊こゝろにはせる菜畑　狐

延されて雨ふるに旅支度　蕉

四五日のぼる坊の宿をとひ　狐

植てまつ石も荒し井の蔵破れ　蕉

作さとゆるは醤菜のこゝ　狐

咄さは嫁菊の御堀をさしうつて　蕉

ころり大工は能きおくあさき　狐

見せるうひをつゝ減る茶屋　蕉

陣屋敷の塀をしまる　狐

盲子ぞ思ひし月の入のこり　蕉

花白小袖干さるる手には　狐

鳴虫も露をうくる末枯れ　蕉

さそひ合せて酒ひやしけり　狐

もとや出る地蔵の井戸を掘す　蕉

高館と見ゆる宿のつまゞり　狐

てらしたる跡の影　蕉

鍬ぬきて行し田の荒らむ　狐

明安き松をつゝふや本陣に　来木

楊の花ちる薮にしら月　嵐雪

春山もさらに茶庵の鼓張て　言人

よるは汲ひに菜船漕也　木

生る付手遠くしつる大掃除　雪

冬物出て雨は降ても宿　人

一艘ん寺井圓筋はさへ風に　木

茶碗の音に帰宅しける　雪

隠柱して持せる芳庭　人

菜の袖をも嫁の上路見　木

向ひ海きらんと金しらついて来　雪

路も見えぬ藤の下家　人

折角とつきよき月に雲の中　木

出し振る菜の初茸　雪

町廃とみせる毛見の供　人

おのこゝろ人の新婦を笑ひけり　狐
棚釣の下に葉をすゝり　埜
雪ちらぬ窓際雑を写耕　、
晩ことのしにせらるゝ茶畑　狐
延されて宵に泊りし旅支度　埜
四五日ゝのこる坊のなまかへ　狐
棲てすこし乃出ぬい舟の蔵は張　埜
篇とものゝしれ醤草の門　狐
咄さ欲簾の御扨をしかりて　埜
ちらり大方は散さおさき　狐
見せるうひをつて減る茶屋　埜
揚屋衆の縁をとりまる　狐
育為て思ひし肉の入のつり　埜
茶白出物にいるゝを御し　狐
鳴虫も露をそへる家枯平　埜
さそひ合せて洞ひまにけり　狐
本やり出る地蔵の井戸に堀下す　埜
不断と見ゆる森のしくまかり　狐
ちんちん塚て住さる〃、羽の影　埜
揃ひて花し回り霧ふかに　狐
明安き敷もつらぬ禅木傳に　来木
椽の出おる藪こしは月　要雪
花ゝ散とせる茶庵の数殖く　言人
よれ波ゝ汲ひて茶船漕也　木
暮る時を違ゑて了大掃除　雪
参詣は出開は陣ひとまか宮　人
一ちんに中宮崩は天風邪　木
茶縁のまゝて帰宅なりける　雪
蔀垣して持たせる芳庵　人

秋勢立の垂井にへうまし　木
畳崇の出門のたゝぬ世の沈　雪
盆みにふやまし妻の村雨　人
ガやう見せてうぬ壬生踊　木
立場の太の引る〆る辞　雪
肴板にいれと素鉈る印功式　人
立派につかし鉄砲社常　木
眉なう鼓にひやうと夜の雪　雪
荻無はく咄咲もおれ　人
額堂の地割いかうと坊所て　木
維文とけに楽うぬ山青　雪
枕向へかうたるに行列世帯　人
居合も妨のまも痛てもかり居り　木
放しる雛雀の戻るう月秋　雪
京瓜の皮もとたに結て干　人
賞て来てうぬ南市の升　木
世風と消る神乃灯　雪
よい水は二軒宍合に一花ひ　人
代官の沙汰とあへくいなれ　木
蛍日合ん鵜と長ふ本の本　雪
ニわれて秋と志作行の客　人

何となくなのひやひく東くれ　林菊
まさく雪の峠つくくて　梅暁
手しく鍬きに骨れて　杉夕
とれも端末にかけて付祭　菊
対言合もかう月夜の原よのれ　暁
何まうて峰を出も掛しさき　夕
たゝやくも若参そう門毀　菊
生臭きれ寺付の返楼　暁
用らんは鼓そ娘をみうちせる　夕
耳この仰やとかゝるつ合さし　菊
二三丁尽く掛かを緩さつし　暁
岸のおうしぬ雪の肉　夕
後うし盃宗飛を植にけり　菊
肩の紙遊れ鹿く編蝉　暁

ゑ鶉の中に番猫を寝さらり　夕
生ゝ好ゐ海を好きらの　菊
さし出る月の嵯峨野の庭　暁
甚の名ハこゝろの仏にハ　夕
小蛇蝋の横手欠松居さ出　菊
細目ニ門を明のけて寝る　暁
金もなりまうて振らぬ瘧病　夕
棟梁構ニやりしいつく　菊
手紙召ニ寄してい樹子捕り　暁
実の大ぬらぬ減を題目　夕
飯盛中ら何やら流行来て　菊
待る方りまたら不弾出　暁
物言ハ波筆で横へ町地面　夕
去い銀をとりかける香剥　菊
大様ぶ梅月るらへ月も流　暁
生帷の行ぞ串焼す汲る　夕
眉画るも数禾も間し渡る
花をいそけそめて桜のへる　暁
桐箱のまゐり柏子引かり　夕
骨正月もまんでこの人か空
衣を結びけまゆるあの台
独居の句ひの残る香花

よし物やこゝら人厭の下に　禾
いまさと東風の寒き初夜　文
旅底の疾して起き雨ゆき　木
葱菜さけす足らぬ小肴　昇
桃の手の行燈とりて月の前　木
小路へ行く白き木屏　昇
乳錬もお殺し鳴きも出逢　木
三日手の何としおかるる血の花　昇
味の無き多り何う出悪さ　木
羽子孔中の体も皆打　昇
水のへくと弁団筋の荷を持て　木
お庭屋敷の見るつゝ不埋　昇
河しくとら月まも空の大　木

東叶に春る池の広鴨　昇
新らしき畑さらひの傍ふ杭　木
甲待ここみな葉肉出る雲　昇
ゑ以俤捨て来る所西行忌　木
赤剣らしかのふ阪の春面　昇
一里百ほとくの傍るた会通し　、
身公やなくて聲結押らり　木
文情ほこゆる庭の偽名交り　昇
近りねけくる芭の叢　翁　木
擬抜へ術中の旅り折きくさし　昇
近くつこん尓大旱ハ無し　木
相對て船便きめる川涼し　昇
唯ひ笑ひに嫁りえなる　木
嵐吹る猶の程おもる御席に　昇
吹くる躰して出こらふ衛立　木
陳春とる鼎吹国内八公の二叶家　昇
唐人でふ七脈い説譲る折　木
初冬の嘆るとも小川ハ新らき　昇
境も陣もえ船中の消　木
争昇のなくよある古轉併結　昇
かきよ上ケ泥の名さるし隔そ　木
夜の事がきのものふ為帰て　昇
言葉こしまの作る海苔の末　木
雨水の溜よせつけぬ清水かれ　浮高
女貞（サツハキ）さく境結内外　大鵬
楝ほ作る薪ふ一日火を当て　高
小附ちも先に尾先中の尖ゆぬ　鵬
暁の月堰より末の谷川尓　高
ふけ泳きれて参ちらく来る　鵬
娘まる画あけつく菊の世話　富
根いよふまハうつと気を活　鵬
達こ葉花葉さらと奏く色　高
ちらりく雲のこのくてる雲ゆ　鵬
かくしく宮仏帰る風呂の中　高
ふかい刀ハささぬ小阪　鵬

よる月に錆の浮たる何も逃　高
二郎まく細ッけ見る眉　鵬
染の色隠れもとくけて動出　高
漂の性なり尽し嫁足　鵬
咒文の符つけたる也琴　高
伏見木幡のいとゝ遅きね　鵬
営に地形普請の継ぎて　、
強く利ける洗濯の糊　高
月のくもち大概通る目雲脚　鵬
さわりも嵩進て出る盃　高
衛上に揚屋に何の高とよんで　鵬
演のおそり結むのくとする　高
土筆に纏金核蘇一つ　鵬
肘を張りあふる茶を飲にけ　高
紙に深も男にかし渦くく　鵬
やさしくのかて出来るすみ神楽　高
神楽の町幅広き秋の月　鵬
作よ高くとも見ゆる弦鳴　高
角力場の喧嘩も酒呑の噺て　鵬
やんちやり肩への背る鍬把　高
堅様に花の香のいゐ住持　鵬
元結もり結ふ頃に集る　高
山の花禁の前も咲揃ひ　鵬
嘶りとめ形しに予の嫩り　笑
幣あて足を古み清水流れ　木
蕎の席は菓子に薫ヶの風　百丈
継竹の良体こもとへ帰て　木
外ら徳利も鶏の七し垂　文
新の肉也力り肉け浪面側　木
其く白扇で秋乃夜程　文
鬼灯の汚ひに枯枝の交へ咲　木
二人一諸に傍西乃寺子　丈
めつさうに衆れたて後辣腕　木
小妻紙のくゝる田の涤　丈
馬の脊も車の上も土大根　木

よく月に錆の浮たる仏かな　高

二親なく細ヶ中男ヶ居　鵬

旅の衆隠居をさくりて勤出　高

濡の性にかくし嫁臣　鵬

只度の待つ乃る心寒　高

伏見本情のいとく遅きね　鵬

夢に地形普請の跡続て　、

後ゝ刷々る洗濯の糊　高

月かくも大概あらず曇雨勝　鵬

さりとも逃て出る盃　高

御上方揚屋に何の舞とらんで　鵬

濱の松てり結わふとする　高

土用芽に雉金核蘇一つ　鵬

目を土りあふる茶を鉢に行　高

紙子深き男にかし添らく　鵬

やさしくのかてせきるすみ葉　高

秋茄の町幅広き船の月　鵬

作にあるくまとよる行鴨　高

角力場の設も苫は浮の蔬て　鵬

やんもりく肩への世る秋把　高

黒桜に旅の杏のいわは付　鵬

文語く結よれ旅に来る　高

山のお禁の花も咲残ひ　鵬

伊りとめ形しけ斉の峠　筆

常六尺蚤を出る清水かれ　示木

蔭の廣葉に薫る風　百丈

継ぎの良体ともおる帰て　青

所り種刈出し精のよし垂　文

船の内もかり月さし南側　木

まくみ籠見秋乃淡粧　文

鬼灯のかひに枯枝のなし咲　木

二人一諸に傍西乃寺子　文

甲子の日は急度かゝる雨　丈
五三尽根太衣家は土蔵哉　木
こせうる計にくさう盤を以　丈
昼の月むかの楷に酒のつり　木
山深ふれた嶂焼蓄　丈
其運き一字般若の供養證　木
蝶々ゝ浮世せゝらくさし出結　丈
多家舟の旅ては絵ばかり乱座せ　、
嘴息ふくもを啼きてめくのる　木
篠蓉を鏡盃に萼蓮へ　丈
二階涼子に稿えゐち出る　木
釣人未ぬ子出羽の老る貝　丈
眠るとき顔を眠らぬでくいかハ　木
佛とも神ともつらぬ梓弓　丈
さらりおつりと朱の波和ふ　木
村尻に又奏ゐる空舎丹店　丈
水くり柄てゝ賑る屋てッ丈　木
あんのけとゞ嵐のかゝるも代葦　丈
庵力ののれ先への菜門うきも　木
涼出て家路に新海の探ゑあ　丈
園ゑのくして やけの紅葉焼　木
一かゑとれ小豆の芳むの粋　丈
粉るやうに田螺帰く　木
燃て遊ぶ社の名の亀ふ錦ゑ欲き　丈
説さ布子もこゆくる花嵐　木
経もなく出たや月と花の綱　紫人
首進て籠る為拓退風　総植
淑縁の我は綴る志空花ふか　人
かくてもかり継をとりんかくる　植
空を梅を咲さず惜しき絵店　人
隣に離を一定の嫁一寸　植
下店は海添て無ゐる上店へ　人
下りも国し人中国船　植
又か雪日の入際の立ちぬうて　人
廚所の根をむつしとんかまける　植

甲子の日は急度かりて雷　丈
五一貫親父か法に暮　木
うせたる針とらる盤もとひ　丈
昼の月むかの楷子河の一り　木
山際かれた幢煙鬱　丈
真直き一字般若の修謹　木
賤しく従せる身をさき大将　、
高ふ舟の旅ては猿八九れ座そ　丈
嵩息からも清まてもかのる　木
陰菩を錆し盃に筆並へ　丈
二階凄子に稿見ほち出る　木
釣人ま来ぬ子出家の声ふ責　丈
咸らるき歎を歌ふ叶ふくしむか　木
御とも罪ともつかぬ梓弓　丈
花ちりおつりと床の波の和ふ　木
村居は又来ける宮合舟左　丈
収くり洒ては取る屋てっ丈　木
あんのりとたゞ岩のなかるも代萎　丈
角力のゝ先への茶つらまむ　木
涼出て見所見え新海の孫ふさめ　丈
園ゑのくして やけるを紫藤　木
一かくえとれ情見る苦も心の粋　丈
持たるやうに田螺帰へ　木
嫁て遊ぶ社の前ふ餅売あき　丈
洗ふ布子もこゝにくるれ花　木
経も夜く出たる月とやと御　紫人
岩迄く着る屋社退風　芭椎
湖縁のおいは続く去定納ふか　人
かろうとをかり続もとかんかろる　椎
室梅を咲せて情きよ陰店　人
隣に離き一宮木小嫁一寸　椎
下居は海渡て舞る上居しも　人
下りも国し一人収国船　椎
又も宮ねの入陰のなう松うて　人
廊所の振むつもんかまする　椎

宮崎参りて浪の熱田様　人

まつやむらも子月のいさよひか　淮

松茸の積りまたれと話けむ　人

笠鶯くの第も宮の餅並　梅

散乱をしてはたらける鴨の文　人

よろしまとより錦は力くれた　淮

出勝て今に出もるさ方の屋　人

稀代まての作より川船

行くをみ味で八寒の路居り

家ろもの宿ま所了葉陽

陸駕しぬ此境界で此影は

木鉢つゝあて風掃出去

夕顔の棚まで鉢る一ゆくち

在東都り夏の鶯

件さ女と出るて気眠かうかさ

迎さ前ざさみ本なる所で皆

宝陰ハ縺の中なで此籠に

蔦さへ行れそ勝ふ七升

月行くまも初めぬもを学徒なりき　淮

経文の始子賊の象のさた　人

雑義でさ杖へきるのハ子之苑　梅

さ便の袍の芭蕉ゆくく　人

出銭らやすくあまり連れて　梅

柳の紫をもの浪の籠竿　人

試の菜まも酒さ浪下屋敷　淮

筆絶ゆまで遊ぶ寸寄四五足　人

寺月る枝やさ年も初紅葉　直立

乱くえる舟橋の月　梅翁

願ひまで退出の帰つれて　崇酔

東風吹きに掃除志か付る　其月

新洗ひと豆腐の泳ぐ風も待　岳路

生わでも呑みても焦げ焼炭　立

出生しなくて居なくにしひ鐘供也　菊

賣茶寄れと声ても根土　酔

おろ家めく丁児店を村まの世　月

宿場金かり堤の慰労種　人
まちやむくらまに月のいさよひか　推
松前の福も点在ハた蘇り益　人
笠置ゝの第七宿の新並　推
散乱をとくハ流行る鴨の友　人
よくれぬ雨夜に的し繕ハかくむす　推
出勝て今出きてるさえ名屋　人
稀代まての清よる川筋　推
くくみまてハ妻の治病　、
家らもの宗度ふかる菜湯　人
渋呂もぞ此境界て此厳し　推
本誂つゝめて風帰出た　人
夕執の糊よる誂る一ゆくち　推
衣裏辞雅の夏乃蛍　人
件に老とろる気眠の目ハたゆたし　推
むさあやさみよ無於手習　人
空候ハ鏈の本あり法羅経　推
嵐さくハ月れも隣よ七ツ　人

伯恋らる秋草の中の月襟　路
時あるに契こめつきし此夢　立
信楽の渡しハ武蔵よ亭合　箱
掛種もち秋しまて誘る月　酔
作の鰍あ迄に凉み花へし折　肉
味さんのゝ河らる海ら流を汁　路
一寿きり情く大波のゝり　立
佐移し幼住庵も古箕　箱
春の肥さしすゝる禰箇　酔
随まめらく金魚子艶蕊を蒔　肉
羽織をぬいでつよ風成る　路
杉菜と小笠る畠てゝ日の暮る　立
地震のぬやよく宮掛あつく　箱
針仕事え為す静子典との聟　酔
洗ひ物衣子物月る飯お　肉
石弓さ流籠て渡れ咲風乾させ行　路
百笑通を村每てゐる　立
熱葉子花苦満さと筆莚　箱
こかれゝ様を採り左月　酔
突かけ交座藤ゆる嫁と掃　肉
狗算用子帳かたもる　路
町中ら錦の遊合子気を高　立
宝探出ハ由るら広法度　箱
果源の足子ら奉する六笠小　酔
ゆらくこあしく子気ハ条所　肉
明るくく蟹古らあてよ分き　路
陸井のよりも安以波舩　茶

蓮して森雲出るや今さの秋　素伯
荒の露袖おりしるしちる　禾木
月見を焙ねくの手を文て　伯
古雑談子蓑火をかほし　木
弓付お出さるかりの老人憐　伯
打角段く梅の生あわるく　木
興覺を峰子巳さく植岸と　伯
挨料ものて絶ぬ代稼　木

納まるる秋草のこの月襟　路
時ならぬ契をかはさし床寄　立
住果の夜しハ武家らし幸合　蕗
掛種をまく袖しに詰る月　梅
此の餅過て咲る花へし新　月
来さんの河にかなふ旅を行　路
一歳を後大波のこゝ川　立
佳程し幻住庵も古巣　蕗
蓍の脂さしてする詰香　梅
修羅なるに金魚が範蕊を蔣　月
羽織をぬいてつゝむ風呂敷　路
提灯を下げて帰るねの番る　立
地震の夜やしかと言葉とゞく　蕗
針仕事なるゝ静な女の部屋　梅
洗ひ物するに娘ある　月
石ならぬ流れ筌ある岸の風の姿　路
百草過を村毎でうる　立
熱茶も菊花も茶　蕗

さゝやきの間しくも宮炊　伯
めでたき日のね居風呂を持　木
肱つけて双六盤の下座にも　伯
まうしい笛の中にさす月　木
出来過て表さる國の瓜茄子　伯
手ひまひは拾る山公事　木
小路にあるとたまなる家の羽織　伯
筆さへ何ほとも今も出　木
入れの旅すに遅き出勤　伯
こゝろもとなく交る黒鴨　木
二の宮は懐たかね堀の内　、
味町何ほとり小男こゝくる　伯
妹のきは治ま近うるい給ぶ　木
碌ともきみんゆふ雅居をふ　伯
引越を師走の市に持ち出て　木
人ま目つけね宝か不咲　伯
生玉を恋しゐかえ宮津産　木
見るは猫の涙よくきく　伯
九谷の上なる心つかはれ錦　木
やや高くかにまうる出衛　伯
明月も途中で志る旅衣　木
碓くゝせて老のはてきく　伯
主家の後に無仏の姻事　木
二人と立いめぐね所定地　伯
中々に对代の志ほね大ケ硯　木
百のかりても出きぬ甲子　公
大川を越えて京に出ぬり　木
耳もとてつく鐘霰より　伯
猫のまや風のまち帰る笠の内　邦泉
若口揃る接結ひり月　丁酉
残法子節気寒く秋の来て　英泉
嵐荒し然工丈もそくまく　邦
いさゝか小浄出生堂のはなれ　丁
答てはれな間ところ仙　英
何れ姓罷て若に寄る唐津焼　、

さゝやきの間しはし寄笑　伯
めてたき日なれ居風呂を待　木
肱乃付る双六盤の下座より　伯
まろしい窓の中にさす月　木
出来合て素なに團の花薄　伯
寒ひ違ひに起る山公事　木
小路に有るもたもの家の羽織　伯
筆さへ何はれても今うちを出　木
入れの後身に遅き法師　伯
こゝるもちゝりに交る黒鴨　木
二の字法様たかなし壻の内　、
味町何まり小判こゝへくる　伯
妹のきなほも近ふなり鏡台　木
藤色ちきえんいそ羅生門　伯
川越を所者の市に持出る　木
人手に付ね宝力り果咲　伯
生玉を志へ是非先寺津遠　木
ひるは狐の鳴るをきく　伯

坂のあかりに伴ひ来る　邦
物さ出来る蛙を煙にかく　、
水波にかよふ井戸のさくやさき　丁
柴阿弥陀のまで銭を種に咲かれ　、
鮮て写る葉を切る角きち　英
醒ハ炭つぬ縁結月の扇　、
数のまつけをまでるやく宿　邦
いちまく新座の通配られて　、
雅唄結男飛し皮ゆる　丁
掃ちきりぬりの乾れも髪　、
まつ苗かきハ十かを取し　英
営の巻くも返されを家　、
うた探もて紫の下を左寸　邦
川口の昭とを出めく八ツ下り　、
不二を左に籠無く客　丁
物茶に奉れ泉を介の緒お椅　、
入枝まこのくら麻疹こにのる　英
産も宮まちき保まか庭出り　、
風の吹まゝに代る葉　邦
花見廛の出もみりさ祝識花て　、
口の粗さみきん人たる斜め　丁
咲らしく杭さの浮る月の雪　、
忘れ行やる等むらの露　英
茄笛子淋しう恋しう濱の宮　、
眉の為きも恥悠悪さし　邦
待けりしかい尽き流落るゝ　、
面を漏―て墙倒る壁　丁
追分の土手をそろく咲かり　、
妻の遊ひま眈る二人　英

待時ハ雷風を凌し初百薬　抱儀
山根の月の出切る霜宮　枝玉
群舟の秋ハ芸情う博追て　以莪
傾の枝うぬかれをとる猶岡　南梅
寒前ハ急ヘ仕へ行る猿七夜　玉
吹の灰を集てちきりなり　儀

五斛を呈る雨祈の出仕して　枚
神のこゝろハいさぬおかしく　蕪
紫陽花の都ハ安粧まかり　儀
喰ふ賢めいとまらぬ下諸　玉
井筒屋ハ曜ふて器ハ降けら　蕪
御免勧化の鐃撥しの鳴い　枚
生向ふ木まゝ月の出かゝり　玉
実の那る路わしい棕の木　儀
無造作ニ住のける梅の甕漬　枚
恋よりさしても耳のゝわせる　蕪
詠てもなくふけく出ゆきの空　儀
若とく一枚はらひく謡會　玉
方丈もなは来の客はこきれ花　枚
ゆかしも霞うらなてる春風呂　蕪
雲きうに財布の紐を投出す　玉
襦袢の袖で粂を拭けなく　儀
ねの娘で御香園も小袖めき　枚
一統の海を二所へきゝる　蕪
新まいりし露の旅ニ何もなき　儀
騒々ニ参る増やまの彼岸　玉
古今集を肩つけのかくれの　蕪
虫も春しく詩書をくゞらく　暁
群さ居ゆん出きる風桔目　玉
三度秋まで見岩の口　儀
情し盆の家で盤於る鳥瓜　桔
みし寝るもひゝつしく氷ゝり　蕪
取りたく仏で大の鏡き釜の果　儀
雨律ゞ乃見る春の日　玉
月様にゆる天膳事と咲　蕪
原ゝ中情の名々来て帰　枚

無さめてんさうし来る雪の竹　雪店
華かる坊の屋さくへ乃仟　乐木
荒風身の下にも雪しく杖有て　荒
去冬公家の家しぬ又福　木
山風のゝさんきを月の後そう　东

五料を通る荷の衛所に行て　抜
神のこともいつとなくおしこと　蕪
紫陽花の静り安居まかり　儀
喰も喰で過ごめいらまいて下話　玉
井菊漬に喰やて客不勝から　蕪
御免勅化の鐘持しの鳴　抜
芝内は求まらり肉の出かり　玉
実の飛る貝布わしい将の木　儀
無造作に仕かける桶の鯔漬　抜
志よりうさしてもなる耳のうわせる　蕪
阿ヌも飛くみへく出入ものの空　儀
さこく一般の結ひく鈎る　玉
市丈もな水の出安きとれ元　蕪
吹けも逢うらねそる居良宮　抜
雪はさらに財布結紐を投出て　玉
襦袢の襟て衣をせけむく　儀
ねの暗て御園も小妻めき　抜
一結の海も二斤くきる　蕪
新まりへ直家床の縁を[illegible]　儀
駿の子分る墻形をまな[illegible]　玉
ちん字もを肩つかいのふきにの　蕪
武士の家し法き遠くとらく　抜
拝さて居り児安居なる風根有　玉
王成秋立る見暑乃江　儀
涼しさのえ空盤打の島広　抜
あしたらの方とさく氷うり　蕪
若さくは人の家の跡き釜の下　儀
陶信手の方に見る者の白　玉
月接に来て天狗に茶の咲　蕪
原に出雉の名乗る帰　抜

ぬくこの舟く蓮の実の池か　木
崩るゝも済ゆゝの深き篇　兵
病気のうえてよの心斎せよむ　木
むつ玄からまきき弁九の轄　兵
祇園祭の中の囃子へ入らむ　木
花くるそ蔵て流るゝ通論　兵
立ちまゐらせ来る蘚の名代　木
厳修の名を浮かせき極の月　兵
下駄へ可りせれ出し証明帰りむ　木
九て来るゝ舎まつる秋風　兵
種せしても蠟燭ま薪　木
むら安まの乃流さき棚の冗　兵
まらぬく宙改ゆくく降　木
社のもつつ紅や紅葉　、
餅香くけて底なる庭人　兵
こくめ食は滋の実を待て　木
つりひと思はゝ理る倹約　兵
赤檜と済て麻り掛け蛙　木
こん珍棒きせし[illegible]　兵
紙と拾て見ゑ嵐で衣庵　木
一枚の状を合細かくる　兵
屋らぬ流行出さる如儀椿　木
いつより何の中に鳥市　兵
菊花う鳴きぬ禁月時て　木
焼鳥は速ずまつりの庫　兵
遅来しさ安出き回石　木
上下流くれとせしれ余醒り　兵
本店と宗今子案所作のこと　木
御う流名残ゆうき濟の果　兵
雲様子むのき我浮水　木
御中のうゑゝや年の京　兵
左時本の歳の祭昭出で摘む　欽哉
乾くもやまき萬の報　鶯馬
古く都に遊む[illegible]　天遊
霧の雨のくまする門明　我

月にて桁の植先を知れけり　雪
素井そのゝきれけるさらに　遊
そろゝと家来の彼のゝ里　武
咲て通るきゆる魚も花　雪
篝焼の膳めよ出わり以前　遊
上の空人へ急ぎ行くる　武
傾の姿はそのまゝと諸る袖の内　雪
身を捨て来ても寒気のする　遊
初月は影の聖の露ある香　武
よく傳はなるいとく蟬　雪
揉稍の端て来夜に分け　遊
人より先へ年貢納めに　武
出植て畑にも少し流し　雪
申刻頃もさうる者はき　遊
朝の鱗鍬下地にして来れ　武
花の旅侭秀精とて盛る　雪
晴天で奉公人はみな出屋　遊
信子が春の世にあるその信　雪
形そとひの通りの寝ひろく　武
その本を熱がなりし涼　遊
思きうらみ往昔の書願く　雪
為の彼して家みゆけらひ　武
家来に船の位のとしく似合　遊
扇を影ろ盃としくさる　雪
一生口にいつのなゝき盃の月　武
命ある物と詩むりも出初て　遊
はじめての旅高ひて泰平つき　雪
饌の精のとれぬ無つて拭　武
鍬汁を思ひもよらぬ惣七也　遊
水を世を苦くに浮る瀬行　雪
香居の外の師につひ稿つ　武
こまのかりし面影ある口　遊
春雨は尾根を出る長者の雨　喜悦
舟の水へりふまわる枯蓮　龍波
縫物の家ねる猿引て　濁蓋

月清く秋の種生も乾れのこり　香
素卅ちよりきれかゝるもくら藻　遊
そろ／＼と帰家の後の里　武
降て通り／＼ゆく今宵花咋　香
菜摘の聴めよ出かけ以前朝　遊
上の咲て急へ急ぎ行くゝ　武
傾の姿はそゝくと姉か袖の内　香
ひ揃の来るやうな気のする　遊
初月に影の輩の落る音　武
よう事にはるいとく蝉　香
拾ひ積の路地を寒くも鐘付　遊
人よりも先へ手貢納めか　武
古梅に木ゆもちらりと流し　香
串刺もゆでしさうるもすき　遊
観の鮮粒下地にぬきゝれ　香
花の信仰に秀物とて宵の　武
晴夫てちるうれぬ物へ冬籠　遊
住まみ大かぶちの一面の住　香
物ふくる施行の噂ひそく　武
世の中も静か大よし月涼　遊
器もとで他の往来の古竃く　香
庵の庭も家ないり旅ひ　武
宗匠も松の位のよく似合　遊
扇に肘り盃と一ところ　香
一ふりにいつ吹くき盃の月　武
おくる物くおいくもちらりと　遊
はしめての旅商ひに春来つき　香
結の種のとれ無ても植　武
殺汁に思ひもよらぬ恵む子　遊
昨日世を去くに伴る桜町　香
香炉に身の外の悔をつひ撫る　武
こまの花ならし面白されし口　遊
啄雲法尾根を出ても冬の雨　蘇堤

こそりくとりのまゝなつく　堤
行かるゝハ川田も滝月の比　筱
湯すさひとゝ秋のまくらつかり　萁
鵜はしらぬ骨折るも宗全か　堤
咲くかな花をさ作り出る人　筱
浩風のありつきも出る出田の　萁
掃除の帯紙ぬ地うり　堤
下りる娘かる細縞　筱
鐘の鳴ぬをかしまうふ　萁
出てらと堀し庭へ月の照　堤
出る鳩を衣かるゝのまゝにも　筱
捨てゝ井りの気作合　萁
戴し菜を路を川く　堤
散るるも八反も西にし　筱
山中の淀の歩くも兒　萁
白氷とも何ぬのぬる藏人　堤
きくぬ伐る堂の裳足　筱
そんしま音ぬ言　萁
勝のかりくま様に場　堤
何都の通に見られ　筱
出家重の筆力　萁
新きの出家八行　堤
仕けの先生を手ふ　筱
我気人なる通り　萁
佳のの粧物取出せ　堤
春の雨に晴る月　筱
暖ひ人の吸りの　萁
根も動して咲る　堤
嵐の八行く　筱
小丈夫上手来　萁
水の滝を足子出家　堤
四五名の照子伐家のまひ　筱
田舎も浮も雑布　萁

散木の宗庵安き堀れ　秋帆
そのまゝ青麦の生立　乙良

芦様の合ね揚ても見遣れて　西暁
新渋引く刷毛乃闘ふる　帆
気やさしく盥の水もこぼれ月　良
鈴くなるやゝ鳴る小鍋　暁
猿ぅ乎の畜れき世にたちる時　帆
酒治きけんは信のものも　良
途中から坐禅選でる旅宿総　暁
迎に津とふ大拝みのする　帆
居様の娘にちよくと聴ゐて　良
折の深山にくふ鐘ちり　帆
度ぬきの樫の若ほ月のほ　暁
赤のやるれを晴も喰つく　良
これは落葉寒上すの流れ風邪　帆
ふの菊の花まずぞ中細工　暁
百出せふ一出に居るむ麻九　良
あの紅葉に殖るの牧菜　帆
風呂にて台も是非の粧て　暁
もうようさかせて帰る寺嫁　良
蝶凍の露も綻ぶ蓬生庵　暁
嘯く肩に蝶の居すわり　帆
出る宿に雪文気浮きみ　良
折角ちぬくぞ嬉しぬり籍　暁
貸船の帰路早に漕ぐられ　帆
野は晴れて気らけふ　良
種出ちるは安堵る筆談え　暁
雛てまろめく方丈の茶筅　帆
塩上ゟの出る宿の月の秋　良
筆濃うまく倒れきるる　暁
舟千とせ浮かば世れ蛍棚　帆
嵐もしのきるね晴く　良
忘いやつと石川高藤の香　暁
愚兄の代になりし常　帆
出茶屋に遊ぶ用るせ揮金　良
時雨ふりてぬるむ水舟　暁
揚汐に返るの余波かな　禾木

戸棚の合ぬ隣にも女房遣れて　西晴

新[illegible]りに刷毛の闇なり　帆

氣早[illegible]盥の水[illegible]月　良

[illegible]くなきて帰る小鍋　晴

旅うけの雨みきせた[illegible]な時　帆

湯治さけんは信への土産　良

途中から出稼連にて旅當籠　晴

巡礼は[illegible]とも大拝殿のなり　帆

居[illegible]の娘にちよく[illegible]なく　良

村の[illegible]やらふ縫てなり　晴

履ぬぎの[illegible]以左手月の影　帆

夜々のやみ[illegible]を晴も[illegible]つく　良

これは[illegible]上りの流行風邪　晴

[illegible]内の[illegible]細工　帆

百出世へ出[illegible]和庵[illegible]　良

[illegible]殖[illegible]蕪　晴

風呂[illegible]姫の[illegible]　帆

ちよつとまぜて帰る[illegible]　良

鍛冶の[illegible]座　晴

[illegible]く肩に蛇の[illegible]り　帆

[illegible]　良

折角[illegible]　晴

貸船の帰[illegible]　帆

[illegible]晴れて氣[illegible]　良

[illegible]　晴

[illegible]方丈の[illegible]　帆

塩上りの[illegible]目の秋　良

[illegible]倒[illegible]　晴

[illegible]千[illegible]綱　帆

氣[illegible]　良

古の暑けまみれ無心恵　宗酔
廊とと白拍子の常住て　梅菊
頓州帰り氏落月のつけ　直立
ゆく露に震ふわなゝ浮の細　如月
みそもかくも新米を搗　岳路
道家の話作上ふ手ふそれ　酔
御来出雲い出い浮き橋　菊
母親をうけ付る様子ふかせ　立
九人二言を少ゝ恋するゝる　月
隠家子手物も焼も掛庵哉　路
かうな情て結わ棋さし　酔
時にハ月子来てはむ草さ　菊
名道の手作句宗に桶　立
新麻も家に目なね青桑　月
様る村ゝ升の速き花法　路
藪の棕わすゆのふ捨て金　酔
向尾にむうて籐枝の鷹　菊
春古毎かかれで気侍のよき　立
成ハ時かハ絶てくく　月
桂木屋の来て大塩やまとせる　路
覚夜嵐をもて茶丸める　酔
昔経をもてるまほど懐に　菊
庄屋の犬ハ円怯子よれ　立
生酔の鶏付る時満そまう　月
出刃餅の通る手刻てそ　路
わ角ゝ要き縮をとる　酔
法納なんで寄るゝ一年　菊
善籠前を先山画子月の居　立
海り芝ハ風き付をせ無　月
賊のとく種ハなお猿までか　路
取起してる宿とりきへき　酔
代家の宝手出て遠蔵さ　菊
志図をかくし手お帆柱　立
萩ちら蒼ちむも乱れ　月
初虹ろくる雨の出る道口　路

春の来の手綱まさく竹床　士由
やゝさゝうも流るく暗き面　葉三
一ッ唐ぬ葉茶の様に搗て　由
下宿の宮代ふ旅ゐ合ゐ　三
旬も暢て人ならはく月ハ上の口　由
猿沢の岩へ鶏泥植ゝ哉　三
奴方て小首を曲ける行器　由
ほりる声ハ此冬て継さす　三
此ーば奴さるひてひとく底見え　由
様せらみさ野ふ油手　三
召家くるり暖ん少い奈美保　由
居出た者く奴電給野かれ　三
方角ハ路の内ねは思違　由
こゝらへ春さハ安名菱悦　三
柊の風に寺地ちりく入米洗ゝ行き　由
気結のさゝるゝ旅公家の仮鹿　三
此ならぬ志郡く並ハ情しはの　由
廿八て何重さく預れぬ門前　三
めーし出乃かりーハ十八歳ゆ　一
痴ぬ方の壱みて涙かそうさ哉　由
なを六オす世さおけねる古屋行　三
入用なれハ兵房常らす　由
呉て米るの子ハ林ると止て居て　三
子をもひの事て熱さ世代　由
一老人りまつて有かる迎あな　三
さうさハ牡丹の熱咲すさく　由
花山のゆて燐を低く付　三
おめての名そし大りてみ夜より　由
灯を乞ふ縁を称世の宵の月　三
灘く鮭てちらひと付ゆる　由
暑さ〻給てとる人通し行　三
呉川からうとも猫ハ冬つらむ　由
鍋うけて生干あ曲突の吞尽る　三
月に言と云寂寞置ぬ　由
法橋所のちのき祐やさく扇流　三
香石のさうぬ法善のさぬ夜　由

青柳やよわき節邊の渡し口　哺苔
猶雲払しまく浮き来　五株
觸来まゝして菊のなにか鶺鴒帰て　禾木
壽程よいかけに海の割笑　苔
箸の月ゝ坂古手を落て居る　株
坐ていひなて桔梗さゝげる　木
此秋ハさゝやく猟もきゝさくて　苔
手その鑓りけの鍋をくゝするの　株
伝傀川てとか千代居る良　木
踏ゝのこ夫鴨も和らん　苔
つれ皆形和像にふる喰乱声　株
汲まさハ行水と森の寺の麓　木
面影を所に世をゝ秋の月出る　苔
風吹かねまゝく松茸の初　株
塀越にひく彼岸の初き結　木
雲ににうてつ家ちゝまも嗅　苔
隔々に傘法の精出して　株
紅ゝ伊勢がる往来町　木
花しらる霧深き別れし　苔
熱ふ未ハよの嫁なお闇　株
時ゝ月も見たゝ宗風ひれ　木
こん果る細内の生活　苔
お方持役も老ハ大義之　株
宝銭さかの短冊の附義　木
舶風まを雷もあのゑへて　苔
菊竹ノ藪ののうきゝ角けけ　株
時ゝ稽入の具る稼納殻　木
生まゝ世ゝ子好ん方地車　苔
味なたまゝ路く迷子つけ来る　株
子ゝ明けを呼のまゝ天年　木
祈族の桶の水音明るく　苔
お手秋茶に甚を上て居る　株
夢ゝ門にこの秋儀花のちまゝ　木
宣出海きなる稲の穿立ん　苔
毛禮手ら隠つ兼ね部の色　株

いつ迄もなをかけゝる峰の雲　木
春体めす舞さき影之森の雨　丁雨
石梱の邊をも日帰る海苔の采し　英来
土筆の芽ちゝ柳岸に座て　、
若もとなて指る船子　雨
その若とりふる月の秋の花　、
おろりくとぬるまでおりうく　来
弱くれかけ炭醇醸浣の燈なれ　、
棲くく傘結ぶける意ゆけ　雨
地埃のかゝるをかゝる桂木様子　、
秋山結ぶ所絹布らんのかゞき　来
かきまぶさし岩を解る新料理　、
深し薪をて以る庵風呂　雨
雲ゆの氣かりぬ客を宵の月　、
彼岸過ぎもつゞく精進　来
河原者に出姑は秋迷て来て　、
下り場のちゝら井手の家とある　雨
好合ひ出合ふ生ひ揚ふ處　、
土雑魚かゝらるゝ赤蛙了　来
小園ハ太子乳牛を屋を引き　、
芝の陰くを咲く底まめ　雨
粉を練て困る蔦まきも廐　、
四十男哉せん雌鶏きまね　来
去年の汁に実絶る細梢て　、
送宮参りせつく杖橋　雨
袖出しの細刺きぬる茅ぬ　、
新茶を啜し出吸し水仙　来
縁台ニ先間を合ひて会お　、
焚な飯のかゝん連するね　雨
こゝりと月の出る迄一寐入　、
浜手に更の帰りつのるし　来
秋霧るあるに濃氣を援り捨　、
にゝ出たるゝ悩める送者　雨
新いゝ者ハ日の立弁格子　、
末抜者ハ付く涙の微笑　来

片延に菜しくむしの枝　酉
中くるみして又帰る庵　茶露
汐の音の金に岩や落雲　山外
いそかぬ蝶の只ひとつゆく　露
試みつむき麦の芽を出て　外
浮のへくらうきしまひ石車　露
何も多き動く月の雲すきなれ　外
山根に繞る垣根よき　露
姫の上へ紫ちらの手き露言　外
榛名の舟御下露も朽られ　露
紫されは抱てる来る小笑より　外
女史文斎しの曲な枝かゝる　露
こしらへで白縮の営もと稲熱　外
方々と照らぬ入梅続きも　露
約難る虫は水のむ小峯は　外
頭巾しくる気の綺　露
府中へ京へ八本縫お紡　露
ところ切岸にかゝりし茶亭　外
古びたる月も錦に織めき　露
雛は毎年面影仕出し　外
出代に鏡を居すてゝ持つ　一
いかに嵐詰ののる升ふ世　露
端稽に罔宣して当る判立　外
小粒株にぞ空のちゝら侍く　露
鳴きつゝ来る鷺の一文字　外
法枝物の米八多く物思ひ　露
後家は細くふを流の好き　外
芽の鶺くつくは乳母も連て　露
さまゝあるき富貴の風へぞ　外
向勝て鼓屋もといふのる　露
待宵にかくて出行華財布　外
南方の京むく風呂の出会　露
とかく文違て嫁に藥の気　外
座まさ知し腰もとゆくのる　露
ほころは稿まで居る姓様　外

池の中に塔のけしきも　露
張よて苔も日水に住て来　不
宮守寝る吟く鳥の暁　筆
山寺の尾根にちる紅葉あれ　其宝
ゆふくれ吹せし妻の松の家　菜山
清かる花蔵に乃る年を待て　宝
鏡等清音の出るゆかり見　山
雨ふりしに連もつれて身を守　宝
帯しこ水に地形すくむ蒔る　山
自然に咲ゆく宮は衣宿を示　宝
縁の方へのおもう緑つく　山
月のいひに花の寿條もみえ　宝
跡のくる蒔る清き九年　山
幸露引る似合枝を返して　宝
酒菜をうちさる手ひら　山
思ひ出す月中陸に面の月　宝
洞窟宮もはや少くく秋　山
夜なけし太きふとく縦深の松　宝
関の雨のうるれ出お長屋　山
春雨に降り散る雲の汲　宝
筋まる峰の烟霧は歎　山
次は出のはらす音は鐘く　、
微笑にて作る瀬戸の穴を記　宝
つるける纏ゆおもせる春ら小屋　山
出しろて仕舞ふ薄の日蝕　宝
奪合せ縄の小鴨を返し　山
ぬるくすりて宮車は是るも　宝
様まて見きるを志ほまま驚　山
いつのさく老ひ無汗栽　宝
鏈六の森まへ有る弁の井戸　山
彩出形を見かね旭時　宝
揉返げ飛は紙子月の返　山
猫の横笛は世路らしまる　宝
家の子も棺に一般越え　山
本堂へ入るべしは名女　宝

露れる岩根の亀手拍も悦　山
日を親みて床でも米刻の梶人　室
数も小伊勢の鷄出町で並　山
婚礼も茶の来は白ふ餅　室
八巾か一丈余り洗手なめり　木
本よりは〻しも明る門の表柳　遠
赤みそ田楽はされ小蕪菜てゞ　木
花まきも夜のしかみせる昨日　遠
きらくしけりても余寒月の曲　木
江戸は茶の二番種々咲　遠
うきを雲も梅沖ぬくゝ続く　木
建立の庭に鐘る釣鐘　遠
守護の記を世子信中で蘭白勝　木
伊達をは剃るかる顔の襟　遠
歌枕の雅さ節の信立ぬ　木
茶間は鷺の首の早苗り　遠
六月八月の雲きれ助走い子　木
めでは雛中を早掛の先　遠
愛法は此林運する縄屑　木
信病しく咲く蜂の菜　遠
武畳作るを取る左風子なる　木
萩の芽出しても浮く上げ浮　遠
又難しても打われる盆骨折　、
稍若いつても遂ぬ草履屋　木
縫物は去年の姉が古鏡は　遠
漕ひ解きて解ぬ琵〻　木
賤の小嫁社漕ぐく空の松　遠
暁下出て茶船借出　木
賽銭をあくしと見て立席　遠
方位を替て馬糞踏むちらば　木
暖簾を出てかゝる鏡屋店　遠
精進落を鍋は煮菜　木
打ちのしき廿六枚の銭晴　遠
せきの桔梗を色きくさ断　木
落し水二丈の早苗も秋て　遠

こゝろくだける鏡とき時ふ　木

板の間に鱸迄て膾に洗ひ米　遠

雑役市ハ酉の日みな川　本

新晩の宮きて花の咲かけ　遠

大々雷盃に分る菊苗　本

梅子や雉やら植し池のへり　丁知

古くれぬこけてなる風もなき　竹力

文箱をうつおく竃の京して　洛芸

あまりおくへ人を呼ひくるく　知

新たな月ハ兄子種油に成　力

出くらの帰ル汁なお茶むら　芸

鐘鋳鬼より後ハ保当世話も済　知

嵩しても疲てハ碁の牢なる　力

阿宗さんの居候へ出入修ずるく　芸

屋ハ船宿まで紅葉なきさる　知

橋の行る跡ハ雪の降つめ　力

ひそかに住める桜塩舎さん　芸

壹岐料ひ殿にも酢のしほせ　知

剃て兎ものゝ名様のかく　力

宮弁の曽我ハ伴宗ゆ橋世舟　芸

海を隔り廣の神結　知

播ずいにあたまの遊でう暖　力

自年てうつく茎の海大　芸

任義を新以安代あらう立勝と　知

咲て皆ても待ハ琳しき　力

漆物の首尾持出ハ法橋に　芸

風くものめけする絵どの寄らる　知

弾器のもかハ一宵や借さけ　力

役てあけ近ハ法ゐる摺針　芸

読の文して思取羅尼經　知

取かくも毎日のゝる人梅らも　力

名寄より衣類の当も呑耕船　芸

隔る舟子よたのみをする　知

出庇の外し小金る月の影　力

放せし鳩子兄覚えのつく　芸

手枯ハこちらのあき川出　知

曹洞宗ハ寺厚き小屋組　力

まえ〳〵にみちのくにはひ出て　茗

雨ハ晴てをちる形もいる　和

正面のむかハ花しふかつの穂　力

潤子買集る四十九念佛　茗

付出略

ひろくと雲お照陽か葉ハ　江三

朝露軽うれてる麦秋　三朝

旅鍛の梯子帳を持寄て　萬女

以ひ出ての分ひぬ達之　三

問屋場に稲荷の寄進参の月　和

何まりに伸て形ミ名あれ　女

蛤子雀の形ても噂かしさ　三

ぬりの虻し浮子まつを合傘

底宮のとの形くる当神主

猿子麓し隠をそて掃

まへに役割のきむ旅出ぞ

打合しくる畑の分露き

植木ハ一夜ず出の口とまで

あれ海梅子添ける芽餅

鶉も飛く麦の青ちと山茶箱

小宮騒兵の仲間が見せる

まさに画も宇和の月のてらさ

鷹衛小鳴て来る浜　鮎

早くとし屋敷構の禅寺

枝木押て去る道の鍛時　和

伯楽ハ兼るこたへの家の数　女

小刹をよ出世する人くらくはい　三

津ともに霧の珍る海のへ竹　和

くらされ路を見世ぬ年　女

大さうに隣ていきなる坊主たち　三

葭宿ハ茶をも飲る　和

赤色て更殺されある留麦　女

てんくら出まくの畑の蝗　三

立猫ハ始やさりよし東道　和

木枯ハこちらのあき川西　知
曹司室にあける小屋組　力
支度にみなのものゝひ遊ける　若
雨ハ晴るゝをまつ鈴も降る　知
正面の出ハ左しかふりの種　力
潤を寄せて田の苗たへ新　若

付出略

ひらりと雲路照降ふ荒蘇　江三
秋風雅うわたる虔　秋　三朝
絵巻の禅子帳を摘かゝて　萬女
いひ出しうかものゝね達之　三
間屋橋に諭花ある昏の月　紀
何まゝに伸て躬ふる鳥声　女
恰も雀の躬てもゆかしき　三
ぬりかきし座もまものを合傘　紀
底をなる石の形くるる茶
辣子䴏しき浜をを手て掃　三
まゝに役割めきし旅出衣　紀
打ちくる畑の分ぶさ
植木を一度に出る日はきたく
よしや塩梅に揃はる弟餅
誘ひ寄く草のありし赤漆籠
小宿輪素の仲居の見せる
花さく園も宇戸戸の月のてらし
風流に呼べてくる涼船　女
思ひしく屋台の構の旃紫　三
枝木抑て者うる紋時　紀
何をか荒る上野の兵の春秋　女
小刹を出せる人でとうき　三
津さへに鶴の啼る海の八色　紀
かくれぬ路を見せぬ隼　女
大きうた膝ていきなる坊主衣　三
茛をは茶店にも飲る　紀
若者出で雲殺さぬる留発　女
手んちう出まへつらぬ煙　三
立待は焼き焼き出逢之　紀

簾こし文をのそぬにありけり　女
人並に涼む村袋の袷付　三
寄ひ合の包るは蛙等　紅
勧徒に焼立は驚て見らるし　女
のつかりしてまさしぬ篝火　三
去りしも雲の精の花生あれ　紅
温泉息するむ帰枝紅　女
馬の上笠をおさへて出給　宜茶
雨はふるふる自ら生はし　来木
車はいつさし盛水を田はいで　居高
思ひ晴しのよい二帳持ちり　葉
引続の消ても月の癖は入　木
ちちりと落るたしむこの梨子　高
羅眠にかる寂鷺を惜りて　葉
秋の代のる寺の種つまり　木
落せ郎し二人は分る書はけし　高
息もつ晴ぬ初めの来りけ　葉
鳥居の内くらくらと静か　木
さしつ舞島の娘ちとくる　宗
花好の洞株滴る下人　葉
夕顔の棚は入繕る月　木
川除の出て枝程もなりつと　宗
丹精に茶くる傘紙の桃　葉
峡玄は谷の沢で繁るる　木
ひそり傷く浮の翁めて　高
妹の生代時の世尾て　葉
めつくは稜たちてぬかのぶ　木
菜洗水もなくは傍接むまる　高
年の名残まとめる猟帽　葉
叱られて雲の吹の迎東子無　木
くおくはれる痘のお座敷　高
宵暮てぬるとある扇の淡　葉
弥生はまかくのよる編笠　木
去年よりの薬もひさ紀中の酒　高
宵く土地はかくこの位よのまく　葉

台所のあかし消させる宵の月　木
難船のゝ古海を実し　高
泊民人の妻子さゝれくる迷哉　茱
侍義て五郎の論の名乞　木
為この便を申しくる扇揩　高
二月一日ゆかり風のつよく　茱
古府り手拭帯に百の織　木
春ゝ中に打笠杯汁　高
栄次の回る岸や取近し　嵐雲
旅のやどりは芭行の墓　香稲坊
色に出て揚枝吐まりさに　嵐琥
男鹿とて島に出るかなく　嵐紅
月淡て雲の青さ下り葉　何ほ
萩吹やうき一筋の風　雲
旅因に西行もこれ蜂柿を　坊
力もいれ紫屋んとおる墨　琥
町並の声つゝみ回の降続　紅
鴉のなけば荒縁の番　し
洲りう通り行き声に立出て　雲
物うき数の声きさ紅岩　坊
峰の月ふる芋さく流て余所の柿　琥
袂らは灯をとる並へとう　紅
守手の後ゑ庵寝は陰やの秋蔵　し
乗衛い秋晴よくと剃髪　雲
去年植し芳枝の蕾の芝枯て　坊
松くれ行き風を熙呂常る月　琥
妻の花さく立たぬものに　紅
杏のしのかりと後丘貞の葬　し
ほのゝ姑花さく廊下い鶯聞て　雲
筆くれぬ白合歓の打水　坊
雲見ふたく芭蕉尾麦扇　琥
甚に餅念たつく信のまいりて口　紅
只さく下女の廣葉の消退　し
府中一條旅ゆきぬる　雲
やゝ手本庫旅来下葉の風　坊

小鷹の羽音に霧ふつてぬれ　縫
月さへもその伊達にさらるゝ　松
哥に好む事も意の将　し
松の糸子車の油差しそ　雲
法会静る日中の鐘　坊
峰迄てハ修行の咒の銭ちたれ　縫
禅士ゝなんぬことを捨てあれ　松
西雲ゐ花で築しうきの山　し
妻ハよくる珠数の去迷し　雲
早乙女やうもく時の声てらう　南抜
落る雨かる様の縢り禁　絡力
切石の口ぶち高る印して　隠芸
一ツ二ツハいくの源なり　抜
年るを月の頃を巾笥粥　力
さし来る汐手居のさらさらち　芸
暴風雨むすは小萩も花散り　抜
三度ミ飛脚よ文車手ぬくる　力
咒て後の赤子へ化けるよ死　芸
浮れぬる月も名にかけり秋　抜
李宮も丁度を寄せて勤まれ　力
信は安堵形角の代さし　芸
欝緒のいろ浮名の旅袋　抜
園ひもそそしてぬ角力坊　力
時も来く燐火ハ鐘を濃くれ　芸
そらのみおしそき鳴剃力　抜
手近く盃並べる袜の尤　力
店の脱塩しそよく見よの世　芸
足色ハ宝閣も仕誅の手繋　抜
哥な花ち咲て止めろ小丁稚　力
さ折ての伊吹ハ先般数合　芸
かけり晴きる六月坊の目　抜
以つハ年り与うる熟柿坊　力
骨たくもほしきるの喰用の　芸
落かに麻裡も法ばる長襦袢　抜
錬鉋風呂ハ出来ハ見きさら　力

山鳥の羽音ハ寝つかれぬ　毬
月さえてをの保崖にひらく之　和
菊の花も戸口意の猫　し
松の扉子車の阿弥で　雲
法会静る日中の鐘　坊
峰迄てハ路の迄の銭ちれ　毬
修士ら名乗つて捨てられ　和
西雲ろ起て築しき其の山　し
春行くる竹緑の土塀し　雲
早乙女やきく時の花つつ　菊枝
藤雲荷かる様の賦り葉　錦力
切石の口ふてさる印して　濱菩
一ツ二ツ見ハいくの海祝り　救
家るを月まかの出中暮　力
さし来る汐手居のささらち　菩
暴風や世おすに小萩もちれ渡り　也
又度飛脚と又車手あてる　力
咲て後の花ハ住ひさよ死　菩
行く水おさけてさがけり秋　也
李白も下段を寺て勤まて　菩
浪は安堵明日の代さし　菩
懐錦のいの法りの糸尾　菩
園ひもそまくぬ南刀坊　力
時も無く精く縫も漆うれ　菩
こらのみなしくきくはる刹力　救
手近く並並へるる錦の式　力
店の暖簾もそよく貝よのせ　菩
屋ゐ迄ハ屋敷も仕舞ハ手楽　救
我ハ出で寝てとめる小丁稚　力
きかり身の作りに先船数合　菩
切り晴きる六月坊め　救
以つにふり上りくる穀物坊　力
骨たくましきるの喉りの　菩
岸かに疲れも治まる長宴清　救
鉄砲風呂は早く見きらち　力

いくら待てもこぬ初雪　木

袖に入る炭盥を焚上て　遠

所拵ふらいのさかな作る　木

ひ際の客みなきこゆる新月　遠

萩と桔梗も安く世に斯る　木

声のすゝむて酔ゝる掛鳴子　遠

大海ありて小早出を抜く　木

器出る古代蒔絵の硯箱　遠

丸五六年もらひ寺住寺　木

風ならは先あけは咲出ぬ也　遠

ふるく嫁の来さんすに葬　木

半渡りて

禅鶴の宗綱ある打月かけ　雲

刈稔紫にいちもち芸藤　念く

芋種の棲根もたゝ疋数て　雲

さんあり水にかゝる数の芭　念

文月にふりしきる雛篭　雲

何もさりしぬ時ありかしのく　念

新縁と出す目の付際より　雲

余所の噂にき花おもく　会

近所へも家まして心寄嬪　雲

姻のきり茶と大藥にある　会

咳金も勘定借る嗣各呈那る　雲

果以森の出て何より徒　会

漬る井の雨つく餅の月明り　、

ふまりくに変る香　精　雲

産毒にかゝる金序の通り筋　会

味よく都な採ふおし時　雲

預ふても古き幸ひの吉日和　会

来て捨る高力なき売　雲

跡の始にかさく嬰夫の内　会

並まひは落るみなき　雲

本能よりかし肩に風の手摩る　会

休んでもならし参る企　雲

癒まるくは藤治の骨折て　会

祝ひあるく代八なけれ無　精　雲

いくら待てもこぬ初雪　木
神なりに嶋の鶴を先上けて　遠
町耕なのいつさな借る　木
ひ原の客みなきこゆ新月　遠
萩も桔梗も定て世を前る　木
声のすまゐて酔る掛鳴子　遠
大海のりに少手出も無く　木
器出する古代蒔絵の硯箱　遠
丸五六年にしみ無住寺　木
風もなし鹿なけは咲出る山の音　遠
ふゝく嫁の新さんに葬　木

先渡して

猫狗の皮網をする行月じ　露重
刈稲紫きのゝも岩藤　念之
学難の沙様収られに在記数て　重
さんみり水に入る数の笆　念
文月にくり来る続篭　重
何もさりゝぬ鳴るかゝつく　念

形師と出目の付原上り　重
余所の噂を立はなくて　会
近所へ出来して立男嫁　重
姻のきり葉も大薬にする　会
寄金やおさめ飼ひを日暮る　重
子以森の茶に何よりは徒　会
浅井の雪に飯の月明り　、
えんりくに変る雪精　重
彦雲に埋る金原の連筋　会
味よく酢は搾ふる新時　重
形山にも斉む幸ひの出る和　会
影山て捨るる南は姑き売　重
跡の粉は並中ふ明る夫の国　会
重もへは落るゝきさき　重
本桃とよろれと肩は風の走る　会
休んでもゝりし無はふ企　重
癈きなくて居は藤治不骨折て　会
習ひあくては八十八夜　桔　重

芸者ひとり座をも見る葬礼　会
蚊帳に世をもくらむなり　重
つくりあて拭ふ雨露の口　会
人行ておもき出来ぬ浅漬　重
身を越後屋に退かする月　会
寂しかる旅まさゆる柚実　宗
ひけれ渡くお撰にかけ写て　〃
芭蕉の辻に立第なり　会
下戸をも集て出組む雨上り　重
混めかして状を落る　会
遅てとも寄るの花の咲かぬ　重
覚のたねに積る境く　会

秋暑さ出る蝶に崩れけれ　芙山
門へ出迎え乾く帷子　播之
座つきも十日結わぬ与兵衛　守村
並べて形て見るる生草魚　班魚
桂子炊の灯のうごきそれ　之
流る器くまもなきる旅立　山
渓虫の手遊ひ終る蜜柑縁
同じ国姓家も出す一姫
打ともれ鉄炮向ふ百万騎
猫の戸に霧おしらるゝ
流し場の出て話声をあかて　村
住む都りの男は勢も悲院　魚
かちかちと何か音して寒る舟　之
嘩く出のさかしも峰　山
捨て浦落る雲のあふて　魚
熱海陽古二日ありけり　村
汁の実は秋出来し客痩せ　山
絵写の先に行くる花暖　之
一群は駐て扇の揚まし見　村
境屋の富は泊て謹　魚
湯に呑む聯進安き浮世まで　之
守れ網を綱人合まるゝか　山
年常は立振舞子家帰れ　魚

雨のよはとて、閑に覇王樹　村
石切の鑿を飛さる宿の叉　山
重み吃逆のとまる斗也　之
蕎麦の蒲売の短く成り　村
ちらりくらりと柝の鳴る月　色
来柏のちらく啼鳴く夜合　之
棠名取に鶴まて鎮棒　山
膨石物を造色の帰上り　色
粗きも状にてころやまる　村
旅しらる義の水く淳安河　山
白に二組かせし瘡瘧　之
出そうてめでく雉る我の友　村
身知らく書する土蛇の隠笠　色

殺丹や蛇のとまりし蓮の骸　流芝
余所もかりふる雨のすゝ風　茶翠
身は土底に出水橋とえふ付て　、
出ゝ水も乱る福鍬の陰　芝
松の木をきらぬ物好を庭作り　一
菊は日数なき月の出ぐむ　翠
及古葉く緋を穀斜ふのけて垂　芝
時鳥は霜を蝶耕て持　翠
以ふやつれ若しする嫁をいらう　芝
不用になりゆる蝋燭をなす　翠
度のゝる味に芭椒きまる夜内　芝
日蓮へらねて頼の為をされ　翠
恋しと名をとめて言身ほとのそ　芝
ひとりしと蔵る相の菜　翠
出家へ高く蝙蝠を追おろし　芝
帷子の襟に酒杯のやつく　翠
ちる花の袴にてる上ヶ度　芝
松やゝ陶器は廣る膝の　翠
来し泊千小雨に晩涼の道　、
古筆につ懸て桜る扣ねり　芝
流行眼くさとまへし油断世流　翠
陳気出る宿に肘の志ひれねる　芝

庭へ出る客の帰りを表迄　翠

枕本書物に秋くる並松　芝

小隠れをして葬礼を送り過　翠

口利なる伯父又今貴僧　芝

人込て茶屋で置く相吹桶　翠

侍ちらく来る犬のきくて行き　芝

浦の町を出る老の浮て月に秋　翠

桜さく霞のちらりくちる　芝

押水に崩れし塀の跡くして　翠

さて庭ハ粉のきうき上張　芝

町内を仕舞ても付合る　、

呼戻く写はとする人術　翠

咲花よけれも出来し貸蔵　、

春ゝの日くら芝の焼路　芝

淋積くなりし宮の石に　永光

明て夜見く滝川の音　求木

浦の府に鯛のまち吹上けい　光

見る日寄くの猫の外を居る　木

月はさし乙へ抱出る棋盤　光

何故かへん人の姪蛤帰る也　木

茴香の実のうるしと吹くなれ　光

虫の比にゆきる飯田街道　木

夜く明てハつ七つの鐘の鳴　光

ぬれ手拭てあるくふ新屋く　木

重陽ハあそふと条書寂仏　光

生くゆる撫子蕎も見る　木

晴たる月の空に先の風寄あり　光

いろくふ様の種く喰りしら　木

まかりくと土佐材木をなり荷ひ　光

ざるく汁を丈ケ撓ためる　木

古の京四文銭栗の種やり出し　光

ほくくうとくる犬の居眠り　木

晩の市ま主の備る休生き　、

古ひに蔵をちぬとはきて寄る　光

仲種の晴きぬて経出て　木

猫く花のの香をうけ月の朽打　光
わか妻の要否にされのかんなりと　木
やうくたりしは凌霄のつる　光
一手桶汲にはられし山清水　木
骨折花は綴く鍛刀垂　光
伏も水以米は上にはきれ亮　木
薪の仕切任にんさかし　光
月は夜にちらくさまさぬ小雛灯　木
紅葉かつちるきらは門前　光
不稲葉が仕舞て又をも結なかり　木
鑑思しもて笑ふる宵の杉　光
庭さらえ合点での谷崎させ　木
土手筋に茶やもまれさもう　光
埋櫻に雪は友呼ひ雲の上　木
出るく月は花れ若はるく　光
さらくと風ま夜み家蔡つ　洞林
流れにかりく人れと夏鴨　下知

錦おりの錦を糸擣の精に花了　林
状もはうつ回りくのをまな市場　知
十六夜に汲葉の植葉まきすうる　林
次のやもかすは茶屋の出ぬ　知
新切る千草も露はうけの秋　林
崩れ年まで藤のめひ出　知
以前は安も晴る手数の棹まわり　林
人に逆ろかるまきかるは茶室　知
錐も乗り甚兵は朝起は右待て　林
ひとりの身は盲へ僧一口　知
構仕舞に椿へ自さ佐ふき伝　林
町まれ挨来り出ふやかり出　知
林将の戦を見かる流れ出て　林
相譲やさまれ水米安をる大き　知
山伏の小水かうまを余手　林
辨以をまる秀吉まさし傳る　知
薬師寺の雛は耕程は茶屋　、
事の察しよし世するひろけぬ　林

須達てハいつの代か袋の挾　和
てらてらみん〻擦香をあつ　林
鉢介て兄窓を飾の松小松　和
隙〻れの路の先天気なり　林
寺の饅ゟ聖やうかゝる山雀　和
痛眼ふくるゝ出家少年式　林
ふるき紡科をまゝてに動聘　和
秋この浪ふくひろの庵むき　林
月影はむかふ襷て施はは　和
直下世な鐘の人なて見る　林
お旅所の景徳のひく果る秋　和
風ふゑむきき縦都る時より　林
讀み手の来ふえかく雲掩元　和
能の当い松次つきあり　林
乃筋ふ去年かゝる村の冬籬　和
冬来ゝ出る客の虎紡綱完也　林
里中の如来くしし様の〻む　樸
わとりまあ〻りのるより妙　浅
非菓子四五枚阿めを閑止适
後の文〻て手紙見出まで
古屋に宮をきれ物にもう月夜
上田の程は帰よせる秋
名進で邪れを和尚の歌る〻
為終後の形のまは何る
後裔で滞をし鉢形のさめかり
小隣にまとう〻て出ほさくやき　艸
吹つくる雲の重苦の行先也　篛
晴て雲て出で行雨音町　艸
志のくハ釣の日立て丹や居て　篛
月秋のゝ失しゝるゝ元　艸
銀平き大家出書を継合　篛
蘭さかりまとめてしゝ何る山　艸
眺の先なうゆるハ出の紀弁当　篛
ね和つまた跳の好く脂く　艸
草餅の讓で小波を逆路　丶

這かゝる子に寐らくる筆 翁
手招きに向の子雛ら来つきて 卅
釣瓶序に汲てやる恋 翁
噂まくらむかしに契て来る初鰹 卅
今夜は参る寸に金の門背 翁
足代のとれて形よき橋の反 卅
地主の葬にむかうところとする 翁
筆をとらせて店を出にけり 卅
くつゝく近附にはおる後の月 翁
入院に宿る月のみを借り 卅
黍の穂先のうねり波なる風 翁
蕎麦の開る花を味のよき 卅
生あるゝはけてこまやせる古 翁
出居と縁仕舞もちりなる清備 卅
頃ところなる 淋しき風 翁
植くしく丈は縁あふも星 卅
香の起る宮の 何くしの 翁

十出世て杉雉をもの家 可
第子走らしとかゝみ河ゝ水 和 風
打恵儀まして日々に 和
いつものの文深く出まし離 風
稀ねるもおりて雪の月 和
山ははのこともさかりなる里 風
出る山に挟む花つく旅刀 和
忘られたる法師の合 風
雲の昔は今世に重し 和
蕎麦さへうつり映りき 風
数寄は塚らくる蔵の品 和
薬けるに出る香の和香の 風
古への人に営る月のさゝ 和
まゝ出る知らぬ後のわくぬ 風
栗摘は秋の宿くも送るまへ 和
青のちとも明る酒好 風
山の也彼岸寺の咲出て 和
さらに家の姫子よ来ぬ好むむ水 風

娘子の多きんに殖もす番遠　、
洲暖子せねゝもてゝ押て医者　和
峠まて浅黄の行せ宗の子の　風
志られ持よふ〳〵許さき　和
保せさる杭ハ行あて抜之て　風
所は僧のせらるゝ新都不　和
よきさゝ形壷の佳子ゆ新益　風
秋你やめとも看病ハ入る　和
口きくの如人をん杖苦しき　風
身さゝき接る薦生はの露　和
消るとも一陣氣の吹きる月　風
旅銭の葬はとれ共あらし　和
会は子火吉やけて行く盃　風
草庵より役はのかゝる雛る　和
人数まさ客くも生安門遍　風
嗟や寝子荒のはひらく　和
奴つて数ゞ夢を八こ雨も　風
中ある八欄よ仕舞かる雑　和
かゝまる埼を見播ハ本分れ　杜有
本の名もるゝ子をさそる月　禾本
薪の那をこも白ひかはるゝ　五株
縒ませ〳〵をるき世さ思ある　禾
木やる所く思ひ是まる給仰　木
鑑出は紙のかゝる籠の図　株
枕の肉まかり出ての穆の上　禾
下人をつれる法印は喉　木
湯活る酒飲まぬ寒ゝ秋うき　株
一間ゝゝのる粧色の雲井　禾
甫えの大穀若くてゝ由かくと　木
かと丹く松は並子畑中　株
月の名みて浚月の夕茶吉坂り　禾
やゝ寒ゝれたとろん秋まか給　木
秋の風行陸船をまゝ立て　株
播はてゝ君のむとかんで集る　禾
大てんの主ゝ万人は盛るゝる　木

細密ここの菜蓮にき哉　株

吉休の床へ垂れのこる涼生　己

窓の中手ひかる鍬鋤売　木

雨落木綿の雪逃ふる　株

華のたひゝら廣小割出まで　己

鳥勝鴻くさ市路果してく　木

掛け蝶子雲くらくく月　株

玄細をとる垣抜まこぬく　己

兵舎の汲めるに何きやに　木

李納法易参る平林る　株

大骨新でも出る新投　己

二三道こ云家界さく喜る鬼　木

虹あんのことゝ八志ゐ路雲　株

去らぬ色にて雅量に出乃る　己

未能合烟を出でて統る　木

来お場貿より西へ市薄きさ　株

茶風の密へのえ雨庵　己

豆も行とよ寸菜師の庭の　木

塊りかさへ子春の竹水　株

いまる日に刈出ハ菊の架をや　小柯

吾は花かり活月まとる音　相文

ともに法つきみ声を見て　ゆ葉

くつせハ鍬の守りふる名る　柯

舟子出浅茶の剣ハかけて出すい　文

菫菜絶きる畑の手ね合　葉

公怠る事を来れハ浅花と種きし　柯

眉の花を出でゝ人手あハのく　文

此法止ミ手紙ても泣ヒ川渡　葉

売り出とハおりかハぬ革　柯

雲雨のまうくさ蕪る葉の色　文

隠この石鮎の粕漬　葉

月の秋山の近きに霜下りて　柯

暖ふさ錆子出来る鬼灯　文

五人扶持よりてかされしこ事成　葉

二階の口法ゟ達ぬ押ハ　柯

むまてハ何か流田の照上り　文
田螺拾ひに餅投て出る　葉
来合てちかひを拵もおかし試　杉
子を抱く人へ京の気配り　文
大つこハ嬉しひものゝある也　葉
交代ゟ早川ゟ一筆しらぬ　杉
縦横の画定に囲る藤の据付　文
庭療病して一安堵く　葉
隠居して鼓のひとつを育て居　杉
本を定めてこれ家の安堵　文
西か依夜古の隠伐揺へて　葉
何ゝハ刻この笛こるをすく　杉
私交しハふ路を来る月の出汐　文
ま私庭の出無る人へ掛くる　葉
初鮭を宝へ納る人の帯　杉
日和のよさに船て往く留　文
光り切りに出て姫を書信て　葉
鼓のしらうるも月の宿　杉
冬ごもり付は出舟も傍の味　文
霧のうちから移る白山　葉
蘇山や霧ぬすみてを晴の空　乙良
空御代く風ま有る月　友桐
焚出しの芋売鈴にあつ盛　良
おのての雪消をさそつなり　桐
一すしさらふ古ゆれ梢の先　良
投に一閑ま古ける禅の物　桐
ゆり出し金入窯濃流字を持　良
傘頭やうたハ鳴てはをなね　桐
厳そハわてたやさる息子株　良
牡丹の数を咲せる人世い　桐
蓋露いつきよる茶深物　良
恵子筋書ふ宵く乃月　桐
鱗田も蕪て家ひと流は湯　良
踊ゆつこの手洗濯をする　桐
坂下にとすり役人ゆる桂井浮　良

東門のさらぬに雲隠 桐
掃さは手あり出ろる志 良
牙めハ人手引出れ落 桐
酔さめハねうんと水もやらかつけり 、
迷惑な思ひ男は危し 桐
ちやふ記春稀の宮と生まれ 良
北茶畑に遊法をする 桐
閑花とも来られ法の隣の所 良
利發娘の母是のきにしわぐ 桐
新了性ゟハ胴の肉と外 良
ましいよもせね鶏のさくめき 桐
足手からね居風呂の下結 良
すか加茂の無札孫ゟ門前に 桐
猶りえるのまハ冬とし月の無 良
聖るの声さくもはやく着州 桐
藤蘿蔭のほとちから渡り来の 良
おのふまましき関は鶴り 桐
木納ゐらろ出来て人より口と利 桐

いかずきの向柳の光り
またく咲もいでても数安く
猶居も藤も芽ばえれの春
明月や眠ハ居ねと法と山 右
右方りのかゝる王種の表 紫
明まりつく婦娃は嬉のひつき 人
法篇のかさらぬ葉もおれ 世
蜂室て机の中に場都り花 人
董帕も免ゟ納いしも 人
彼岸本證のでき〱る隣遊 世
一面前もまき町の焼さうち 人
安居とふ和をあまも節記 世
療ともかき居る隣のぐひ飲 人
錦茶て盃も山家は披露 世
印信ゟるうふよのせる船頭 人
明安き月を秋毎に友とせ 世
言葉にハ無ね花その趣 人

拾ひのこして帋のやうなあり

煮[illegible]ともしめる鴨の淡さの　人

咲むに翁め家も稚[illegible]し

隣と詰[illegible]ちる[illegible]の餅売

指折て何かなくさるゝの内

肥えのぼしれね蕨水の跡

つくりたる[illegible]

障子の[illegible]る[illegible]文[illegible]郎

寄せて水[illegible]上る[illegible]

樹の[illegible]とのむしやうやけさ

末町に寄る[illegible]家も[illegible]も

飯巻やしるて[illegible]量寒み

[illegible]

緒類に[illegible]餅[illegible]

八方[illegible]の月

法ひ[illegible]蹈[illegible]

長[illegible]扇[illegible]

[illegible]の紋

半佛[illegible]

救せんとりするものかはく

[illegible]逢し[illegible]時と[illegible]程

相[illegible]表八[illegible]寶残

小田の[illegible]てあひ泥　何遠

秋の[illegible]に船乃底焼　素何

代官の[illegible]月[illegible]て　来木

鍋[illegible]ひの[illegible]　遠

寺の[illegible]嵐[illegible]落　何

[illegible]春に[illegible]の[illegible]　木

水仙の[illegible]活[illegible]　遠

[illegible]小性の[illegible]　何

一[illegible]結納[illegible]　木

[illegible]香[illegible]蟷螂　遠

[illegible]姉[illegible]の鉢　何

僻の[illegible]　木

[illegible]月の[illegible]　遠

招ひのみて軍の中ゑなあり　古
虚室としぬめる鴨の浮ゐの　人
咲むに翁めて家も雅なりし　古
深き詣あちこち学の餅愛　人
指折て何か出て富士の内　古
眼さゝのうしなね法水の流　人
一ゝくりねくて足らぬ隠の杉　古
涼の船の先くる文五郎　人
雪て水附きより上る者あり　古
樹のほどのむしやうやら付き　人
末町に売る唐て家も呼屋らも　古
頼参や見て四景寒し　人
定重の錦も濡て深くさむの宮　古
結縁に泣く人も錦ら行て宿　人
八方神のすけ出る無の月　古
法ひ八幡ね踊る外　人
長子と成ぬ扇を見ける　古
殺らさみの言ひ宮紋　人
半佛を祀る事に紙者　古
救世んとすと幼の中にて　人
萬運し余を鳴ると鳥羅　古
祠に妻八に奉る賽銭　人

小田の鳥雷ら植て萌ひ見　佝遠
秋の雨を出て船乃し底焼　素佝
代家のかく隠る月移て　來木
鋪出句ひの色るき見みを　遠
青の出て嵐神にて汁流　佝
和らく老子見との宿　木
水仙の待出て活陸　遠
思ひく小性の暮にて　佝

西国筋ハ出来てよい稲　伯

宇如来の信心後立派に出来す　本

本降合羽て押達者侍　遠

門の七半時らいさ見起　伯

傍まれ〆はきくる娘の膝いる　本

八幡の杉岸とふも出来羅　遠

足場危さも立ふ人婆　伯

熱茶に切刻こくる塩ハさき　本

もし読ぬあちちりかく麻　遠

中納よ婦いまえてある也唇　伯

路くもなき椿子の雨　本

祇園会の紋挑灯の文字めり　遠

天水桶に描る町の名　伯

狗子に待ふ鴉の辨さしく　本

為て四升よれる米の虫　遠

旅の月さききこの紀州海苔　伯

后の雛ハ小さくこの柿に　本

ちらゝと深川こしま柳よる　遠

手子く浅ら佐渡茶乃釜　伯

神主の仕手の勢庭出て　本

よい当ると蜂も飛くさけく　遠

かい貝の関ふむの寝のつり　伯

はしやく霧む水に帯　本

鶺も丈へのちらう鶺漁邑　幻芝

狗雛揚走郭遊の肉　丁和

諸時ハまれを種を渡めて　芝

左官のふりて古きい家　和

弦音の的場につく霰の町　芝

物ハそよのけと黒い茶室　和

薦烟織荒布引組を待るし　芝

世尊の紛分のもこまり寺又　和

掛底歩桂枝なるくと掛逃　芝

俵屋の阿姥浅ふ彼岸に　和

千ヶ寺の發起を参て佐渡迄　芝

素湯のかゝんに婚姫ころころ　和

稲一種萠の里に宵の月　芝
思ふまたちる〻露のひやゝく　如
繕ひの縫筆に叶ふ新米綿　芝
武者ちて為に宗の建てめ　如
枝にこれも分限に出の腰掛ひ　芝
侍の出家に掃て見る筐　如
六十の手たらぬ事もひけと泣けり　、
閑也のよる出舟の誠　芝
ちと遠いなの井戸守宮度　如
松もらて婦子壽もとる豆　芝
偽も悲朋のあき紀に網め燕　如
秋風にさも邸くく宮に付ひ　芝
網取る船行くたびよくかくり　如
先めし将もの〻ぬる驚　芝
望るのうけ出て俗に抱き出　如
古い佛くは付し菩薩の　芝
夜も松て君腰も有さ〻給ふ銭　士
鎌は直さと筆も出ぬかな　芝

濱にはまれ消え雲の扇を払し　如
ひとの船へは来や出の風景　芝
雷これの声ねのうも天へ打上り　士
出家の居ゑて綱る襖棒　芝
晩くぬまて出ハ又孫去ん宮ち　士
つる手衛のかりらく喜風　芝

秋立や盥に浮きし鶴の恵　壺長
まこ過る雲秋かくる今日の月　若川
旅の朝も花も色悲しく宿て　青
升のますは行ぬ楼獄昔く　川
譜代の水落ちとある家の方　青
まるいく空のふりかけて　川
月霞のくらく遠も落ちかり　青
老松の葉の露の氣迄のまち　川
邪魔鶏のかけるに小鎌を刺迄　青
義行もよくく舩の浮香　川
門合に若戸口一遠き行内鄣　青

戸棚さがせど何もなき月　川
鶉なく夕に荒るゝ道の口　彦
よく寄し者のちひさき　川
旅やりハ挽新引の伝授　彦
度折祖父の七十まで生ける　川
大寺にて候の殿様乃夕墨　彦
水口知ある郷社前向　川
蘇ひとを一家夕の新かりて　、
りの衣との伯母子に傳　彦
栗柄茶を取出し手茶ある　川
要請に咲く出入梅時　彦
羽二重の袖すがら小紋着　川
末廣とのみ祝ふを見る　彦
すらりと楼の家で門の際　川
所白河の蕪子らの乳　彦
月の秋の内ゟ情を借て　川
一ト口残る餘通る川　晦　彦
袋さへ見れ出る傘をかりて母　川
二分いかさく〳〵湯料の縫　彦
烟計作りて念々の文化の家　川
窓の業の女の札をもちの身　彦
物忘の程を稲ぐ宣蕎借　川
足をもう付て気の櫂治る　彦
新名の亭付あ羽毛の咲氏い　川
白くろくと蝶の葬くゆこ　彦

恙なく不残虫喰や家程　洛甚
垣の手なれハ添のくる月　丁和
中新子一回の晩福くるみて　甚
様杖そひける窓ハ内と降さ　和
生も外本家の風見を東風に吹替り　甚
乃居てく余三東を覚あり　和
勘定の人銭を配る紋着を　甚
荒物屋とみてさらく小流　和
つひとも一生の人に騒せらる　甚
よしなよ此の内とる人の身をみ　和

庭の中へかくるゝ町の霊

ぶらりと出る面白の猫

紫雲にかゝやく道心の手

こぼれ扇のまなざしぬる

秋の月庭へ出番を布引て

茶をくれねと居りの庵の

掛て見る筆も大津絵かく

この世みてゝ宗旨中へひとゝき

高臺の出店あおや西の果

我折て見ぬの珍珠の筆

さらゝの所に従繰はなそ

霧雲に流し夜の萩の嵯峨

薗船に酌くらくける樽のまき

お花のかおるを通る長掉

大江すら浮世一つまつらます

池の鞭まで居る精性

書漬もる珍再もいつ宗般

蓋のよせる枝み撓

十日余も何も見はや旅の月

水かゝあるの日手のす藤し細

錦もゝ形へ百も家し綱車

子息もとふきもかよふ御代

神の境の掃除のつまゝまゝ

斤花の面りしくらんに捕

山よりもおくる川のむしぞ

菊に脊をかくやく思さ

朱く飛く鳥ゝすぬき新　乞良

牛縄て八日くゝ山座　西鱗

月さえて藤も古き表水打て　秋帆

秋の残りに侍第して出に　良

宿をまゝゝ渡りて一段のかける　鱗

足袋の底きのゆるゝを見る　帆

吸付て居るうちに剃る五畳　良

ちよみの甲斐にかんてら　鱗

お鍋蓋をさゝせておそて　帆

庭の木にかゝる女ら町の雲　蕪
ぶら〳〵と出る宵月の猫　和
紫雲にむかひ送る舟のうへ　蕪
ころもかれ扇のさまを待る　和
秋の月庭へ出當をこほして　蕪
菜をさらねと春のゆくへ暮　和
柳ちる身は筆も老ていとなく　蕪
このさまみて露も夕べ入ける　和
高臺の古庭にまかせの果　、
我折て見おろす仏境の峯　蕪
さゝ竹のかげに隠るゝなきて　和
露の雨をはらし夜蘇枋の嵐　蕪
茵船ハ浮きうくる樽の香　和
わか葉のやみをとめ過る古椿　蕪
大空のふちゆふ一つまつりて　和
池の鞠に戻る精性　蕪
春深きちる稚角子うるか乾　和
蓋のよせる株のみ様めき　蕪

十日余りの月に浮ある旅の月　和
かりそめの手をしけり細　蕪
黐の花飛入宵の糸し網をで　和
家志ゝとてもおもて見えきぬ　蕪
神の境の掃除のつまりよくあり　和
行衛なきりつくんと稲　蕪
山よりもおくる川の玉咲て　和
家に寄そかくちく古寒さ　蕪
朱く花みしてり古林　乙良
井絶えてハ見ゆる山座　西鱗
月さえ菊を青麦水打て　秋帆
初の飾りに採菜して出て　良
空さくや鳩の一段の下り斉　鱗
足袋の待ちのゆるみ子舞　帆
吸ふて盛ると出て刻る哀　良
ちよろの翼たわわかなくし　鱗
錦葉をとうとう散かぬさ　帆

きゝみやくけふ聲の甘くさく　言

安堵やさき旅寐ひのかけ月子　嶠

待宵合のかねともいうち月　帆

庵の夕も嶋く甘蛇むほの露　言

盆踊立居ひくる市前　嶠

落ちつぬ菊は地をとる返る　帆

秋時雨りの清く六條　言

追留めかへもうき絹き出羹　嶠

使けり神風をもうは天拝　帆

厨子弟子ぬ常夜をさせり匠　言

一條もひ世かくはかうぬ勤番　嶠

換料の飛まる飛毛や積て重　帆

限りく風呂の案内しく來る　言

手の墨すら徒のくれれにくけ　嶠

藤のさまかくて見えぬ剃刀　帆

戦の鐘声ゆくさしのけて　言

言つのうまくる園子のる　嶠

人むかしく白に積ぬ間屋　帆

底意ありの出羽の一部事　言

極めは紅も山吹多ち目は　嶠

近りは笠さくうまま菊の香　帆

陸奥は沼て硫黄流一種利　言

仕法の替る　宮仕建替　嶠

悔るもぬぬ日掛の行つくる　帆

志つくりきすく揃の極出し　言

端女ぐ筍に料理の注を清く　嶠

中もうるなのの花の名急　帆

芽を本のく松よき行く秋の風　乕木

中身めかくの知る清もとし　杜若

西瓜割ぬ佛も若の角居して　遊淵

返りける人の花も咲く状名　木

御廟へも武士もきゝ汲るら車　冬

冬降さくえ雨のうつさゝる　閑

三段のうへかる流れ氣靜の聲　木

古は溺のに遊ひ麻つく　冬

丸焼は寺作をあかゝけり　閑
拾ふて垂て又もかんさし　木
格子前の若者なの店の煤　乏
いくら納ても旅の錢かゝりき　閑
姫の菜はかりてその後の雲　木
合羽の袖まくまつ住ふし　乏
川舟のさらさと嵯峨を浮子呼　閑
眠らせる孫から茶の下也けれ　木
預りて何を金米にかの枝　乏
屋根修ひて帘はせんさく　閑
此春も居ありとこゝ呼産婦　、
仙臺縞のうまふ〱し　乏
おりからゝ風の音さ遠柱　木
巨燵を紙数て初雪を待　閑
長尻の隠居は奥の座を遣り　乏
焚火のとて又汲鉄投　木
後崋は記を口目宮て居けり　閑
古銑もちゝ出た夫ゝめぐりの　乏
古田の、仏ゝ嫌ゝ嫁へくて　木
月を見出す手渡りする　閑
梅の名に瑯斎らしき蘇蘇　乏
律義いふの作の緋有羅人　木
向禰は棒蕎に思ふ弦法て　閑
亀晴のうる小魚の池　乏
弱しくも折る青と哀れ坂　木
生鮮は咲へ焚は寛く　閑
小の出所て鯨売を捨させる　乏
かき揚土はよう葬ゞの堤　木
唐桑のかゝれから本樸り　幻之
森もの夜の屋根の終　下笠
みな菊月の支度と、の死　丁知
こもの礼揃知仰ゝを序よせて出　松篠
ひと雲まゝ雪輝の縁る嫌下口　笠
喜寳家さま嘉は牛ゝ　芝
枝稈のちゃに盃薬ろうて　篠

稽古碁盤もとらへをえて行　和

千住に送る舎請の状文　苔

苦婦ひの下葉までちらき　笠

よそ見んも花ぞかの物語　和

河来の禰宜も宮をつける兵　楼

秋立や式子の御の名残の月　笠

彩ゆく判刀法法　苔

神さびし上の磯しも恋くある　楼

唄の声すゝ香の長枕　和

はやくもの借屋掃よせ　苔

うつすりと引く春の夕虹　楼

手向くやまのみ浜の秋の風　舎

垣の木槿の雨き面すれ　梨

水をとる糸瓜も香る垣根　相

西吹く菊の月をとる

猿の出る垣し宮の清水

油傘をかける傘の竃

その月すゝる虎の道川流

形りの吉悪者合ゐる

酔さめ調子の声は宝帯

ゆり起財布ある

蝋燭まゐりて果の手

きらりく月は霞のる

張合て鶉揃せる屋断

槿木の枝打る中

清濱の此子大水綿なく

稽古もせぬに桜の胴突　利

八尺のて度もかゝる　長

柳のかけぬ帯を持出し　堂

去年の浪瀬西に行さき　利

村中家を焼きる　長

丁寧に将結すもの相の苗　堂

溢業もつけぬ序言地の　利

去年と何の春巻を押す　長

京よりも一日宿るに恋る　堂

稽古碁盤もさゝれぬまでゆる　和
千住に送る舎弟の初入が　芝
菅笠ひの木の葉ちりそめき　笠
よそ見んとても夜ふかき物思ひ　和
得来の袖に筆をつける哉　揉
秋立や武者のまくの浪枕月　笠
影法しく判刀社路　芝
初汐に上の渡しもまくなる　揉
唄のこゑする香の長枕　和
寸尺くもの活眉掃よき色　芝
うきくらとかゝく妻の夕虹　笠
手伝くはさのみ汲ねや秋の風舎　用
垣の木槿のなき一面まくれ都　長
水をとる茶店見世る御院相　堂
西吹く菊社前をとしる　用
猪の出る頃に雲の陣や今　長
油紙とりするさゝ帰の笠　堂
其の身はする居の座に川渡る　羽
形りの吉悪まづ合口ゆるむ　長
酔うてゆく調子のまゝ小宝帯　堂
ゆり起し抱けば財布取る　羽
蝋燭はやまりてゆく家の子分　長
きらりと月社前の名残哉　堂
張合で鞘編せる庭砧　羽
棒木の枝も余るゆき音　長
清浜の岸にたゞよふ鷗哉　堂
稽古もせぬに桜の胴突　羽
八重八重に丁度もふくる夜や　長
柳の枝をかけ帯を拵出し　堂
其の後西行にゆき　羽
村中まで二の次出る　長
丁寧に帰結きて相の苗　堂
深く業もちの府京地寄の　羽
元ゆく手何の暴巻を押す　長
其の身に一日宿や　堂

居まに行けて言伝さ代ゝ廣　羽
船の艫子は行水き煙草　也
花さ過ぎて雲もまばらなる行灯　堂
茶の下に藤の花入る数の内　羽
股々に縞を刷る月の影　也
ころぶ出作にかゝはさゝる　堂
備はへきしと刀を差しすれ　羽
羽織の袖くれ小舞の姉き　也
乱れ髪に信濃路の業よりの　堂
蕗よりも白き嘆かる業　羽
嘆さにけり綾羽の打き（若）　也
おかしくも小船かけ　堂

艶寄廣庭

人追ひて思ひはなる露の霜　丁知
月更けて雑のつかさ何ね寓　由撰
鴨鷸秋も水の小部屋て　也
まいり刈さる〆畑をつく　撰
岸は八分の合ひ問合せ　也
小盤の外流の何ある気　撰
旅ゝにて蔵へ出る渉り床　也
笑は小さな花紙の帳合　撰
旅ゝ幼さて妻は行かれ　也
まつ刈る蚤の掘灯　撰
何ぞ送る気の裁つてなる船　也
水をとる湯さに実なきく　撰
ふ性すむ合点も我月の秋　也
四五人客の新室鷹ひく　撰
尤にはを然と角力を踊さこと　也
度も裏は尾も逆手居根　撰
雉の聲根かみて世何ぞ急る　也
扇子蝶を掛け牛の脊　撰
眺めを流す経雲居考　也
秋田出産の娘ハの丹塗　也
茶に出る素をもとに板子千尺　撰
眉を知らねとかゝるものいに　也
蓮の夫を渡る所結縁のゝ　撰

鹿とゝのそて立居を備へ原　羽

舩の梶子はうきゝ氣差　古

先ゝ追ゞて宿取くたさはらね　堂

苔の中に名も昔に叛も句　羽

殺生実に猪を捌く月の頃　古

くるき虫の聲はねとはさかなる　堂

備へてはしき刀をさしすれは　羽

羽織の袂に小笹の挿き　古

咄取くゝ信病の染まりぬ　堂

櫻に追くとせて盃殺　古

幸ひを告し松の嵐して　埜

なせうちの命ふ欲ゆ常路　古

緋の袴きちらち艶を持さゝり　埜

袂つかみふ破れんしくる　古

かまへ其月の隠新に差遣　埜

ちらみいらせ菌出つくまで　古

後て世とも姑の樋をたてられ　埜

ゆかしぬ日ゟ色替き仏餅　古

盃除に挟みち流婦四月　埜

尽いすといはるゝの海苔　古

内川の出と客はへとりて　埜

俵に白ふ種の日はしり　古

端先にかゆ咲しや春の月　碧山

水をたなうる鴨の胴さき　貞山

炭俵出扱屋の口払をうりて　流芝

垢のうらをうそ夢挙て出して　金池

落し人の足跡を数ゟ貌ゟ後　南鮮

菜たかり伝ひさるぬ昔菜　碧

疼きすゞ済る峯の陰の欲　貞

ひらりおつし兔さむ縦樋　芝

影ぬさみおつとせ候抜けり　池

谷角に関はある藤え　鮮

後与に集て手はしさ次芙蓉　碧

呼さう子も晴さう無月　貞

村ずまに合ね観ふの奴さ物　芝

ぶさしの業にかりわけの路　池

厳寒白形にかまの世を焼　鮮

時気のわけ急の葉かな　碧

乞姐の売むかりまきふ松原　貞

都の人も道みて物年　芝

月おちてつちも春る葉衰　池

急ゟ出る荷を預り付る　鮮

追ふ時は乗て世のきき群鳥　碧

利生まなゆき流行新吉　貞

雉ははゝも忘られぬ嫁の事　芝
小魚めくらおかれ淋しき滝ことも　池
蕨折れとなりて楼へおもかげを　絣
よそ分出のをこの世なる教分　瓊
送りは湯温泉へ出るやうにの井　貞
まさに行つの盆出の盃　芝
上弦の月は時にはなきものを　池
秋を含このる関のいのけ居　絣
こゝそふの条継切株を出　瓊
信のもまゝとを帰る葬礼　貞
明かる来刈の落穀打つ　芝
一咲方を押出る末風　池
路の名代の男をかてさせ　絣
骨折をえて蚕部屋　瓊

夜帰るもなかちかゝ遠の音　夜桐
屋敷への月を細かる春の雲　乙良
何風も吹く夜換をさきなて　桐
茶碗のかけ直しへ何處へからうらん　良
旅籠ハ曇りも夜深に泊るかり　桐
渡世さるゝたぬすむ雲雀哉　良
宗祇のうるさくは菩の露　桐
猪のすきのとなるをすな虫　良
名もなき文を澄せとて深くみ　桐
縁の下にて隣る老人の蔀　良
若の手もなくおとされて乱飛　桐
出開帳にも月この雨の川　良
麻かりて踊見起る猿術師　桐
寺で宿るは何にある新縁　良
宮ちからにうたれたる舞姫　桐
きてなあの御座の戸　良
出斯茂のにふる庵　桐
細へ下りる頃帰る無誉　良
浅草は京宮に在る家　、
まつと廣る告しかきさ　桐
本時の道前にも恵の網　良

雉の尾も恋しく見ぬ姥の事　芝
小者のくおもふ誠を満てて　池
薬汁しのく模てむかうまゝ之　舞
よみかけのをこのせる秋の前　瓊
近江路は湯温泉にかよひの辨　貞
まうて所ての女盃茶の物盛　芝
上弦の月はあけばの高きにの庭　池
秋を寒くる閑の八いのけ屋　舞
こゝのいの衆絹切紙うれ匹　瓊
宿のものさくを借る葬礼　貞
かねこまる来別の古殻村残り　芝
一吹を押込し春風　池
跡のるみ代々の男をもてしさせ　舞
骨折足ても番起らぬ　瓊
名帰りものとて道路音　夜桐
屋敷しの月従ある衾や　乙良
行風もしかも模を立つて　桐

茶旗の字たえてのきやうへく　良

車傍めて宿くやうはきよく　桐

たゞ扶く蓄のゆまち鹿ほ　良

巨蛙のうちに網る屑炭　桐

萱堀の鐘に来け居る夜の汁　良

左官の手伝も出る飼ふり　桐

暖簾に宗呉のかんかん詰れ　良

見のでいよりは長い横丁　桐

神の前立つ森まで高き薄の肉　良

ござ舗しくて椎拾ひ子　桐

透風に夜飛ぶる宮合望屋　良

出みてまでいすい生ぶの秋　桐

涼さしく針も広き此好　良

帳穴ふさる医者の不断着　桐

浅き海も出る押てる紙雑　良

志ぞすのよきに干る菊苗　桐

仏の果さけのすね雲のたのまぬ　雑英

徽尾の鴨の代ゝとて野　乃英

あつまく藪の月よまちあ待て　境

移行赤きもの有つるの鳥　藤

宵の空月の出際に吹掛る　英

すまし宮のにあくよき花留　境

およそ玄気てまるの宰海　藤

見る人あての京さい出こす　英

おしつて透すすれ旅出夜　境

いつの続の風るよまいる　藤

一夜も居ゝ好時門新当上り　英

撃附の夜ひみ跡呉の附出し　境

ちかる柄も尺す涼しい　藤

まさ秋の伴の諸るみくの　英

二ツ三ツ新く絡きし種類　境

膳つける豆秋すい　藤

わんのうとびに朱切山つき　英

浮き寝の毛並るける　境

寒くて出窓月め法書文　藤

鯨も肉精と見有る内方　英

車借めてふくるはきかく　桐
たゝ接さ恋のむまする鹿ぶ　良
巨燵のこもに媚る唐崇　桐
萱埔の墻にあけ俗か掛つけ　良
左官の手ふ似た出来る詞くり　桐
暖簾ふ定岩のかりんや称いれ　良
見のてしょうりは長い襟丁　桐
杵の町ちらぬ子やめき叢の内　良
ごまく傳して柞然くかりまう　桐
透風ふ序飛浮る家合峯屋　良
出みてまくす生忠の秋　桐
擦さしく錆も忘て此好　良
蜷充ふとる医者の弥岩　桐
活る海も子押る銭雑　良
志おりのとめたうけて菊菌　桐
何の果こやのもね雲の行てゆ　雑藤
梅尻の鴫の代ゝのくる聲乃　芸
ちのつし款の月よまみ特く　悦
移修赤との南かやの乙も　藤
宵の雲月の出際ふ吹掛ひ　芸
すまくーぞのにあくし苦茗　悦
おようとゑ執もするに亭海　藤
見ぬ人あてのら夢さいまこあ　芸
おしてまて遊もまは出旅支度　悦
いふの猪の風とと生れる　藤
一舟も居ゝぬ粉川秋留上り　芸
勢附の戸ひよ鉢花の俯出し　悦
ちくかる柄も尺でよ流しれ　藤
まゝ秋の体の誘るみくめ　芸
二ゝ三ッ転へ絡まし種蕊　悦
隣つゝ鉢筆豆教なうふ　藤
わんのちうむ子朱切山つゝき　芸
岡ゝ窪の毛並そうける　悦
手入て出来ぬ出月ぬ使芸文　藤
数も肉粽と乃ん傍る肉方　芸

つゆしくは屋敷住は雪色　堤
芦辺さめく川岸揚は唄　藤
折からハ吹かせる松の油出　蕪
帰り出は笹子竿の花ぞろひ　堤
入側を画せぬこしも整合く　藤
さつそく忘れぬ手に祝詞あらく　蕪
馬市にも府の出来は桜樽　堤
家見れハしかりは遅れ大入　藤
かもいから降音月を異でし　蕪
おもひの外谷田稲の川向　堤
以魚鈎の九さし擬せ村うけて　藤
庵まで心網つけてある　蕪
一生八方切て金納戸口　堤
守護を悟く東風は嵐　藤
出薗は雪々子藤本して　蕪
提来し桶の水はやみ立　堤
風さし降雪は明り散　参稽
酔ひの紫をあてもかねる香　資香
岸ちかく入る花筏の浮き沈て　稽
徐村を放つ了僧止まりて　雪
いつやらの月は庵さまく　稽
茶立虫峰新屋のさゝかり　雪
茶大根を手く付行の富も　稽
哉宮も以譜代女房　雪
接待の人も只勝手をもう　稽
男やさしく武士はあらぬ哉　雪
吹出は暖りうき紀濁海て　稽
不二因行の二つ丁に来る　雪
源くある本の君ゐ月のむら雨　稽
青露の真中ろて露しく　雪
手向の様で通ひ五人口　稽
出物の棚手鶴の所にある　雪
庭まで行くの乗りし霰　稽
豊絵にうつる鶴の咲女の　雪
國のため守山出は春の旅　、

南宮子魚能喰ひ行きい　旃
足代もそ條まり雲晴　雪
足弁ある雲曙なりふ　旃
姫継玉さ恋ふ遊汗の檜の練　雪
逃一家の障をおもひ出る空　旃
寒梅と拆れ凍さ流まり　雪
みちのひ飛さ候の雛仗　旃
よみ水の館を流る沫置井戸　雪
襖は変へ大水に退ふ去　旃
月を手送て古の荷拵　雪
月の灰みは分へあれ加減なり　旃
咲ゑそもしてくる味の好る菊　雪
大入まへ仕まる灰のこれる　旃
巳刻出る仏生る佛檀の磨き物　雪
雀の声ハいつも旅中の　旃
村雨を通してもぬ立凍り　雪
水田さらさく吾れ山彩　旃
粉次の時ろゝゝて素をる府　禾本
動かゝる蛸能衣く木峰　古素
二之町と広まき森の燈ヶ穴てヽ　本
分めしく色との釦信止れヽ　素
明月の通りて時る寸つ秋　木
手早よく暖いわ嵩る新味　素
根性の気をさもて美角力取　木
京大坂ハ夜ミ法の気物　素
諸病と褒め著むゆ生涯を送　木
投書うき気しく来て和尊　素
勝手の脇意あく降り小銀　木
素朝のゐは吾井の水　素
過風の跡まきまるとこゝ月　木
拾ふ手條のゝる雅の寅　素
柄ゝの二丈もくしき長襦袢　木
底下撰さゝるゝハ分　素
恐ゝして居て早朝も毛の靈　木
恋ふるもの小さる雛の帝まり　素

南曇て魚[illegible]喰のゆきい

足代も手[illegible]のけ[illegible]遊[illegible]

昆男寄も[illegible]庭[illegible]のゆふ

姫鶴なさ数と旅汀の櫂と綵

邑一家[illegible]を思ひ出[illegible]雪

宿梅も折の隠しき流ます

うけうとひ飛さ伏の雛[illegible]

はらはらと遁もせぬ宮若　、

楊枝箸ゟ繕ふ古本店　木

ころころや木魚ゆすりて旅枕　爽

代録とみすそけくの跡以　木

我ものといひし娘の縁差き　爽

いくつ出ても二人の毛鑷　木

横槌にちらし擣けば茶の栄　爽

拡つきもおかしけふ眼の色　木

吹ちる雨にくちてかゝる絶間　爽

天秤棒て居合ぬけする　木

肉の枝秋被船を壽きて　爽

為よりおそくすりし氷餅　木

好きし川の絵きゝ茶飲合散　爽

搦り堀をのみ芦に新囲　木

乗物まで拘へ行けば作り鳥　爽

垂らところに居る池の空語　木

小猪子に首毛部すみの生柴　爽

猶店と蔵めし文の献立　木

喰もせず唯乾魚の横顔で　南耕

とまり猪の群く小舟汐　流芒

白岸螳螂の太刀おも揃ひて　合池

俵にならふ桶給ふる　碧山

立秋屋て済ぬり身の世　貞山

煮ても匂ひの最ゟ蒜葺　耕

ほとけ遙ゟ楮見の下ちてく　芒

そ馬しぬ新て打ち土の茶打　池

高人のきわく黙たる小銀さし　碧

結び摂りけも迎る浙立　貞

入相了銹く網まかつき世ん　耕

いくら生れても渡し筆　芒

ちやうきを物のうへし松月の鉄　池

霞の声ろ行そ通ん落一了　碧

縫のれ綻ろ括まく拾て偲ぶ底　貞

お肩よ結ぶ見いひ決　耕

目まきまとの新田埒の囃素見　芒

鉤し簾の錆うきさらしき　池

本意なくも別ハ発も賤く来　碧

丁稚の手々ハのしめ門出　貞

爺のおける晨朝に来ハ出るし　鄰

来る日へ出たれも程も放され　芝

みとの忍ら添子盛つ将き迄　池

板のくのけハ姿あまもましき　碧

椽先へ出まて手鍋の序切り　貞

精くし二合計うらん実撰　輝

故なさく仕る出村の年貢米　芝

ぬ出ぬ出ぬ鏡の塗鑪　池

宵祭ね宵の宵とむ宵の晴　碧

つよく吹ね秋の風音　貞

南方は葉落かさぬ丸柿　輝

日長くいつて葉子あふする　芝

砂よけは流の浅海老さく　池

大きれ石の坂まうつまる　碧

忘れめしつにのもとらと曲下　貞

あわ吹く梢る花の精出　輝

注ちあくぬるる雨なる花をそ　西曉

きろ寄り精く構わしのそり　秋帆

さし流れたる花れやのあまて　九良

精にきめたる月ちけ　曉

柳粗の花名ハ月と云ゐれ　帆

生別迄雨暗き新酒かる　良

ふ晴きハまて小袖の押つくく　曉

精さんとぬるる鏡の出ました　帆

雪ちらくも舞れつつ鉄漿柳子　良

傘もかくぬまで雪なかつく　曉

此花も家も出さる木染猪　帆

別くる章骨なく水おお盛を　良

月の雲流みとちとらへれ　曉

窟地発くて局のねりつく　帆

林先へ酒女ヒたかく村洗場　良

宵の花わく座の花の淡　曉

さし荷ハ色子に忘向の樫木杭　帆
ちひさき桶に揚る生海苔　良
樽路の棧峰の菜も縦ず　晴
何の廃世の志ハ多出格子　帆
菓行てあれハ出道入所様読　良
そそ涙てなきくる車井　晴
茨海老茂か折かれ古き花車遠り　帆
気色わりて糯子過ぎたき　良
陶たくるおき子いろろねの不よる　晴
岸の寒便も鬼のと動宜　帆
偶財も住む教ル傍への対　良
奴の宮魔ハ皿の目ゆ合ひ　晴
月代のた靴ぬらし岳出宙信ひ　帆
刈跡哥ひて稲水に居生　良
時の去寄りも瀧を流せ寄り　晴
坪子のぬえ宮所角通れね　帆
腰丹よ為るとつく休み　良
合のうすくなら蕪の古く脈　晴

関けは浅老花の泳あ　帆
以てつ摘てゝ五加木芽よ立　良
又宿の押揚り来て柳　丁和
激桜を末みて基の水寄　双居
表宗紋は銀の枸杞とあり変せて　和
うつゝの立を猪を始まる　居
宙宗るる降て旦旅の目　和
為よりみゝわる鴨　居
新宗に淡せく妹時も的す竟　和
せわし一日ハ暑柳でつ定ろう　居
船子よ風も成ることいひつけ　和
法花子重と葵の移ぐ　居
寄郷の遠杉の紫縮さ　和
升のいふめて送る枝持来　居
袖さへる自の色子移てそ　和
襟時子てんじ酬めく　居
手通も於てる通ゆさくる帯そ　和

五穀をまかせて[illegible]せる　岳
拝堂の雑中ところも出舞　和
きれ[illegible]物ゆる仏壇　岳
精出して申刻仕舞の読とき　ヽ
海に灯ろうのまね[illegible]　和
酢ゆるのも手れを隠る古座物　岳
いまを以て見世て[illegible]　和
言分は未田あれ[illegible]付追り　岳
お導き後の世界ゆるまる　和
賭的の名銘更隠し名香　岳
表は片足と吐き耳のと　和
ありもうと仕着小袖の凩吹　岳
かし汁煮の涙ふる空　和
明星につれて落る月細く　岳
出水くずれ去年の花咲萩　和
本家へ汁を継る古来[illegible]　岳
無ろの金は古へ出る　和
いつもおもふ春の園生かな〻く　岳
雪のちりつく[illegible]居　和
[illegible]ちまつき　岳
ゆるむ荷もきのはる[illegible]　和
茶花ひとりして居につゐとめ　湲物
柝鳴重ねふ〻音する　湲岳
毛織衣其の重[illegible]　物
取りとへのうし海のさゝ際　岳
所つまり雲はみなひく夜半月　物
身の動く夜鳴子かゝつく　岳
帰もして清と飛行秋の蝶　物
袖のあまふ石膚　岳
行の縁は何やら薬て家[illegible]　物
行つく簪も悲ひ青みある　岳
侍る何百合も東へつま緑て　物
甘海ねのさと月の揃ちう　岳
今度のはまへ業て出舎る風邪　物
新粧をとしてさ侍り[illegible]　岳

写蕫燒さしくに爲をしけて　地
市もなくて仕舞ふ時あれ　岳
熱りのつまもちて雛の客　地
蚕の支度にかゝる東風　岳
うかうかの魔積帋の羽子に往　、
ふるきやさかえを行医者　物
東叡の上合はせる石燈籠　岳
未詳邑ハ多ハ下宿　地
身はそう知って縺根の寄之　岳
茶に留守て仕舞ふ新酒　物
手の内は虫切くれを鉢し替　岳
椎の木いくまで淡雪の蔓　物
たらちねむ書きへ嘆き念仏　岳
涼水に腰掛けたその一筋　物
猪の何事を紹也月の秋　岳
為ての来て気に風にりりまる　物
荻萃の形も扇さに拾出し　岳
さゝかしぬけ行る椎打　物

婿合ひ稲子かぞれ育八之　岳
此の桃水の色も西に住まる　物
咲枝に雪一日冴えて　岳
娘もてあそびて押つけるまゝ　物
秋の梅行き文く白炭　禾木
雪おもらかく簾あてへつ　幽宣
家蕎積仕遠の内にたちそひて　木
分かる数十種をなる　宣
暑なし秋秋ろけひく寒肩　木
嬉も坂明も一陣の子帰　宣
いくつ時やに出来る斎寮　木
ものてかたつの紺屋職人　宣
二三無市場通りは藤むかけ　木
いつよもあきし桶の上　宣
さよりとは世のに換れ老の撒　木
壺のふく鏡の古池へ来る　宣
月神さま哀乎仔なる猿をつき　木

毛見の衆とひはまかうつる人傘　室
初鐘に鳴らぬやうにし寐ひ　本
緞屑吹くる嶋店の蕙　室
おんのうく京町口の出陣く　本
寅しとの猫まさかりや之売　室
いは花の銭まうつての手代を付　、
楊枕に哭ての夜　本
身任葬は少なこりの霊祭　室
葛篭の紐一とけ垂る寐籍　本
降りのうまさかなしに筆とる萱　室
吹けるそ焼のし消る粉炭　本
軟吹手と手叙数らし鐘を撞　室
持佛の前へさ出ぐる具金　本
櫻柄ふりて女の脊高く猪儀　室
寒然渡しの御きんはつるむ　本
棗葉の金看板に月暗く　室
まつ咬の新談き茶碗でいひ　本
温石もうや暖まらの浮にあり　室
台所なつの葬　社先代　本
覇を擬りとし口宜き知の古さ　室
任よき法くてまる小屋町　本
昇きすれ孫宜の言てかむの氏　室
大盃にうつる寿り虹　本
喜き九年へ狭らる雪の志ぞ求　業
ちよつと出で日も白小藤の芽　墨芳
書満にも堀くき拙撰て　業
何能用やる急に身かく　芳
帰り探の申刻る我をなさる月　業
言入りちと夕への隣のむ　芳
何職つきそもてふると歳の吉　業
人磨しての陣くろひ　芳
結構で拵る身近の法度封　業
見晴後で極も去ゆぬ　芳
動かうと云うと清る粮害雲　業
去く者ら帰り渡しふ一時の月　芳

毛見のおもしろしはおなすかつの人傘　室

初鐘も鳥は啼ぬや浮はし花ひ　木

鍾馗屋ゆくの店の恵　室

秋への□と京町口の七竈く　木

客ふしの橋大さかりやまえ光　室

ちよ茶や鍋もうつの千猿子付　、

構れ飯を哭しの夜　木

身は往葬のはなこりの霊の膳　室

藤浪の重ねらける蒸籠　木

降ものくまさかりて年の暮　室

咲けるを仕つのし清る粧火　木

軟ゆく手を稼ぎひて鐘を撞　室

拐併の女をさせる戸の念　木

擬栖おゆる世を省きて祀儀　室

姿雑渡しの御きんおこもし　木

壺菜の金看板子月ゆく　室

来くり峨の影は高ゆ嫌ら以　木

温石もえまれたあく浮子寺　室

合羽客の旅の葬　法の先付　木

戦を悔ひ四方を旬のたて　室

住よきは清てすみ家壺町　木

昇なる孫宜の亭子むの民　室

大盃みこつるまかり虹　木

ほとゝぎす相承論に月隠て　叢
喰へ物香は膳の茶　秋　芳
茸あれハ宿て筵の露真　叢
旅しくも雲は茶屋の張札　芳
人先へくともゝ千組囲り　叢
切抜て芝居を借也噂を　芳
数入の内て百歳て仕舞　、
子を抱うらゝしう暑さの癖　叢
市にある木偶の下地を掃て　芳
鴫のしきる夕飯も腐煮　叢
待兼て蒲れ彩色のかきま釼　芳
蘇云の羽ぬける笛乃譜　叢
明らかけて泥めとの音羽　芳
下らん子来て数ハ法し　叢
八谷の番合船は連う出来　芳
四国ハ二度も見ことの人　叢
去年と六月の出雲のあ輪す　芳
古格をしたへ刃ときる　叢
二人して嵐に柳の都をも　芳
親らくも年あめて摘る　叢
所かるゝ足ハ床も涼しく　芳
縫ひの露て噂もこその流　叢
荷物もからて茶も薪ちまゝを　芳
霧の底を落葉に聞く其　叢
ますら狂言ね太の神や祭　丁知
寐まくらのおもむきは雨　言山
折ふし常州の売を離うて　得蕃
飯櫃抱て詰る返礼　如
須先も来る雪あ月の照　山
面影のつるはうらとあて至　蕃
新絹も古う浅黄家中内　如
冥のうち折らその付る物売　山
膝つく侭子昔は位そうと　蕃
引かへて如何の米粉田余　如
愛するは風も頭痛も様なり　山

花の御遊のおおん　まゐる
望の秋は月にとらへて露さく
稲もとくうこれなさへ　秋　宗
茶むもゝのくさを返ゆる地蔵堂
菜かりあつゝ水半体ぬる
おもひくと居候かけ喪人
桜はものへる初午の前
人数に寄て料る鯉の魚
もて付し女郎をそへてあとさき手
かゝるゝ弟子の来て居る庭の奥
永田の秋に宗のゆりしきく
茶屋に変る出来を撰かて
垣つくろひのたえぬ境内
船つけて出し払ひの庭をさ
単を汗の志み通りけり
廿日の虫歯の毒と留しき
おのひろふゐみる秋は番組
片側は家ならずまき月教さ
流のうち細瀬おちゆる　居
畑柄も大抵は素る凡家
縮は洗ろ洗ふとのらぬ小盥
去月の花見てゆく古庵の留主
耳は撥らもち隅をやみけり
去は哀や見花とあけし姥か
妻のねる付は見てる際
山の灯は見えてもゐ暮るゝ谷の水　左仏
おくれく牛隔る叢の原　井梅
手細工に樹の經緯（タテヌキ）深上て　流芝
彼の女はに鋪の孔ゆふ　池
月は宵ふ空包うる晴けり　梅
木槿の花はかのゆ落やく　芝
案内に出付る玄関の秋日り　池
冬の風新郎のきのゆりと世な　梧
挑灯も借しておそく船を積　芝
書くと何安は京の出有り　池

花の御遊のおほけなる　蕉
望の夜は月よりくらく露さく　知
鍋もとうら汲なさく飲室　山
若むしやのくるを返しの地蔵堂　蕉
薬かりあふのしかぬ牛体ぬれる　知
そよかくと底見えたる妻ん　山
振袖もこのへる初午の祭　蕉
人数に寄て耕る鍬の音　知
走り付て鶏をそへしちる手　山
かさなりく式子の春も露の奥　蕉
永田の秋に家のありしさく　知
葉唐に交こふ来を撰ずて　山
垣つくろひのたえぬ境内　蕉
船つなき出し　はらひの庭掃を　知
筆を洗の墨み通けり　山
廿日の虫歯の毒と留しき　蕉
茶の湯の友かる能は書組　知
両側ハ家ゟ付まくさぬ月あさし　山
旅のうへ一畑出おゆる暦　蕉
畑柳も大抵ハ壹る風聚　知
縞ハゆゑ先とのしぬ小盥　山
衣々の昆をてく安庵の窓　蕉
耳ハ撥うもち鳴をやみけり　知
ひハ宕さ尽夜とおけし雛　山
妻の白付ねくる際笹　蕉

山の竹は思ひても皆流る谷の水　李池
おもしろく年経る蓑の嫁　井梧
手細工に綱の経緯（タテヌキ）深上て　係之
彼のおけに鍋の乳汲ふ　池
自は空ふ雲迄うる晴なり　梧
木槿の花は垣の落やく　芝
案内に出る付る無穴の秋の雨　池
その風敷郎のきゝ分とせぬ　梧

別て来し恋の子貰ふ親まで　梅

仕切ものつける墨付詰込　芝

物好のゝ葭簀味ふ月明り　池

收まり立せさ後の秋宮ら　梅

まくら露の見ゆる簾の内かり行　芝

此やうしまで八十ひも四五日　池

堂宮修さらぬ繕つまかく彼岸迄　梅

もとかく蕎麦をとる新蕎麦の香　芝

百合の根は実代終の子梅く世売　池

大工衆のゝくゝつける鮮　梅

お袋の咄に母はこりつり　芝

喜出ひく鏡見て居数　池

宮も客も浜風の吹あき　梅

鵯の羽音に驚つてかしくり　芝

ます継を見ての世る古猶　池

て画そうつて後のさゝ縁　梅

門とには幟の家ふ薮祭　芝

月は見ぬてゝ多凪鰻　池

こつ折て溝つうかも縁の紐　梅

江戸への米船待ゆ宿く　芝

葉はかりて貨値倒には乞丸兜　池

宮居をとめてかる菖蒲　梅

以く水を渡出に帰て雨　芝

細りし患の鏡とゝうし　池

一吹ましふ此の散りく　梅

縁ふみとる芝のそうゝ　芝

手の隠居みり出して松の内　若椎

年まへ行くうきさ継ぎて酒売　紫

江戸の茶始の糖ハ地を出て

氣軽な旅の家を探る

緒へくのひくり震さ川の月

茶拭ヨイ子ハ鶴ふ丹しみ

九品正の鍋に冷る鍋の

押切判の否応よまふ

こ水る見へ並家をいふる嫁

別て来し旅の子に貰ふ新茶哉　梅
仕切ふりける墨絵猪口　芝
物好の琵琶鳴る月明り　池
船より立し旅の秋寒　梅
まくら露の兄伸る旗のなびき行　芝
此ほとりにて八十も四五日　池
堂にある絵にいろいろまく祓居也　梅
もとりし落葉ともかし流茶の香　芝
百合の根は出代替の手柄世帯也　池
大工ゑさのまゝにつける餅　梅
お袋の咄にまぬかれにけり　芝
喜出び鏡見て居る　池
宮ゝ名所浜の風の吹みかる　梅
鴨の羽ちゝに捲つかしかり　芝
ます紙を集めて世の古き鞄　池
て画ふくつく渡のさわ深　梅
川としてに機のあとふ藪ある　芝
月八色てしま多風鶴　池

ふる別て涙つらやき浦の細　梅
江戸の芳記嘆かたく　芝
蒸はやく貫纏伯父ハ存じ也　池
家居をしめてかる菅替　梅
呼しむ水を谷出に浚て壺　芝
絹りして恵の鑓とるうす　池
一吹にはらくさの散りて　梅
猿のみを集る芝のいくい　芝
手のうちにも如此て柳の内　岩推
岩まニ行くうき紙をめ絵空　紫
江戸の泉館の様ハ地を出て
気性ある旅の者を倚る

名静にさく初花し法の花哉　社
妻に離水出し雪の身法　推
追て鋒の先にて取りて寿る　人
幅香の影も肩子春振し　推
かはりて帰ぬ紅燄の終出　人
非曲ぬ如くに明面塞素　推
邪ひし唄て空の物あるく　人
ちん飛うと味たるを迎の紫　推
桂こそつとよきかへ。ゆちる　人
見当らさの折つ迷ふ細道　、
汐干狩笠の十重廿重ともむ　推
六餅ておのれ人手と文出来ず　人
分もよおり付る琵琶の上　推
律和て墨も点句の通す数　人
只付てよし菓の香く水仙　推
体し細の付とて拭かして恵　人
湖の庵そ雅宛の海　推
きうもぬく宵申中の入道　人

月花くと風見件吹　推
流のうちまく流る落るかう　人
芸の中て錯落ての人家　推
出つそうくちり俳もと字方書　く
艶ハ和壺手まけ紅墨　推
霜先生ひ雲うて家春新る　人
お妹の古薮庵もらしくら　推
第の色秋時の出て似る付す　人
よ紅紅のこれ落葉かり摘白　推
足届けておくや菩の初桜　光閑
彼望かへせるあり加茂川　青我
材木も表には儀手様にて　、
第六ツ目の花風呂八湯済　閑
接子をのらもち弁当守月時　、
菜を摘揃る緒の物数　我
開帳へ内々仕舞ふ盆三日　、
よく人も成る声の婦も　閑

名物とさく雨せし浅草殿　松

素人の羅水出して金山と沢　推

追て餅の光んてかあるる　人

煙草の吹も自子奪吹し　推

かいてく嘩ねい談の終出　人

非ゆれな女へ江戸時前連泰　推

鄙ひと唄て夏の粉出ひく　人

ちん鉢りと咲まとれ道楽の蛍　推

植こみのとと高のしゆちらる　之

見送りさ奴の柱つ尾いて絹傘　、

汐手紙堂の十香北香ふるむ　推

六餅を咲のれと人子又出茶屋　人

冷えて新う付る欄猪の上　推

律初と雪と貴なの風過す影　人

ろけてよし葉の香に水仙　推

注し細の付とて拭かして煮　人

陋のやく旅宿完な極　推

きよくも宵庚申のく連　人

無常の古屋住居も嫌ひなり　、
巨燵の上に借り合ふ斗の筋　我
船頭の因果此世に念ひの入り　、
秋の暮るを青にかへし吹　澗
小松など藁屋残て嵯峨の月　、
唇かみく海のさくらんきを　我
猿をこに吹でを声高の鐘　、
むもねかく面も知らく　澗
鯛精の法名つける出代り　、
抓ふ嬉しき雛のおもてへ入り　我
新ひなの衣に赤子乳人　、
懸想の場へ讃顔もする　澗
只ハ森の秋雲の大社参りて　、
掃除常へ大経の拍子木　我
門番の恋ゆくる医者の弟子　、
又様でくらまされ行　澗
芋の葉傳ふ数の露とけさ　、
夏むちくける新草の露　我
子等も蘇好子数ハ増して　、
たそその晴月ニ猫の尻捲り　澗
投棄ニ澁紙一枚の墻をかけ　、
きつく角力は好き小男　我
法袋の先廻く成る宵の雨　、
芋もよみ茎のらす葉藏する　澗
ふ断噂高は村も耳につき　、
一筋道の霧むり足の跡　我
杉のみさ枝も見ゆるちりん　、
森松葉する庵のくつろき　澗
細打ハ鶴鳴る家の次すれ下　知
日ニハ雲ありき長ハ夕方出　山
足一ヶ所は小鮎花ニ橘掛て　知
尖んとそ小松を米を焼つき　山
植所らぬ菊ニ迎る月　知
きすき程急ニありし初汐　山
秋ニハとり待て高ふ俵の　知

西鶴の書屋住居も嬉しかり　、
巨燵の上に作り合ふ手の筋　我
船頭の因果咄に念の入り　、
秋の野まで青うつくしく吹　閑
小松原に落子嫁に嵯峨の月　、
唇かわく煙のさゝやきさへ　我
語るこそ二ゐて夜更ゝ鳥の鐘　、
むらむらくゝ雨もふるらく　閑
鋼様の泣立つる出代り　、
抓こ信玄雛の加たへり　我
新ひらの太夫来る鮭人　、
無雙の坊へ錯顔もなる　閑
雲ハ森の秋無の大法茶好して　、
掃除念入れ大総の柏子木　我
門番に可愛らしく遠老の嫁　、
又様てくしまされに行　閑
茶の蒸種語人鼓の音よりき　、
夏むちゝはる新草の客　我
子子も藪柑子焼ハ揚あれは　、
たゝの八月に鍋の尻撥　閑
牧童に掛軸一幅持出付け　、
きつゝ角力は好な小男　我
法衣の出来て成る宵の雨　、
芽もくみ麦のる葉談する　閑
ふ断噂ゟ法寺も耳につき　、
一筋道の寂むし足の跡　我
打みさ枝も見ゆるきん　、
春松茶なる庭のくつろき　閑
畑打ハ鶏も家のゝすれ　丁知
日本ハ雲かゝる長い夕方　出山
足一茶は小船落て桶提て　知

縁に付ても世話をやく伯母　山
病ひかと見舞ふも對に婚ひ　和
引越て掃除も手傳ふ寺方　山
暮てひらつく夜の旅籠　和
お手紙出来て先親のよふ成　山
縫ふの長みて幾夜の晴る月　和
家内の分にまはる初茸　山
米代てまくに出世帳のつら　和
久しう来も取戻る椿　山
きの子売そのも出汁もの見と　和
巨燵寄すは疲ぐ成る庵　山
彼岸のうちめて出す薯ひこそ
寺之も出来る温泉のかゝい
高貴の傳ふ良く了りひ
おかりくと降てやまぬ雪
法被して夜明近くの奥山
身の上かへて五十まで来ぬ
おえまま本縁勤め終る哭　表
涼風出るはまだ宵のうし
笑顔出る夜毎坂は稼ぎあり
時も隆る雑談する説法
目出度さを祝ふ婚る極の月
笹も風をあまね四の座
運試は舟の座で続て出す
つゝもちいで妻さん悲業
建仁の又見ておきも取は梁の丈
来てにから客を数に帰る
新院のかた全も赤れは枯すむ芽
むしと菓子つまむ扇の花作
漣に蛙の洞風のかへるにそれ　葉崖
柳ゆれ出る岸は年時ゐ　嵐夕
きゝ清きのおくれ雑煮を祝ぞ　崖
いおくもとうるれ朝を分くさ　夕
元山の中室は内の初み月　崖
あらたく蘇を飲にての座　夕

松嶋の霧隔のとても秋の暮　崖
肴は塩の雉子集りく　夕
ふはくと開き囲炉裏の寒むさあり　崖
雪ふはむきのころは法師結　夕
一廓夜なる町はきをんで　崖
まさなきまへも浅ほの守　さ
月待て深草業の廿八売　崖
示て遠いは雲乃紀届　夕
虎の尾にはかの屋の所る里　崖
妻のうちかう残雪ふ　夕
浙並子猫つくお法掃除　崖
寂は余伎蜂を苦を出る　夕
蓮りても唖ともの山る斎　、
女嬌ひの御山こんなる　崖
雑兵ら蛭ア脚のふてのき　夕
賤暮の日も詠む門出　崖
以ね草も深さ外　杜若の　夕
釜の外八九る画も　崖
斎緒もお国子持の坊主　夕
流て見れは仲人てる法し　崖
面はの能も蘇子表一歌まは代民　夕
月の刻さも隔うらさきたれ　崖
秋ね涼も近くまし気なる鶴の　夕
みをもと隣子雑木茂りける　崖
ふ連着を麻はいつなか帯嫌ひ　夕
無常つくひの味温泉むすはれ　崖
東行の家もなむ子吹ゐる汁　夕
行く秋虎る演乃三ヶ月　崖
後のうみんでもめぐさと以佛達　夕
むかくかしくて学の長　崖
夕日中一かくまつに帰り性　以兄
おりくと新は松を切る　字旦
畑打の焼の中うまを寸して　以兄
待むさるまなかし添乗　旦
跡はと桜子朱打て日る月　以兄

案山子の蓑に露のこほるゝ 旦
魚網に出しも啼らぬ夕紅葉 兄
月に若衆なき江の背條 旦
江戸土産の名残惜の沙生稲 兄
月のに晩くるゝに細行く 旦
待兼て疱瘡のきく湯を済 兄
汗ふく顔に驚かるゝ 旦
古皆を捨て眺る荻の月 兄
賞し庵の画を惜てあり 旦
香袖の雪見の孔隙に風邪引て 兄
古手仲間のりんゐるときゝて 旦
出奔大人の医師を嫁に 兄
宮い鍼をさすりに罷る 旦
遊びんときに月日に浮き汲手比 兄
蝉の塚中て出来き石垣 旦
茶碓も先を出て蝸の声 兄
壺伝ふるとハふりぬ村雨 旦
見つめり風を包みせる給仕盃 兄
猿は祝の米をくれける 旦
古仏を指さ浮宮の筑波山 兄
薪をかさねて垂ゝく焼 旦
一代の運を悟吉は寝覚 兄
いくら掛ても米のたはる 旦
小半年かけて出来た土境の月 兄
誰に文かる出墓所も 旦
子を捨し咄宵の軽業尼 兄
古屋の柱を分くめかるゝ 旦
京との俤のみ桂も女旅 兄
犬の大とも茶運ぶ仲 旦
出見て剃髪の妻さわれて 兄
水の名さふ夜の遊ひする 旦

見のくく延白き空は春の山 浮善
枸杞つむ筑紫も古し盃臺 丁和
菊遠き朱焼窯の風に吹て 由興
めづらしき月の蔦婦ますす 来木

打るゝ盗人を守宮もさわぐ　知

儒者は椎の汁りてわりすゝ　菫

川上の清ミ端かけ侍よみ出て　木

経文は何るまへ物いふなよしも　埜

毎日もこふ鳥嶽に住ぬ苦行　菩

ちよつと往て起まぬ一四の日数か　知

ころうんをあまりてまだ公家の封　埜

姥かゝ居て妄理を打かけに　木

しつめよりて四季にかゝる肉　知

鴨上は霙は喰れけり　菩

もちほしき神分の路の絶麿　木

と収ね塩りし責てける魚　埜

ちるゝる数ものたれ有人の足　菩

練艶の身てはもふ清羽鳥　知

織る丹の嵐ちのちも庭鳴　埜

神主の子もよつてるぬ名だ　木

五言名飯ては見ともにい一ね京　知

轍くる楊枝とりおく　菫

肩上の疵のかゝる纏綿　木

降やむ雲のすゝをかけ替る　埜

杏の村出さ但かく寸ぞ風蝉　菩

玄ちさとはれ橘ぶ炎暑　知

穀生の種ひを無理に談ぬる　埜

小舍のゝ来て手紙来ふ　木

椎の木にのほれ月の晴けめ　知

生ゆく紫で栗の毬出るやく　菩

味辛ゝきくれ出代る寺男　木

櫂子かけらふ舟のちひさき　埜

出通りの園は小路も涼ぞて　菩

幾日雲りは世に稀な横風呂　知

あるは餌をとるに下りき敷の虫　埜

底本にありつき菫たんぽぽ　木

本宗の下ちる銀の櫻られ　鬼椎

見渡せ々々ば霞消行　花了

蝶まり浮船に花やく　青我

賑はしき料理屋の庭　雄

桜の葉に出て居る月をさし延　了

さらさらとたまる稲の畑干　我

無拍子に出る彼岸の打鉦　雄

気にかかる種のとも君になる　了

ちよやさしき筆法なし去年　我

四条河原に花の出茶屋　雄

軒下に経の聲蛉切かけし　了

猿のところは光る上法　我

月の宿遍し岩を猿に見て　雄

淡つく風も千石のかへる舟　了

言はれる釜へ行て建る杉櫻　我

笹の葉をかけられるなり　雄

祖父嫁のよからぬ[illegible]の店開き　了

積りくる雛はなほ[illegible]　我

ちよとの間も[illegible]　雄

遊経[illegible]種本屋　了

祇園会の[illegible]川原　我

故郷の枝[illegible]　雄

南の社鴨居[illegible]室の口　了

噂まで[illegible]嘘[illegible]　我

大勢[illegible]笑ひ元[illegible]無　雄

夢[illegible]極の一絃　了

旅[illegible]若盛[illegible]湯　我

糸瓜の[illegible]月　雄

帰屋の庭下[illegible]　了

震[illegible]　我

ちよんと[illegible]　雄

志[illegible]汗の[illegible]　了

嶺[illegible]　我

白[illegible]地言　雄

群集[illegible]　了

水[illegible]東風[illegible]　我

降[illegible]　古春

[illegible]雀[illegible]　伯儀

生鯛のやくにたゝぬ暑哉　禾木
咄しにやさしき所の寄声　素
車屋の軒にさし入宵の月　遠
此の蝉もいそがしく啼　木
餅つき極の字もあらく衝なき　素
古新衾て銘代のさし　遠
過様に参てなんどの部屋する　木
夢雑風まつ人と宮様の菓子　素
伊勢参涼しく風の吹出て
秋のなにくれきしのあかる月
口まてのうき女の古さ乾
四ツめ千ヨめを嫌ふ縁借
天蓋へ傘の柄りのとしゆすり
荘の夢借千かよふ寝
の狙て当むべく思つゝ
鳴そゝの中る闇内蔵に
看板に小結合ある茶店
非人の様なる祝義よ祝義

さくらと湯かけ出来のよき　木
あ小水に際のとられる旅立ち　素
聖殿の笑みを隠るゝ宮の姫　遠
俄に気をとられる夕暮　木
晩鐘を得てなる鞍仲間　素
妻まつ船の小帆だてらし　遠
大坂の便りを志れて一安堵　木
水の行くをとめる滞の結　素
盃ある月に思を荒して　遠
くみも形も見きぬさくらかり　木
芭の種れりけて風も雨には流　素
楢木打ちぬんひとつなる　遠
鞘にある刀おさへてまつり　木
近在まかりありとかゝも　素
啼うくて山根の中もなの雛子　遠
きのふの笑いかくてちる風　木
在郷にゝ旅を乞かる牡丹哉　得善

手近くて菜ハきらせぬ葉の玉　完伍
吹つめするとも薫る蔭風　京池
掛はこ盃はなおもかけ静て　流芝
閑はさく雨組桜の新　伍
椎茸のかさく白ひす空の月　池
刷ぬ小陵香の餅をあまする　芝
いつまても古や角力の下ゝ画　伍
萩ね松こし紅解ゆふ高る　池
茶も世ぬ油うつしを初音茎　芝
料理の膚を滝く楼出むか　伍
追香まつらひぬるか村の若　池
一くん陣の赤くれさけしき　芝
ふたく八幡の花桜の法池　伍
契ほ等ても花まのゝ嫁　池
貸本の少う筆の込めるし　芝
まくときて落る皿の飯増　伍
起る月動進こそ小判て　池
めく重ねゝも八むかしね後　芝

そりと幕湯家の古紙すう　伍
二料宣合よのける物干　池
曲達て後と片し雪ある嗜　芝
こゝしの臭の掛けぬ篠子　伍
ちめおかて稜串はめて流を　池
噺の出る日やきつと宮さ　芝
念よ念の形と堂の春まさ　伍
直往よいつもう然旅飴　池
きり流教まて小衣峰通　芝
本字よみの心て月の片かる　伍
剃刀も済てちはさく茶と俳　池
寺の伎の後はいつもわね　芝
まくよきも金龍踊せる指雪篋　伍
眠らうて薦のこのる燃鑑　池
お花れる相偏嵩羅よ忍て付　芝
倦あ時くつけてとかた秘き　伍
山寺の春る床も起よ所の花　池
黒きのね付し芝の蟻絡　芝

路の先へ峠まで行る清水かな　下知
押行ふ召人台に晴うる霜　壮賞
居並ん印に燐のまを好そ　内起
あつく八撞まで萬代ん袋　知
咲おくる月の積め雨も過　賞
濱のちゝのくハ未山に流てき　起
居酒は世をは淵窗れの裏に去り　知
寺の後渋柿の召した老をまで世ね　賞
一年をたち切ねと積もる京の葉　起
綸の見物のふぬ洗さ学へ行る　知
空耕ふ州に摸なめさし出そ　賞
名連らしん波くる佐く　起
入船もる夜ばよるの川岸仍　知
四五人茶は秋を出す宣　賞
御袋の箱に行ふ袍をえかゝて　起
夜の噂なさぬ子まとる　知
月もむに鍬のかくつうき迄　賞
川せかきりに柿鱗出かける　起
日雇の口もさし行ふ維時分　知
雪をとく和尚も知らぬ合点哉　賞
産前八月のひまを知ねらく　起
宵に起きてし掛ける手古　知
きしくとも茶屋の手のつ逢　賞
買ハ買ざりてねせぬも鮎　起
後ろに見付て茶陀の拶をみけ　知
氣つかふ修も鉄への採る炭　賞
月花の志を生結雪の坂雪諸　起
丸ゞ菜を汲も家くなる　知
きぬしき学のもいゝ年棲垣　賞
折ふし手て置する盥　起
諸國に飛ふ奉のいのり　知
名卦の粒ひの品の招の魚　賞
町中も酒のかゝんの菰わき　起
春のくやう和川売をかく　知
来る人の違ハ亡との時破て　賞

萩葉のちるをとりて春風　起
山寺も清濁さらになくかな　東鼎
古葉隠れに来る人稀　禾木
森所も静まの間に出けて　鼎
古に上をかいつまみ歩く　木
辻井戸の釣瓶の日は宵の月　鼎
かへる子嘩き蛙啼きも　木
蓮の実の底成る穂をおとる道　鼎
瘧のくちまちかし袞　木
あわれさ時々恋に婿のあ　鼎
吹萩ひなの人のとの衣　木
秋の宮を若く津の面気なり　鼎
室く清く言ふ住まる帆遊　木
月影に消えかくれ地に周　鼎
やくちき元に大の落ち杖　木
手作りの擬露袋を高情けに　鼎
納黄な郡屋かり雑談　木
伊勢あたりおちおちまいまさえ　鼎
知らぬ嫁のよ喜てや葬に　木
伐て来ても紅葉ちるや桂　禾木
親の夢はり春に来る朝風　東鼎
生きる時半月なきの渓　木
呼びさめて囃子拾ひの　鼎
本体の息のひとしき宵の春　木
くろきひ程はなくらる頼相　鼎
律儀くらしき男さの荒めく　木
辛抱つよく足長石臼　鼎
清郎の出居かなんとく　木
風呂はれるとき先く様にし　鼎
松坂のござん今夢の室かに　木
屋敷庇そけめ漆中銘　鼎
事始時分の月の出寒之　木
唯茂手出るのうちの嘆き解　鼎
せるる息はつきせぬ海の聲　木

鶏の雛さかりて桑の所まし　晁
一本の杉子植の桁きれ朽　木
軽く見る宵ま月る呼まえ　晁
藤の棚の中えを染ね吹出り　祖文
おこり静まる夜の一つ面　茶古
間もなく花れる家の直捨て　文
書ハ度ねと古ゐ所の音　古
名のなく花の春なるの様き　文
稲干て何る様さんの木　古
御遷宮の話も真ちの無きも　文
遅咲の花居を往くせける　古
小屋数一廉ひまえる人通り　文
みそれ津てまし数の手水桶　古
圃の状なせて眠る寺の鐘　文
増のよゐの中おゆの有ちか　古
深くも花若地のかゝる月の泣　文
茸志の出る寺の山うち　古
京の水出つまたなくわか、　文
晦か降り出床上なるおく　古
猿曳もほそりの出す早暮か　文
よくゝれる田の田盛ちなきし　古
暖のなくひのつくも秋て志れる　、
家中の僕て粉炭の長持　文
茶室に月並の念仏講　古
雷やんて雨もよろしく　文
思ふ粉の本来の膳の座　古
雛のゝの口上もさかる　文
嫁る居を焼しまる夜まて山　古
思ふ工夫のけて拿の毒　文
耻の薄の縁の雲ひも又つみ　古
盆の五てる娘の出きける　文
月代のなくて雲を吹きし　古
遅れさ居の下りる川下　文
茶換ともと寺参りのおほされ　古
旅ハ居て居て吹くと吹せる　文

手かれのミゆ蚕業の餘り絶　古
舟をはなれた藪へかゝる宿　文
志やうりと雪に撲む舩のも　古
蛭の吸ふ血て仕舞ふなりけり　文
庵室を出て又花の萩の子に　梅二
引てゝ諸の白ふせる雁畑　何庵
たら〳〵と普請の果ぬ家建て　精菟
君寄く買さくあし楽焼　二
夕月に暈ある気の精進　菟
阿弥陀の崖の柳芽出ぬ　庵
盆休ミきとへて白を並へ盃　二
かられく笠ぬれを引さく　菟
香名ハ印出今つよ縁とおめされ　庵
陰わらおく露の石竹　二
め紺のけハ涼しさう銀の肉　菟
法堂の座枕かえて連衿　庵
飛ゝつきゝ小座行る月の比　二
菊と縁の蕾の日かいり　庵
各やうハ名衛乱れ秋起り　菟
は名ハ宇緒な切住居　二
掃くある駒地子出の数ちうけ　庵
阿ゝの唐雀ハ遥はけうして　菟
車留の日傘て日ゟ除する　二
弓いり庭の幕に数出ぬ　庵
隠してし勤めはけくと涌出て　菟
労道森入てハやくしい学　二
かし暮てのか色ろの猿の作物　庵
角を曲れた壊りしつまる　菟
北ある程をれて国ふふうゝ繋　二
きかく玉子をさうす寄入　庵
寺社田の凍りの氷を痒ゐて　菟
画を出てばをあれ世話居　二
くりゝと春く殊勝の三本ゟ月　庵
ちうそめうちに実める暮焼子　菟
重陽の作礼ハ果く備に色　二

祢宜に成ても月のゑを咏
呑口のいつも静なる玉孫
一里の境まに出て出る筋　二
宿の木に出初て行る西雲
夕日より翌日はたゝしる暖

咲かる花見ハ大名紀松患ば　丁
のゑ色の名しをまける咏ふ　勝
二歳ふ上けるか菜を積かけて
床し愛を向かいも傘
昼の月低く有るかは気も付けて
渡さ夜乃鳴しさた鶯
坊主の一ねまさかりとへ入るて
家塗る日に六曜も撰る
織物のおさ侍て彦ハ姪てあり
川から此やう貝法に日伸家
ひきく法ある座殆ねまかてたて
耕地こしまも白ふ座荒

月わきいろての続し沸第
殊君ま女行て面き経のの
勝味もお若くつまむ出水し
何つき足に神の燈火
まうし植ぬむき所ハかくひて
金銀ますしまる海気乃骨
京根う延しき命ぬ程凪遊し
格子に傍への入ず笄用　加
涯麻もぬ冬く四十に近くある　研
梯もひとつハ送る名るに　加
湯のおこの名かやめ汁青海　研
お富主に百合もたち山肉　加
大縁房の下法またさまる旬と　研
意久の連乃心くの櫻ハぬ　加
虫花もを低い所へ鶏鳴し　研
芦ぬ君まりし垣の夕月　加
餅ま成る稲のいゑま前く　研
若ようよ僧下夕の水跡　加

梳打も揃て娘の送りする　翫
ちならしきよ此のつきさく　和
竹釘を削りしめる升の中　翫
生ぬるも売と去ける絵書　和
見直せ見直お礼恋の奥深き　翫
肌にたびたび惜まるる春　和
面影は嫁庵に尾花茂る　香蒲
蕣のうへに瓜の甘干　香木
格子の詰侯たち飲る逃て　蒲
惜まれ果をおのしろさく　木
月のよい夜へ出せる茶盆　蒲
孫ならく班那帰りも　木
悪坊て物集め負へ倒るる　蒲
今度の風呂は間違ふさく　木
錦の下襟に何やらさる事ハ　蒲
茶の袖すして現体進て出る　木
古船の浜に果ぬ僕ぶち　蒲
住ろうる出て見て了ふ船の出　木
すべなうきり月出もひ松原　蒲
赤富業の志み了絹ぬき　木
彩なくに姿で出る太刀　蒲
狂斉も書わる院経を書　木
頂も漱をかへし古の雲　蒲
帰よ世帰りゆる路家　木
静の笑にあるの看帰て　、
百度のさし法風をちらる　蒲
格子らう嘆之さうる收後　木
うきうの先かり多い年公　蒲
古市や香朝の方説を学なり　木
ぬるまぶえる蝿のうるはしき　蒲
二花三花樗をしめる竹の皮　木
玉縄の韃を仕舞てや　蒲
亀遣の外に降出るる秋雨　木
印を裏ふ付る役場君　蒲
月日をて何の花の開も言　木

一葉二葉と落る菊相　蒲
さゞめくの出水も町の中ながき　木
堂の代をも上しぬりける　蒲
小仕う切かてきこる塩俵　木
空りみてゝも眺る空犬　蒲
清涼殿の執化付あるこころ　木
まつの旅宿てゆるむ番代　蒲
西雲の前は来やかり細　青我
安の千代ゑの番き堰越　鬼雄
藤りこ壷子一度い宿おて　茄了
さゞめく船の借位もてまる　我
木ゑくかそ客の持は十五夜ふ　雄
昨夜咲今宵荻あり上風　了
はかなさても宿でも秋の露さと　我
色に沈みて名も筆　雄
賤は娘みの橋の姉を待世並　了
とかくの袖のさうる生捨　我
方丈の本わかりの園かまけ特事　雄
雀の来るくらくまて御亮　了
藍瓶の蓋を休める冬の月　我
二百二十日の今も静なり　雄
酔醺滞の涼しさもとめて谷辺　了
下駄と草履をぬぎて庭　我
大小を境内の中にこ置つせ　雄
妻のかけぬくれ旅籠の門　了
雑市を送りに来るゝ宵なれて　我
赤子抱へて明る格子戸　雄
遊妹をけて比ゐる人も業式　了
三味線習ふ年らのなくても　我
此ごとの人もりて以ゐ観　雄
麦稼に似る風情あるや　了
桔梗かえ木より咲て葉の花　我
隣はまうせぬ絵の絵評　雄
近いころ古河の城下に居構て　了
慕ふ妹の友誘る人をもかね　我

月更て千歳々々のあちらこちと　雄
霧はらふゆる替鞍の声　了
住居を佗の後の文はなく　我
藁は此の秋は切り放安　雄
金堂の運は今は遠に尾根り　了
数はこしめて仕舞小豆鈍　我
行燈を押おろれる今宵の篝　雄
萬歳まいる法くれ出まつまゐり　筆
霜によるめでた尽くせ表　丁知
芦より戻ると庭かし畑　立和
酒気の華やその知る浮さして　知
風のあさくよる面のまね縁　和
吹るさ程は過て焼もかへる月　知
雲翁来て居る茂はやとなく　和
婦鮮は年貢納の御出して　知
一境はそき鯖の焼さかへ　和
池城はまへる手の鐘を鳴　知
手附換してある買手の　和
十人もさを揃のは儲諸　知
春ぶらぶら泣の笛は水　和
風呂焼けは八拾五兵衛も茶の月　知
芦捌もあらいふ萩のさくら　和
はころへうちくす手もとしずれ　知
中の付紙へは春なつのまとに　和
来衛着をゆふくるとの名　知
楽を出て湖根のきこねがの子　和
すゝくさるもの見て黄ぺうの往来　知
むかうの山も余し船出ゆく波　和
仕舞に坪を洗ふ女房　知
市物おほけし肩をふる　和
飛ぶあく奥の子供の焼もいそぎ　知
持備ても一夜は抹む　和
山家は八つは米は松明　知
おとをききす閑の居帰　和
茶を舗の方は流泉の枝に　和

上﨟船の御船もひらんて　雪
喧噪の空に飛脚急つかまる　峠
編笠着て七ツ下りに宿月をとほし　萬
うつむきて手をとる嫁も嫁候　仍
極先に亦あくしらぬ錦の菊　仙
一種利いて東坐てのみに　蕉
物過ぎの後は忘れき皆守る　讃
身を寄りのもとおりてる後もなき　以
おひとを見捨て見よくのむかあり　支
蔵に重ねた出地のとかれかわり　遠
牡丹から先に送るや吉野船　青萱
議りし定ちる宿は入豆　晴月
晴かる寺の刻音に霧かかる　萱
笠尼の夜の道ふかまるみ　月
鉢頭巾も流る貢の月ゆへ　萱
先かく先へ参りて暗く寒　月
末枯れの朝も消し田や畑　萱

木枯の寒風に公家の絵の花　月
紙衣に身をなす志可な鶴の清　萱
世を見ぬ宵の宵寝の紙帳　月
占をよんで嘆く極楽先　萱
爺さまも隠居の彩しく　月
田舎は浮寄る無縁の月　萱
釜の湯も沸いて露にからす　月
北春秋のさとる猫かすつまぬ　萱
六人衆にほく物語より　月
吹く風で見る人も離れ宇宙の肌　萱
との錦繍も綻の未てみる　月
狼ら出会みそて熱き夜　、
其の秋までちるも歌方　萱
石村の行き暮て流雲見　月
きくりかかる忘れぬ伊豆の湯泉　萱
物つけて乾せんとりて夜の雨　月
又帰より毒みのお経　萱
梅いかに和から新の月めぐそ　月

三穀級も首さへ次嵯に　益

倹約も新りや出て勝りあり　内

安囲を初くゝ言ひせつ物も成　益

腰曲張ゝ月の出る迄祓ゝれ　内

勝くゆれのゝ手くり手成　益

地震からして音れわく蝶の咲　内

薄待ちて貸泣くんも蝶も　益

前ちゝ汲来てゝ茶の癒病　内

白うして玉續くゝ暖う　益

出用とね用を出べして定て　内

古和出て言は安の香寺ら　益

初月日毎屋店の日へる吉跡　葉存

兄合をとり膳の宿合ゐ話屑　相堂

雅画の順ゝ小笑路ゝ花嗅て　舎甲

まずもとなく姫も縫門の出ね　丹

早魃まで宮つ薪ゐる好子女縈　堂

嵯ひらにおうし成く居　舗甲

本地の寒力に染女入て出る　丹

一姉つゝ手をくゝき柱良　堂

択も酒く舩味みけて猿合せ　甲

娘め喜くゝ三命め出ぶ　丹

嫁しぶ小舎の人数も出来く　堂

数子兎媚の影も風りさん　甲

志つゝと客雪見え夜の月　丹

望ゝ若菜の粉みけゝ留来　堂

新緒の出月花と見める薩色　甲

実性らしうさける胴乱　丹

絵の頃の出来て暇出来　堂

籬子常のおげ跡ちゝへく　甲

ところでも定焼壊り咲悲く　丹

待ちまの一里へむし穏し　堂

勤番のうちへ宴も来つかり　甲

それと屏風を囲ひ食絵　丹

都市のおうに如殺をも世ぶ出　堂

過ぐ余り結のつくろひ　甲

たゝくと四面の長れ浄土宗　木
撫子揺所ハ見へておねい　堂
穴俸と面子当ほし橋の夜り　羽
きらりと月の飛る雁の木　木
取よう占ト松の涼濡む嫁よるら　堂
居酒う濡のちらと秋の雲　羽
孫窓子貸付金のなくり　木
雨御ほうたるゝ塩辛　堂
提灯の幅子のゆるく本通り　羽
素仲のむのるき隣ほし　木
夜かる桜餅の水っぽく　堂
花見のひらの種き場あ　羽
船や老骨のわくの人数逸　閑
呑由やうふかく吹場家の家来　我
縫の手に并ふ菜摘の蓋て　閑
出向く風の肩を吹越へ　我
舟よりも筏の身はかりやき　閑
寄耕の衣子染しきらい　我
泰吉も窓子焚女人坐　閑
聲をひく宿の象物　我
香程の茉莉まきるぬこ　閑
襟子掛る袋みうまきな　我
人寄といきぬと去れと留　閑
照るほ丹ハ面なりに家　我
けさくと気ありて月見て　閑
ぶらの上に渡るいかもし　我
御急須のかゝ猪牙まつ　閑
白ぬくるますほ経は向　我
窓先いのの本の出ぬ数あ　閑
妻ハ掃除の庵く素庵　我
てるま濡の子供の立すり　、
くらりと出る七重ぬ塔　閑
墨きゝ白ぬ段成ねいての基　我
鼈（スッポン）料るまえいゝ香き　閑
素寄のゆるきてには生涯　我

大俵出来て郷のまつりかな　渕

出る秋の鐘もたゝる物思ひ　我

紙の衾にきゆる埋み火　渕

むつくと起しの出れ古き寺　我

そよくる神の発ゑて出る　渕

破風にはたそかれ月の隅り　我

白露つる扉く焼味の邑　渕

飢寒を苦にせぬ子共の丸裸　我

波うちよせける様は満ちく　渕

釜一口命にかけて大のかり　我

のそりく吹く出行三月　渕

むろのり言くも行ぬ山つゞき　我

芭蕉越しに聲の新さは　渕

雑歌風

浜も冴き物のけはひせ風の音　西埜

月きくらしては桃花咲　丁知

麦にもる畑の葉に子をすくむりて　埜

舟に行て我は門は露なれ　知

来るゝ夜の人の出は月のさゝ　埜

去らしもえぬ恋ひぬる　知

高ひも傳の家は居るさき　埜

傳のさ園に出ある家業情　知

掛物を浅緑のすくまちかせ　埜

縫金にて八ちおくさも落　知

都ふる清水は和て飲みぬ　埜

猫は常にさまれぬ奉公　知

入月を限りに常よふ稽古留　埜

一株きの折へらは萩　知

水にするに菊の咲き競して　埜

状の使いとりは迎まり　知

住家に素出は生きもの径　埜

蓋まちはとのつゝの屋雪水　知

給米の海苦いろにのて書され　、

絵の古例もよそ坂かり叫ふ　埜

大かるくと納めに残る花煙にて　知

身の偉ふる雲出家は雨　埜

紙屑をとゝるも樣の通ひ口　知
手燭を吹てたのむ庭下　楚
おのゝハ見ねと法師か草鞋ふみ　知
暮しんみりと茶菓すゝ鐘　楚
汁の実に出て若いひきぬき　知
わらハ相むし鮮まうをつる　楚
うそ寒く嘘に泣くみ客角の影　知
おぬしに恋のとかれてハ帰　楚
花くゝり粟もみつけて十はかり　知

◆

身を洗ふ膝をさゝせて紫　楚
跡ハ[illegible]棚い女子の宮通ひて　知
まうゝる主ハ先[illegible]の汐時　楚
むかしの扇一ちやうも覚に借り　知
鶴老たひけて[illegible]も[illegible]ふる　楚

雜歌　雲

さんくまいてやゆを露の雲　丁知
庵のふきんろみの葉揉る　得芸
路[illegible]の芸麦撰ハとへの来て　小柯
おしぬ柳みゆらんの井戸端　由楚
よね照て婚礼も時世の月の後　芸
てらは送てハ渡しらぬ世の浪　知
察方ハ志乃る夜と薬やさし　楚
我よりハ待る文字の出ぬうち　柯
本ひとる家も虫さゑ通て　知
番付て並く川岸の材木　芸
枝枯米を預けてなまに[illegible]す　柯
為立せのうちやる小祠　楚
石整もなくて[illegible]付た秋の杉　芸
揺をのこしもちひまく　知
読ひ人もわれよりハ汲の月　楚
屏風を立て恋のくゝり壁　柯
咲も花咲と[illegible]ひの[illegible]　知
酒の淀に田畑まかせて　芸
朝志ある花をと家くくる袂　柯
飲みハ花のる仙香[illegible]木ささく　楚
出る悪癖をおさへ[illegible]れ[illegible]　芸

秋風ハ借ものて志やまふ針箱　和
新植に嵐のつきし梅宮の内　楚
折々遠に池ゆりさし　杉
世話やきへ舒かもむら見舞か帳　和
ト心家来りつゝその地路　甚
結ふ布と衣の出合ふ小倉織　杉
あゝいへて旅へのうり待　楚
広し近く水木かゝる茶の内　甚
変るしてハハ川板乃あき　和
拵て来し借子料理も形むむ鮭　楚
以ハ重薫まてのつる留られ　杉
かいつゝ見ハね大勝にハ香も遠　和
右へ為てき梅る手焙り　甚
むの折ゐ例に一ゐすねりれて　杉
除寒くつる細屋りの宋　楚
文月やゝ為てのつる唐弦猿　風納
箒結ぶ宿のいやゝさるゝらろ　梶堂
落胡蝶孫を古茶に浸みて　晨支
縁んやうなわと餅喰の妻也　調
倒亡木の枝茶ハ浦の香もなく　堂
白の短い手人生ぬ似手いふ　支
時摘て語るもいたむ機の稜　調
風牡雀の飛ふ吹まわく　堂
ハ本挑をて守らて秘免むす　支
捨くよりし始めり往迄　調
あまぬの埋き堀りを小唄　堂
去年見しらの甲斐ヶ根の月　支
鈸手は八百秦の紫のかけ慕て　調
水の音のうへの来むめる　堂
積積も慕の一日に忌ん果　支
盲もとあらる手とく足とり　調
気結つかぬ人まで来てちら染む　堂
見くくよるも白のこらんと留代　支
香遣ひハ内通ひの聖そって　調
去階子うら踏込る恵　堂

門並に飯宮中て静かし　支
見かうしろき上手の樺杉　朗
小おかし松原の咲かゝる在　雀
たそ雲かゝる障子らくの秋　支
青鷺なる薮鶺なる遠ざかる　朗
芭蕉は地子なきのうなかり　雀
暖簾の掛鶏ありて衛気たけ　支
挑灯消えて子を眠らせん　朗
騒ぎも無くやのうぬ去の声　雀
雲に在る人き箕の折りもの妃　支
出は場の寺ハ地蔵堂の尺念　朗
手出しのさ女寺の戴硯　雀
枝川のふところからの屋形状　支
巻わくと桶の抜ける袋しぬ秋　朗
めうて在の浮けての果ハ世の人　雀
隣のまえみすて嘶の空　支
霞の玉簾て見るや花の上　風舟

春の月の杉むもく夏旦　松
綿子糯の子とて遠ざかる　外
灰のやうなる黒き花咲く　松
山まで人仕舞ふて涼しさし　外
啼のつくとも在る花の秋　松
伊勢屋の人手のまいし乳母　外
悪て淀る桶井口　松
去りし在鶏仮に仕切て済みまえ　外
投出し状に耕て候状　松
急に来る面をいつてもゆかし　外
垣ハ霧を窺ひ進まう　松
月毎に鬼ひし皿の麻も捨し　外
箒にて八箱ハ萩乃穂　松
垂髪の掛ける子を乗て来つ　外
古への坊を呼寧ぬ以ふ　松
そうりやその逢ひ秋の暮　外
雑を仕出して縁に来る　松
高つゝと寝し水に帰雉　、

つ待仲番の清落さなりける　外
まやの風散さかへとりて心苦しき　松
近きやうに婦帰し然　外
ころものえ染落衣の壺所　松
此室はなれ八直下寺市　外
古き巣の鷲の子を窺はれし　松
猪に小帳を示断ちかきぬ　外
下過世に芸のちかき御座敷　松
伴架の役を造化なく吟　外
荒る法の武士前身の秋　松
ふつつかと磯饒満法わく　外
取のよみ申す露かた野の雉　松
居君の操呼羅法物好　外
誰客の盆入を来る舞の末　松
土塊か交ふ立ふ蛎　外
掃除まで東海道は法等　松
拵して羅ふ緩の笠立　外

ひきうれる千宗旦の青花亮　向遠
菊れさやく水藻の水音　文昇
角力とり帰り雑場と猶ひて　禾本
掃除済子に附ける灰吹　遠
若勢なんかと夜は言葉にけれは待　昇
筆箇のいろいろの大昇り　本
杉山に出て積のきらきらと　遠
火の侍強若もいさ気き取り　昇
標（ハテ）よりみの持さる文明深　本
見るひとまきめぐる声も法経金（アテカイ）　遠
坂塀て里の任所る済済されん　昇
佳ひ出たりきさん芽花たるまま　本
星も待ちてぬれさかて結ぶ所で　遠
いたくとる八は多く吹く河　昇
葬礼の施主も下思案　本
梅坂さての青水のいろいろ　遠
冥こんと着さくり走の面　昇
蓍て嫁のさきはり流す面　本

見送らぬ人て勝時の義勢　遠
はしき姿すつる衣にむく噂　昇
庖丁も手習置香の流意下　木
財布出ても知らる尼年　遠
生うれむ所にえ所の麻に酒もむ　昇
大雷耳さん儀苦る　木
ちゞうき火串そとおも山の橋　遠
旅の足所しやら所で轍き処　昇
別れしは誉あきらるに妻　木
作り出世婦の茶風なびてる　遠
居風呂の湯殿で揚く霞の有　昇
かん嫁く言衣さつれさせ峰　木
針立のみゃう胴繊をみつの野　遠
鎌倉ヘ付合す丁度よい温泉　昇
経椀の表にかくらせ仕舞せて　木
野合ゝのしらいさも胴ぐゝさ　遠
八重一重堤飛乱れもさかり　昇
伏見竹田へ至るの陰巻　木

それは不雑本を取合せ添　双烏
合せて座敷あそれこの風　ふ綾
御宮に過雪はちらつて重尽て　烏
明日自屋は札やて渡りけり　綾
町方も清茶を月の夜ぞみみ　烏
咲まれ扇も捨て迫ぬ蝶　綾
毛見家に太刀は降る雁状の毒　烏
海にもいと静で断ッ　綾
打割てきみはうとうき物おもひ　烏
ゑうも蝋絹る藪尻の家　綾
鉢植の下蹄るまゝつぐ夏子　烏
ちらし絵に赤坂川の水雪　綾
うら絵帯と月雪ゝうて出ゝ違　烏
丁度飛かうれのつる新緑　綾
海当子歩る嫖叔父の嫡　鴬
聖堂の重ゝ思ひ諸射ぐ室　我
祝うきもて鉾に施し　朗

人のあてのくもまくもそえて小家和　浅

蜂の巣を焼とて廻の人たかり　ヽ

またものさんかゝる諸禮桶　鳥

同じ子をえらみの解せぬ女共石　浅

かくこの思ひれ綿を裂居　鳥

おもかけと面ゝ別れ行根なし雲　浅

枯野のなり萩のわかれ葉　鳥

想井戸納瓶の帰りなき去る劒　浅

鐘遠く竹もの辻鉄あ　鳥

京生れなれはやすくのこ旦り　浅

嘆きこゝまる積の語り承　鳥

風わたる月も七日は細照り　浅

かひなしに光る鍬の柄　鳥

手細工猿や屋おり渡り出　浅

眼の高きもとで四九日で施しそ　鳥

遠ぼけき沙弥の時は捨たる数　浅

こゝおれて龍然子遅きよふ　鳥

也の枝ゆくと宗の樹に鳴れ　浅

此頃ならぬ見へて鳥富代　鳥

[illegible]明するとゆかりの殿就　風朗

出船を送る芽柳の露　春宝

ませもさ暮の語る甚才て　風丹

本家の在を告も念ひ　朗

若柏袖をちるとるにやむ村時雨　宝

衛は網の進物に来り　丹

子煩の湯風松原のゆに係るて　朗

つまも今はせぬ恋のよりは法　宝

またみもを共に仰てな恋　丹

嵐しくはの背盤の桜　朗

鎗をなれと尚生の月のかゝ　宝

念佛をよく山へのしかゝ来る　丹

小袋羽ありの高識の埋深　朗

渡出は苦る嫐叔父の身　宝

霊堂の重へ退れ猿射るを　丹

祝からで饌は施し　朗

人形の[illegible]桜时　宝

地[illegible]若[illegible]広路　永

[illegible]一[illegible]　欽哉

枝[illegible]　可大

海の[illegible]　哉

[illegible]　大

八时八月の[illegible]　哉

踊て[illegible]地[illegible]　大

[illegible]　哉

[illegible]　大

[illegible]　哉

[illegible]　大

[illegible]　哉

[illegible]月　大

[illegible]　哉

[illegible]　大

人迄の[illegible]　哉

如[illegible]　大

[illegible]伸[illegible]　哉

[illegible]　大

[illegible]和　、

[illegible]　哉

舟岡の[illegible]　大

[illegible]　哉

[illegible]　大

[illegible]裂　哉

[illegible]　大

[illegible]　哉

[illegible]春　大

[illegible]　哉

水鉢の水[illegible]　大

[illegible]菊　哉

[illegible]　大

[illegible]判　哉

迷子[illegible]　大

大釜は湯もちらつく居風呂　哉

ゆうしよれた月に見ゆる居の空　木

畑一枚藷つける坊子　哉

宵闇は仕まふ灯の細き孔　禾木

夷いそのうつ付しる水青　我

引越しの花に筆の薫けそ　木

白うぬ一夕酔ふてころく　我

八月に蝕てる寒い月の色　木

本の宿陰其の中稲荷祭　我

行ちこちて吹きせて浪彼岸飯　木

残芥ゐのゝ骨折らひあれ　我

悟いそのものにて去子老さ義　木

若れ系の袖とトこ流馬場　我

さらりと国は霙の降まり　木

のり積て蛇く汁のうちや炊　我

朋の首をかくさる月の出船　木

そろそろのきましうとる編笠　我

ありらうて吹き待る四十雀　木

不二も筑波も晴てめでたの　我

和風居の下襟らすむめの付　木

わらべゆらく藪入の杖　我

市の雛いらくかへきされこけて　、

梧をかり以ふ五位の祚主　木

ゆうらへやう捨ても宿る萱入　我

数寄は午の稀なまひろ戸　木

侍宗の気にもむらやに泊退　我

裏籠をゝさかしへ加ゆ　木

小屋掛のいけて餞に麻なり　我

暖簾二しる法論をかく　木

短冊は蓑も合羽も須退で　我

ゆうつ阿るものろさら牛　木

晩鐘の鳴らう月の源かくら　我

秋の土用に水をかりふく　木

雷盃子ら肴よ乾庫を退　我

下糞にたらく惣木左　木

一軒への[illegible]も[illegible]やみ　我
[illegible]点まう[illegible]　木
降通しさうへ[illegible]の雨　我
[illegible]まてさき[illegible]の[illegible]　木

眺て減しぬ[illegible]杜若　水卉
咲かかり来る所のうら[illegible]　清楽
雑鈔（ショウサ）の[illegible]編の[illegible]　来池
又[illegible]かゝる牛の[illegible]　三岳
白[illegible]向の[illegible]月[illegible]　楽
鬼灯の[illegible]混[illegible]　卉
設て[illegible]　岳
間と[illegible]柱本　池
蓋へつく[illegible]の[illegible]葉　卉
娘[illegible]　楽
人の[illegible]根出[illegible]露[illegible]　池
[illegible]　岳
かけ[illegible]の通し[illegible]　楽
新[illegible]月[illegible]　卉
[illegible]の[illegible]後　岳
[illegible]　池
小[illegible]先[illegible]のつ[illegible]　卉
[illegible]　楽
[illegible]　池
遠く[illegible]　岳
[illegible]　楽
[illegible]の[illegible]　卉
[illegible]の[illegible]　岳
[illegible]　池
[illegible]　卉
[illegible]　楽
[illegible]　池
[illegible]　岳
[illegible]月[illegible]　楽
[illegible]　卉
[illegible]合[illegible]　岳

大服中に叢雲とけ合　池
ともめ人の八つ事お名寄か茄　升
暑りなるし法の秋のまの　乗
此ほう梅のむ螢の春やおねて　池
李とふくる雛の書り出ん　岳
蒸器炒薬蓋やはさる　宇池
すゝ筆て八重きくりけり日　清乗
尤り生八尋に渓の里る蟹まて　遊宇
性水らのよりは寺し出ると　釈外
材木の解度にあくらる　乗
未改らある大り化紙魚　池
着ちし仏海巣の未の秋の風　外
外く出るまの嫁の氣晴し　宇
直暑なりし今日暮の産か嫁　池
稲掃らる来る海の僧侶　乗
術山に倖出て積しおおひ堂　宇
御渕出とくるし大舟　外
坊主ありは屋嶋いつる暑の月　乗
春人まんおく枯法出来　池
放し香蝿七てあ奈りけり　外
東都まのる子の操姫き　宇
放り付る柳瀬のまのら余り　池
釘さる吉はへ来とそきよ　乗
妃か組て江戸の気は来る家たり　宇
天筆しそうかるて留　外
河を東そしてや坂を蛍の扉　乗
綰の仕出して頼る吉言場　池
さくくに川の文さこ友の木て　外
備りを余りし味噌乃大味　宇
姿りの法の貴き風呂の下　池
剥まてて付法の蛇に極まる　乗
近江路へ皆逆れまて打酒め　宇
立の有子山へ志られる　外
少炭実法しまるへて床の　乗
方ら衣てわ瑳篇抱きと　池

きりくと集て出る日本銭　外
大きくなまる鹿のねてつ付　宇
先ふりにかゝる不動の使ひの　池
蒼のさちて花ふくむ年　傘
茶はおちて守の仕出兜　宇
精料てさむまき物菜　外

燕子むつの娘めて羽よくる　九起
向は水鷄の宿近うて来る　映門
豆腐やの前夜ある露して　起
はれ花と以て手やり桜漆　門
月入て舟の陸り盤を舞り　起
捨給ふかゝり古歌をかゆる　門
ふかき葉に紫扇出かける柳　起
帰るゝ椽子座をも隔てゝく　門
おりちをつけて封をむ世え　起
節向の日脩縮ハ花ゝれを　門
うつてれなって香は不能も遠　起
おりくはりく陰のまて宮力売　門
内くは出るを参る旅の人　起
誰の手紙も書て麻精か　門
銭五百借る二十日過まで　起
積日浦も丸船沖のうねり宝　門
家は伝月秋寺秋もう涼事　起
比較も座し宮の角の据掛　門
寒生ゝ一を敷しもかし年　、
芳門出されていつぞ明るある　起
再帳のうち八幡胴もゆきかれ　門
何事は花も鹿の新月哉　起
垂虎よて何ともされ下座哉　門
命の延る命も都風呂　起
晴りて遊びて山鉾清　門
頼信は八幡宮のしる源氏　起
六人のこえ本家府居る藤乱札　門
高ね桂姓竹を燃て消を　起
為晴てあく角の昇りけり　門

枯葉の中にうもれ仏　起
鯖売も盆かさねては来ぬなりけり　門
氣につれて敷て唐茄子やる　起
丁度よい手前をかへて大杯る　門
盃れ麺の遊ぶり行く　起
古の宮路も磨き茶の衣　門
かさねとも数のよくさる鐘　起

仙臺橋晩望

大空の夜ハちひさし雪の峰　鳳郎
涼風待ちけり行く過て　姫山
掃子振子彼の方へかけて　晨支
走りは菊の大造すさく　素波
一里住て先へ聲る月明り　山
袷垂しみる汐の吹き川　郎
夜ねの手あり杉の中　波
田ゝ調子で浮る獅子舞　支
今時役の妙に連ハ東雲者　郎
蓑ハ垣掛けを圃カ妹　山
秋深て下駄子は珠数の房　支
嘸くしめ白との津まる　波
の月の頃しばし行く旅の人　山
萩は庭にも茶を汲て出し　郎
ちのとみ屋の手をも　波
おもしと舩は下る川口　支
擾世の事斎估を説しむ　郎
ねかく伸る芝の茅の丈　山
磨擦も世すて雲雀の鳴やん　支
若労もあけ頭女にかくさこ　波
相見えし雉の語の画明けて　山
ゆり起され風呂の茅外　郎
積ても夜の牛あり春秋の空　波
疊くし以上ニ吾カ謹拜　支
緑錦かな出ぬ道風の素衣　山
吹き来くを起きあけし鶏の　郎
萬橘をかゝへてよ世の軽きて　支
命さしけるゆくさり於上　波

移くてくるやく月の渡る比　山
新蕎麦をやかく賣せる　郎
はおての待合案山子の御宴　文
穴の付て出る庵不　山
やき昔き古稿文の口にわくれける　郎
生まるゝ牛のこれ様なり　文
きの字とも相生の年くちの世は　波
汐干の方へ走るゝ葉　山
赤る程く鮮の頃夜子炊　全池
晴て時の前茶新麦　狀外
當川の岸にも越荷物にくるくて　水兵
焼くわくもとにする後の鑿　池
蝶迄にさしてる名をきる月の昨　外
仕舞帯の子小豆羹しきる　兵
屏風く風にくるめる火を燃　池
大きう鯛をはせる雛やく　外
有光も葉りわさき芳情くる　兵
借くし所に家をも出まして出ん
場所かく流石たる宮座入
志賀でまうり出まの神明
試子も道に螺せる新生菊
何處の羽毛もねる秋中
来けに文時の追の屋の月　兵
根まてせる名を見の釣水不　池
夏買の傍ますつくしぬ鯵　外
湯まよ屋くらる貝嵜　兵
味噌豆のかく茶る湯出に　池
折ゝ所けゝきぬ庵け　外
立所丈ヶ姫の療治の所為き　兵
さし図くる綿の糸割　池
物ちれゝにもともなぬ空達ゝ　外
杜丈ゑくゝ鯱の尾るなり　兵
手械の竿をはつて座華先　池
宮ゝ家への寄せる御被　外
油中の米を進ぬるやりを　兵

つり緒のうへ行衣めうけ時　池

やのくところ鴨の子好水鶏れ　外

出かへりまある茶屋の出ずね　弁

足代ハ勝手の葭の尾ゝの人　池

涼ハ手近く声の源の石　外

利のある葬の提灯飾れど　弁

箒根浩出る大鐘のゆく　池

春くても晴見る出一本　外

見ての花錦しかくか　弁

天保十三年　壬寅春

書肆　江戸本石町十軒店　万笈堂英大助

松軒

和學園短大圖書　第6536號　受入　36.3.14

天保十三年壬寅春新刻

三都發行書肆

京寺町通松原下ル　勝村治右衛門

心斎橋安堂寺町　秋田屋太右衛門

同北久太郎町　河内屋喜兵衛

通油町　鶴屋喜右衛門

芝神明前　岡田屋嘉七

中橋廣小路　西宮弥兵衛

通弐丁目　小林新兵衛

同所　山城屋佐兵衛

同壹丁目　須原屋茂兵衛

同四丁目　同　佐助

浅艸茅町　同　伊八

本石町十軒店　英　大助